

# 裾野市富沢・桃園の遺跡群II

第二東名土3地点・C R 36地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

裾野市-10

(第1分冊)

富沢内野山I西遺跡（第二東名土3地点）

富沢内野山III北遺跡（第二東名C R 36地点）

富沢内野山IV西遺跡（第二東名C R 36地点）

富沢内野山V遺跡（第二東名C R 36地点）

2013

中日本高速道路株式会社東京支社  
静岡県埋蔵文化財センター

# 序

この度『裾野市富沢・桃園の遺跡群II』が刊行されました。これは、第二東名高速道路建設に伴い発掘調査が実施されました富沢内野山I西遺跡(土3地点)、富沢内野山III北遺跡・富沢内野山IV西遺跡・富沢内野山V遺跡(以上C R36地点)の報告書です。すでに第二東名建設事業に伴う調査で塚松遺跡(№144地点)、入ノ洞B遺跡(№144-2地点)、内野山V遺跡(№144-3地点)の調査成果が『裾野市富沢・桃園の遺跡群』として平成20年に刊行されており、のことからも裾野市富沢・桃園には多くの遺跡が展開している事をご理解頂けるものと考えます。

上記の遺跡群は愛鷹山東南麓に位置し、旧石器時代から縄文時代にかけて、人々の生業の有り様をうかがう事ができます。特に富沢内野山I西遺跡では静岡県内でも希少な縄文時代草創期の土器が多く出土しました。沼津市葛原沢遺跡や伊豆の国市(旧大仁町)仲道A遺跡に並び、静岡県東部における土器を使用し始めた先人たちの痕跡を物語る貴重な成果であります。また富沢内野山III北遺跡の縄文時代中期の住居跡から出土した炭化植物種子は、私たちに活発な食糧採集活動を想起させましょう。これらのようないい成果が遺跡周辺の調査成果と相俟って、郷土文化の再発見に貢献できるものと確信しております。本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、現地調査及び資料整理並びに本書の作成にあたり、中日本高速道路株式会社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年3月

静岡県埋蔵文化財センター所長  
勝田順也

# 例　　言

1 本書は静岡県裾野市富沢字内野山518-1他に所在する富沢内野山Ⅰ西遺跡(土3地点)と、裾野市桃園、富沢地内に所在する富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡・富沢内野山Ⅴ遺跡(以上C R36地点)の発掘調査報告書である。

2 現地調査は第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社(旧日本道路公団静岡建設局)の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課(旧文化課)の指導のもと、裾野市の協力を得て、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。資料整理は同研究所の業務を引き継いだ静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査期間は以下の通りである。

富沢内野山Ⅰ西遺跡(土3地点)

確認調査 平成14年1～3月、平成15年2月 実掘表面積1,050m<sup>2</sup>

本調査 平成14年8月～平成15年3月、平成15年4～7月 実掘表面積5,771m<sup>2</sup>

資料整理 平成23年4月～平成25年3月

富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡・富沢内野山Ⅴ遺跡(以上C R36地点)

確認調査 平成14年2～3月、平成14年5～6月 実掘表面積456m<sup>2</sup>

本調査 平成14年4月～平成15年1月 実掘表面積8,380m<sup>2</sup>

資料整理 平成23年4月～平成25年3月

4 調査体制は以下のとおりである。

平成13年度(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所)

所長兼副理事長 斎藤 忠 副所長兼理事 山下 晃 総務部長兼常務理事 余田徳幸

総務課長 本杉昭一 経理専門員 稲葉保幸 総務係長 山本広子 会計係長 大橋 薫

調査研究部長 佐藤達雄 調査研究部次長兼資料課課長 栗野克巳 保存処理室長 西尾太加二

調査研究部次長兼調査研究一課課長 及川 司 調査研究二課長 篠原修二

調査研究三課長 飯塚晴夫 主任調査研究員 前嶋秀張 調査研究員 大林 元

平成14年度(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所)

所長兼副理事長 斎藤 忠 副所長兼理事 飯田英夫 総務部長兼常務理事 余田徳幸

総務課長 本杉昭一 経理専門員 稲葉保幸 総務係長 山本広子 会計係長 大橋 薫

調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長兼資料課課長 栗野克巳 保存処理室長 西尾太加二

調査研究部次長兼調査研究一課課長 中嶋郁夫 調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三

調査研究三課長 篠原修二 調査研究四課長 足立順司 主任調査研究員 前嶋秀張

調査研究員 鈴木秀樹・後藤正人・望月由佳子・富田 孝・大林 元

平成15年度(財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所)

所長兼副理事長 斎藤 忠 副所長兼理事 飯田英夫 総務部長兼常務理事 余田徳幸

総務部次長兼総務課長 鎌田英巳 経理専門員 稲葉保幸 総務係長 山本広子

会計係長 野島尚紀 調査研究部長 山本昇平 調査研究部次長兼資料課課長 栗野克巳

保存処理室長 西尾太加二 調査研究部次長兼調査研究一課課長 中嶋郁夫

調査研究部次長兼調査研究二課長 佐野五十三 調査研究三課長 足立順司

主任調査研究員 前嶋秀張 調査研究員 村松利彦

平成23年度(静岡県埋蔵文化財センター)

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 主幹兼事業係長 村松弘文 総務係長 潤みやこ  
調査課長 中鉢賢治 調査第一係長 富樫孝志 調査第二係長 溝口彰啓

常勤嘱託員 西田真由子

平成24年度(静岡県埋蔵文化財センター)

所長 勝田順也 次長兼総務課長 八木利眞 主幹兼事業係長 前田雅人 総務係長 潤みやこ  
調査課長 中鉢賢治 調査第一係長 富樫孝志 調査第二係長 溝口彰啓 主査 勝又直人

5 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1～5章 西田真由子・勝又直人 第6章 勝又直人

6 本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7 当該調査において行った外部への委託・依頼は下記のとおりである。

(1)現地調査

富沢内野山I西遺跡

確認調査その1 挖削業務委託 株式会社渡辺建設 測量業務委託 株式会社バスコ

本調査I 挖削業務委託 株式会社小俣組 測量業務委託 株式会社バスコ

本調査II 挖削業務委託 株式会社山久建設 測量業務委託 株式会社バスコ

富沢内野山III北遺跡・富沢内野山IV西遺跡・富沢内野山V遺跡

確認調査その1 挖削業務委託 株式会社渡辺建設 測量業務委託 株式会社バスコ

本調査I 挖削業務委託 株式会社小俣組 測量業務委託 株式会社バスコ

確認調査その2 挖削業務委託 株式会社山久建設 測量業務委託 株式会社バスコ

(2)資料整理

遺構図面版下作成 株式会社バスコ

石器実測・トレース・観察表作成・三次元土器計測 株式会社ラング

放射性炭素年代測定(AMS測定)・樹種同定 株式会社加速器分析研究所

放射性炭素年代測定(AMS測定) 小林謙一氏(中央大学准教授)、坂本 稔氏(国立歴史民俗博物館)

石器石材同定 森嶋富士夫氏

出土黒曜石産地同定 望月明彦氏(独立行政法人沼津工業高等専門学校名誉教授)

出土繩文種実同定・樹種同定 佐々木由香氏、バンダリ・スダルシャン氏(株式会社パレオ・ラボ)

整理作業・保存処理業務委託 株式会社パソナ

8 整理作業では以下の方々に御指導・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

池谷信之・勝又 淳・小崎 晋・佐藤祐樹・堤 隆・前嶋秀張(五十音順・敬称略)

9 発掘調査の資料は、静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

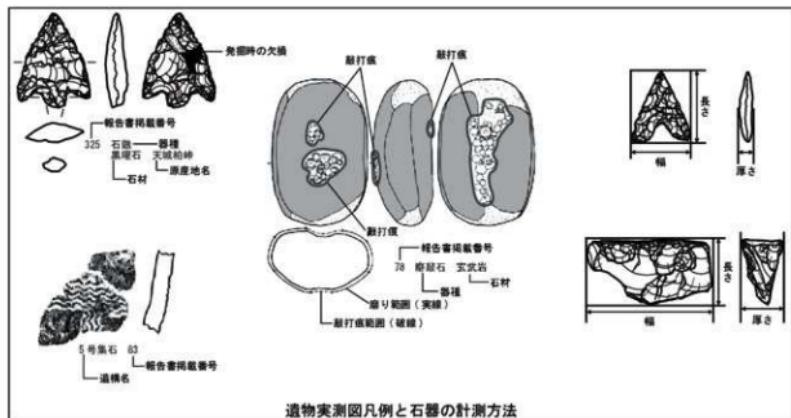
## 凡 例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1 調査区の方眼設定は、国土座標(平面直角座標VII系)の(-92,320,35,960)を(A, 1)とし、富沢内野山I西遺跡から、南北方向に78～99、0～51までの74ラインを、東西方向にA～Z、AA～AZ、BA～BZ、CA～CEの83ラインをそれぞれ10mごとに設定した。座標は平成15年度改訂以前の旧座標を使用している。

2 各グリッドの呼称は、該当するライン交点の座標名を採用した。例えば、ライン交点(B, 2)を南

- 西角とする10m×10mの範囲は「B 2 グリッド」と記載した。
- 3 出土遺物は通し番号を付して取り上げ、これを遺物番号とした。
  - 4 剥片類の分類につき、碎片は最大長10mm未満の剥片とし、石刃は長さが幅の2倍以上ある剥片、細石刃は幅が5mm未満の石刃という基準を設けた。
  - 5 黒曜石の産地は、原則として望月明彦氏の分析基準に従い、これらと接合する未分析資料も含めて「～産黒曜石」と記載した。
  - 6 石器の実測は、断面と打面の部分展開図を除き、第三角投影図法に準拠した。
  - 7 石器実測図の縮尺は、1/4~4/5である。
  - 8 研磨痕(擦痕)は、磨製石斧についてはフリーハンドの略直線で表現した。
  - 9 碓群の設定は、3点以上の大型礫が集中していることを基準にした。
  - 10 碓群実測図の縮尺は1/80である。
  - 11 遺構番号は、人為によると推定される土中の掘り込みについて設定した。
  - 12 碓群以外の遺構実測図及び器種別石材別分布図の縮尺は1/40~1/20である。
  - 13 文化層の設定は、安定的な礫群を基準にした。文化層番号は層位の低い方から順にローマ数字で「第一文化層」とした。
  - 14 土坑、礫、石器の各分布図の縮尺は、1/1,500~1/100とする。
  - 15 土器の実測図及び拓本の縮尺は、1/3および1/2である。
  - 16 本文中に用いる色彩に関する用語、記号は新版「標準土色帖」(農林水産技術会議事務局監修1992)に準拠した。
  - 17 本書挿図中の記号略号や、一覧表中の計測は以下の基準で行った。



遺物実測図凡例と石器の計測方法

# 目 次

## 第1章 総論

第1節 調査の経緯と経過 .....	1
第2節 調査の方法 .....	9
第3節 遺跡周辺の環境 .....	11

## 第2章 富沢内野山I西遺跡(土3地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況 .....	17
第2節 旧石器時代の遺構と遺物 .....	21
第3節 繩文時代の遺構と遺物 .....	53
第4節 弥生時代以降の遺構と遺物 .....	139

## 第3章 富沢内野山III北遺跡(C R36地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況 .....	143
第2節 旧石器時代の遺物 .....	145
第3節 繩文時代の遺構と遺物 .....	149
第4節 中近世以降の遺構 .....	195

## 第4章 富沢内野山IV西遺跡(C R36地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況 .....	198
第2節 旧石器時代の遺構と遺物 .....	200
第3節 繩文時代の遺構と遺物 .....	205
第4節 中近世以降の遺構と遺物 .....	230

## 第5章 富沢内野山V遺跡(C R36地点)

第1節 基本層序と土層の堆積状況 .....	236
第2節 旧石器時代の遺構と遺物 .....	239
第3節 繩文時代の遺構と遺物 .....	245
第4節 弥生時代以降の遺構と遺物 .....	280

## 第6章 総括 .....

抄録

奥付

# 挿図目次

## 第1章 総論

第1図 遺跡群の位置 .....

第3図 土3地点グリッド配置・

テストピット・調査区位置図 .....

第2図 土3地点・C R36地点・

第4図 C R36地点グリッド配置・

埋蔵文化財包蔵地相関図 .....

調査区位置図 .....

第5図	C R36地点テストピット配置図	5	第44図	縄文時代土坑⑤	67
第6図	周辺遺跡位置図	14	第45図	縄文時代土坑⑥	68
第2章 富沢内野山I西遺跡(土3地点)			第46図	縄文時代土坑出土遺物	69
第7図	富沢内野山I西遺跡基準土層図	18	第47図	縄文時代炉跡	69
第8図	土3地点土層柱状図	19	第48図	縄文土器第I群分布図	72
第9図	第I文化層石器出土状況	20	第49図	縄文土器第II群1類分布図	72
第10図	第I文化層器種別分布図	22	第50図	縄文土器第II群2類分布図	73
第11図	第I文化層石材別分布図	22	第51図	縄文土器第II群3類分布図	73
第12図	第I文化層砾群	23	第52図	縄文土器第II群4類分布図	74
第13図	第I文化層石器	24	第53図	縄文土器第II群5類分布図	74
第14図	第II文化層石器出土状況	26	第54図	縄文土器第I群～第II群1類	75
第15図	第II文化層器種別分布図	28	第55図	縄文土器第II群1・2類	76
第16図	第II文化層石材別分布図	28	第56図	縄文土器第II群2類	77
第17図	第II文化層1～3号砾群	29	第57図	縄文土器第II群3・4類	78
第18図	第II文化層4～6号砾群	30	第58図	縄文土器第II群4類	80
第19図	第II文化層石器①	32	第59図	縄文土器第III群分布図	80
第20図	第II文化層石器②	33	第60図	縄文土器第IV群1類分布図	82
第21図	第II文化層石器③	34	第61図	縄文土器第IV群2類分布図①	83
第22図	第II文化層石器④	35	第62図	縄文土器第IV群2類分布図②	83
第23図	第III文化層石器出土状況	36	第63図	縄文土器第IV群2類分布図③	84
第24図	第III文化層器種別分布図	38	第64図	縄文土器第IV群3類分布図	85
第25図	第III文化層石材別分布図	39	第65図	縄文土器第IV群4類分布図	86
第26図	第III文化層1・2号砾群	40	第66図	縄文土器第IV群5類分布図	87
第27図	第III文化層3～5号砾群	40	第67図	縄文土器第III群～第IV群2類	88
第28図	第III文化層石器①	43	第68図	縄文土器第IV群2類	89
第29図	第III文化層石器②	44	第69図	縄文土器第IV群2～4類	90
第30図	第IV文化層石器出土状況	46	第70図	縄文土器第IV群4類～第V群	91
第31図	第IV文化層器種別分布図	47	第71図	縄文土器第V群分布図	92
第32図	第IV文化層石材別分布図	47	第72図	縄文土器第VI群1類分布図	94
第33図	第IV文化層石器	48	第73図	縄文土器第VI群2類分布図	94
第34図	縄文時代遺構位置図	54	第74図	縄文土器第VI群3類分布図	95
第35図	縄文時代集石①	56	第75図	縄文土器第VII群分布図	95
第36図	縄文時代集石②	57	第76図	縄文土器第VII群分布図	96
第37図	縄文時代集石出土遺物①	58	第77図	縄文土器第VI群～第VII群	97
第38図	縄文時代集石出土遺物②	60	第78図	縄文土器第IX群分布図	100
第39図	縄文時代集石出土遺物③	61	第79図	縄文土器第X群1類分布図	100
第40図	縄文時代土坑①	62	第80図	縄文土器第X群2類分布図	101
第41図	縄文時代土坑②	63	第81図	縄文土器第IX群～第X群1類	102
第42図	縄文時代土坑③	64	第82図	縄文土器第X群2類～第XI群2類	
第43図	縄文時代土坑④	66			103
			第83図	縄文土器第X群3類分布図	104

第84図	縄文土器第XI群 3類	105	第122図	縄文時代 1号住居跡	150
第85図	縄文時代草創期石器①	110	第123図	縄文時代 1号住居跡	
第86図	縄文時代草創期石器②	111		遺物出土状況	151
第87図	縄文時代草創期石器③	112	第124図	縄文時代 1号住居跡	
第88図	縄文時代草創期石器分布図	112		出土遺物①	152
第89図	石器分布図	114	第125図	縄文時代 1号住居跡	
第90図	尖頭器・尖頭器未製品分布図	115		出土遺物②	154
第91図	石器未製品分布図	115	第126図	縄文時代 1号住居跡	
第92図	楔形石器分布図	115		出土遺物③	155
第93図	尖頭器・尖頭器未製品・石器	116	第127図	縄文時代 2・3号住居跡	156
第94図	石器・石器未製品	117	第128図	縄文時代 2・3号住居跡	
第95図	スクレイバー類分布図	118		出土遺物	157
第96図	スクレイバー類	119	第129図	縄文時代 4号住居跡と	
第97図	スクレイバー類・石匙・楔形石器	120		出土遺物①	160
第98図	石核分布図	122	第130図	縄文時代 4号住居跡	
第99図	打製石斧分布図	123		遺物出土状況と出土遺物②	161
第100図	石核①	124	第131図	縄文時代 4号住居跡	
第101図	石核②	125		出土遺物③	162
第102図	石核・打製石斧	126	第132図	縄文時代 4号住居跡	
第103図	打製石斧・礫器	127		出土遺物④	163
第104図	磨敲石類分布図	128	第133図	縄文時代土坑①	164
第105図	台石・石皿類分布図	129	第134図	縄文時代土坑②と	
第106図	磨敲石類①	130		土坑出土遺物	165
第107図	磨敲石類②	131	第135図	縄文時代小穴	166
第108図	磨敲石類・台石・石皿類	132	第136図	縄文土器第I群分布図	170
第109図	台石・石皿類他	133	第137図	縄文土器第II群分布図	170
第110図	剥片他分布図	134	第138図	縄文土器第III群 1・2類分布図	171
第111図	砥石・石錐・石匙・原石分布図	136	第139図	縄文土器第III群 3類分布図	171
第112図	礫器・異形部分磨製石器分布図	136	第140図	縄文土器第I群～第III群 1～3類	
第113図	古代以降の遺構位置図	140			172
第114図	古代以降の遺構	141	第141図	縄文土器第III群 3・4類	174
第115図	弥生時代以降の遺物	142	第142図	縄文土器第III群～第VI群	175
 第3章	富沢内野山Ⅲ北遺跡(C R36地点)		第143図	縄文土器第III群 4類分布図	176
第116図	富沢内野山Ⅲ北遺跡		第144図	縄文土器第III群 5類分布図	176
	基準土層図	144	第145図	縄文土器第IV群分布図	178
第117図	旧石器時代石器出土状況	146	第146図	縄文土器第V群分布図	178
第118図	旧石器時代石器	146	第147図	縄文土器第VI群分布図	179
第119図	縄文時代草創期石器出土状況	147	第148図	縄文土器第VII群分布図	180
第120図	縄文時代草創期石器	147	第149図	縄文土器第VII群～第VIII群・土製品	
第121図	縄文時代遺構位置図	148			181
			第150図	石器・石器未製品分布図	186

第151図	楔形石器分布図	186	第187図	スクレイパー類・楔形石器・石刃 分布図	225
第152図	スクレイパー類分布図	188	第188図	剥片類分布図	226
第153図	石匙・石核他分布図	188	第189図	打製石斧・礫器・台石・石皿類・ 砥石分布図	227
第154図	剥片類分布図	188	第190図	磨敲石類分布図	228
第155図	石鏃・石鏃未製品・ スクレイパー類・石匙	189	第191図	中近世土坑①	231
第156図	打製石斧・磨製石斧分布図	190	第192図	中近世土坑②	232
第157図	磨敲石類分布図	190	第193図	中近世土坑と道路状遺構	233
第158図	楔形石器・打製石斧	191	第194図	中近世土坑と溝状遺構	234
第159図	打製石斧・磨製石斧	192	第195図	中近世以降の遺構位置図	235
第160図	磨敲石類	193	第196図	中近世土坑③	235
第161図	中近世溝状遺構	196			
第162図	中近世遺構位置図	197			
第163図	中近世土坑	197			
第4章	富沢内野山IV西遺跡(C R36地点)		第5章	富沢内野山V遺跡(C R36地点)	
第164図	富沢内野山IV西遺跡 基準土層図	199	第197図	富沢内野山V遺跡 基準土層図	237
第165図	旧石器時代土坑	201	第198図	旧石器時代石器出土状況	237
第166図	旧石器時代石器出土状況	202	第199図	旧石器時代1~5号縄群	238
第167図	旧石器時代石器	203	第200図	旧石器時代器種別分布図	240
第168図	縄文時代草創期石器出土状況	204	第201図	旧石器時代石材別分布図	241
第169図	縄文時代草創期石器	204	第202図	旧石器時代石器	242
第170図	縄文時代遺構分布図	206	第203図	縄文時代集石	246
第171図	縄文時代集石	207	第204図	縄文時代遺構位置図	247
第172図	縄文時代炉跡	208	第205図	縄文時代炉跡	248
第173図	縄文時代土坑①	210	第206図	縄文時代土坑	249
第174図	縄文時代土坑②	211	第207図	縄文時代遺構内出土遺物	249
第175図	縄文時代溝状遺構	211	第208図	縄文土器第I群1類分布図	252
第176図	縄文土器第I群1類分布図	212	第209図	縄文土器第I群2類分布図	252
第177図	縄文土器第I群2類分布図	212	第210図	縄文土器第I群3類分布図	252
第178図	縄文土器第II群・第III群分布図	214	第211図	縄文土器第II群分布図	253
第179図	縄文土器第IV群分布図	214	第212図	縄文土器第III群 1・2類分布図	253
第180図	縄文土器第I群~第III群	215	第213図	縄文土器第III群3類分布図	253
第181図	縄文土器第V群分布図	216	第214図	縄文土器第I群1・2類	254
第182図	縄文土器第IV群~第VI群	218	第215図	縄文土器第I群2・3類・第II群	255
第183図	石鏃・石鏃未製品分布図	220	第216図	縄文土器第III群1~4類	256
第184図	石鏃・石鏃未製品・ スクレイパー類・打製石斧	222	第217図	縄文土器第III群4~6類分布図	258
第185図	打製石斧・礫器・磨敲石類	223	第218図	縄文土器第IV群分布図	258
第186図	磨敲石類	224	第219図	縄文土器第V群分布図	258

第220図	縄文土器第VI群分布図	259	第236図	石核②	271
第221図	縄文土器第VII群分布図	259	第237図	打製石斧・剥片・礫器	272
第222図	縄文土器第VIII群分布図	259	第238図	磨敲石類①	273
第223図	縄文土器第III群5・6類～第IX群	260	第239図	磨敲石類②	274
第224図	縄文時代草創期石器出土状況	264	第240図	磨敲石類・台石・石皿類	275
第225図	縄文時代草創期石器	264	第241図	台石・石皿類・石錐・石棒	276
第226図	石鎚・石鎚未製品分布図	265	第242図	台石・石皿類分布図	277
第227図	スクレイバー類分布図	265	第243図	打製石斧・礫器・石錐・石棒分布図	277
第228図	楔形石器分布図	265	第244図	弥生時代以降の遺構位置図	281
第229図	石鎚・石鎚未製品	266	第245図	弥生時代以降の集石	281
第230図	スクレイバー類	267	第246図	弥生時代後期～古墳時代前期遺構群	282
第231図	スクレイバー類・楔形石器・石核	268	第247図	弥生時代以降土器	283
第232図	石核分布図	269			
第233図	磨敲石類分布図	269	第6章	総括	
第234図	剥片類分布図	269	第248図	富沢内野山I西遺跡における	
第235図	石核①	270		縄文時代草創期の土器	285

## 挿表目次

第1章	総論	(第I～III文化層) ..... 51～52			
第1表	現地調査工程表	7	第16表	縄文時代遺構計測表	70
第2表	周辺遺跡一覧表	15～16	第17表	縄文時代遺構内出土石器計測表	70
			第18表	縄文時代遺構内出土土器観察表	71
第2章	富沢内野山I西遺跡(土3地点)		第19表	縄文時代遺構外出土土器	
第3表	第I文化層属性表	25		観察表	106～108
第4表	第I文化層石器組成表	25	第20表	縄文時代草創期石器組成表	112
第5表	第I文化層(掲載分)石器組成表	25	第21表	縄文時代遺構外出土石器組成表	136
第6表	第II文化層属性表	31	第22表	縄文時代遺構外出土	
第7表	第II文化層石器組成表	35		石器計測表	137～138
第8表	第II文化層(掲載分)石器組成表	35	第23表	古代以降の遺構計測表	140
第9表	第III文化層属性表	42	第24表	弥生時代以降土器観察表	140
第10表	第III文化層石器組成表	42	第25表	銅製品観察表	140
第11表	第III文化層(掲載分)石器組成表	42			
第12表	細石刃石器組成表	45	第3章	富沢内野山III北遺跡(C R36地点)	
第13表	細石刃(掲載分)石器組成表	45	第26表	旧石器時代石器一覧表	145
第14表	旧石器時代石器一覧表		第27表	旧石器時代砾一覧表	145
	(第I～III文化層)	49～51	第28表	旧石器時代砾属性表	145
第15表	旧石器時代砾一覧表		第29表	縄文時代草創期石器組成表	147

第30表	縄文時代住居跡計測表	167	第47表	縄文時代遺構出土土石器計測表	229
第31表	縄文時代土坑・小穴計測表	167	第48表	中近世以降の遺構計測表	230
第32表	縄文時代遺構内出土 土器観察表	167～168	第5章	富沢内野山V遺跡(C R36地点)	
第33表	縄文時代遺構内出土石器計測表	168	第49表	旧石器時代礫属性表	243
第34表	縄文時代遺構外出土 土器観察表	184～185	第50表	旧石器時代石器組成表	243
第35表	縄文時代石器組成表	194	第51表	旧石器時代石器一覧表	244
第36表	縄文時代遺構外出土石器計測表	194	第52表	旧石器時代礫一覧表	244
第37表	中近世遺構計測表	195	第53表	縄文時代遺構計測表	249
			第54表	縄文時代遺構内出土土器観察表	249
			第55表	縄文時代遺構外出土 土器観察表	261～262
第4章	富沢内野山IV西遺跡(C R36地点)		第56表	縄文時代遺構外出土石器組成表	263
第38表	旧石器時代土坑計測表	201	第57表	縄文時代草創期石器組成表	264
第39表	旧石器時代石器一覧表	201	第58表	縄文時代遺構外出土 石器計測表	278～279
第40表	旧石器時代礫属性表	201	第59表	弥生時代以降の遺構計測表	283
第41表	旧石器時代礫一覧表	201	第60表	弥生時代以降遺構内出土 土器観察表	283
第42表	旧石器時代石器組成表	201	第61表	弥生時代以降遺構外出土 土器観察表	283
第43表	縄文時代遺構計測表	207			
第44表	縄文時代遺構外出土土器観察表	219			
第45表	縄文時代草創期石器組成表	229			
第46表	縄文時代石器組成表	229			

## 挿写真目次

写真1	土3地点作業風景	10	写真2	C R36地点作業風景	10
写真3	土器復原作業	10	写真4	土器実測作業	10

# 第1章 総論

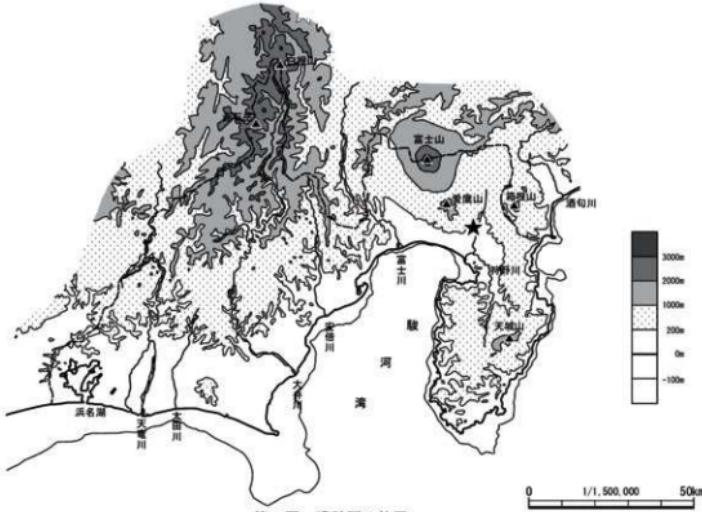
## 第1節 調査の経緯と経過

### 1 第二東名高速道路建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いの経緯

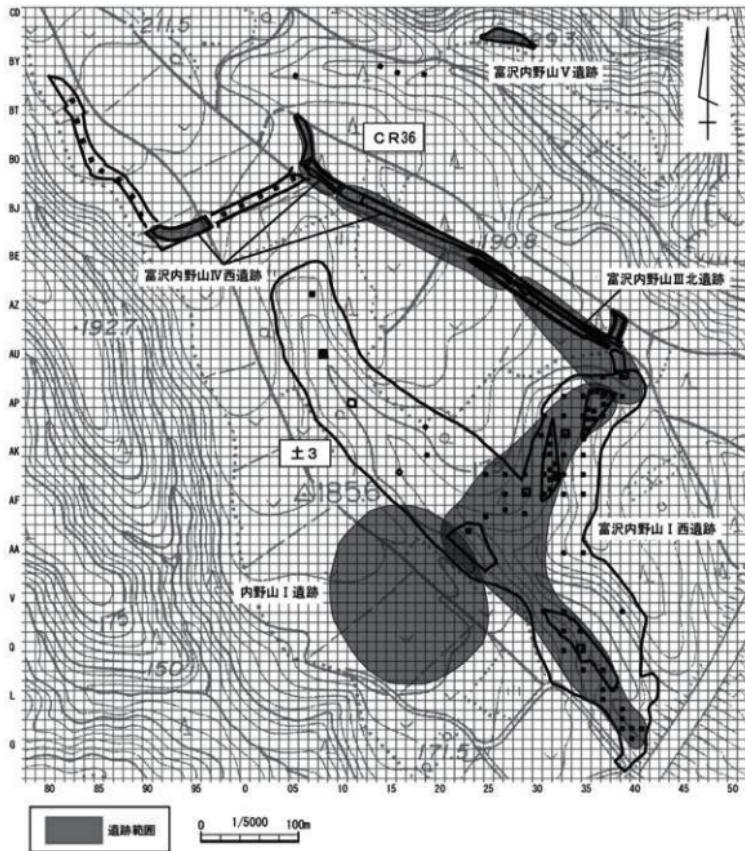
当該遺跡群の発掘調査は第二東名高速道路建設に伴う事業である。この第二東名建設が東名高速道路等の混雑緩和対策のため、国の道路審議会において建議されたのは昭和62年のことである。第四次全国総合開発計画の閣議決定、国土開発幹線自動車道建設法の一部改正等の後、平成元年1月に開催された第28回国土開発幹線自動車道建設審議会において、神奈川県横浜市から愛知県東海市に至る第二東名高速道路が計画された。この基本計画の策定により、静岡県は第二東名建設推進室内連絡会議を平成元年12月に設置した。この会議には静岡県教育委員会文化課が協議に参加している。平成3年には第二東名の基本計画にかかり文化財等を含む環境影響調査が実施され、他の公共事業及び地域開発計画との調整が図られた。この結果、駿東郡長泉町から引佐郡引佐町までの都市計画決定が告示されている。

当該計画に係る埋蔵文化財の分布状況の把握作業は、この環境影響調査と並行して実施されている。第二東名建設に関する調査の指示を受けた日本道路公団は、文化庁に平成4年2月17日付で通知。また同年5月11日付で日本道路公団東京第一建設局長から静岡県教育委員会教育長宛てに、第二東名建設予定地内の埋蔵文化財の分布調査が依頼された。そして同年8月27日付で日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長から、静岡県教育委員会教育長宛てに「第二東海自動車道の埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされた。

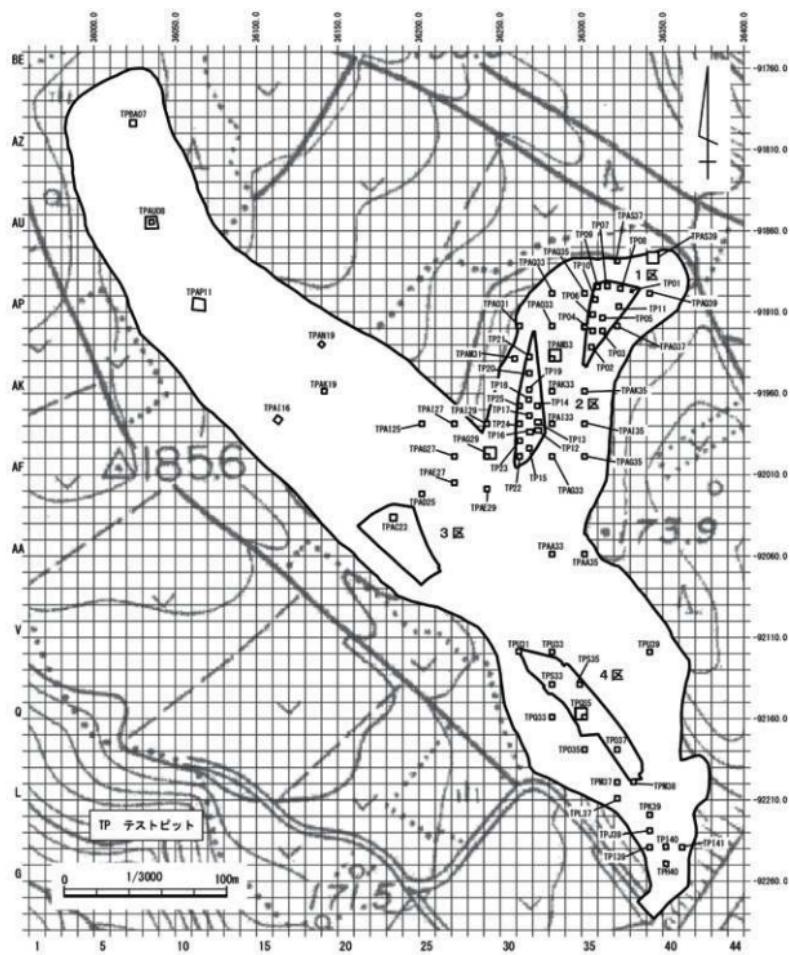
これらを受けて静岡県教育委員会は平成4年9月29日に関係する市町村教育委員会担当者を招集し、



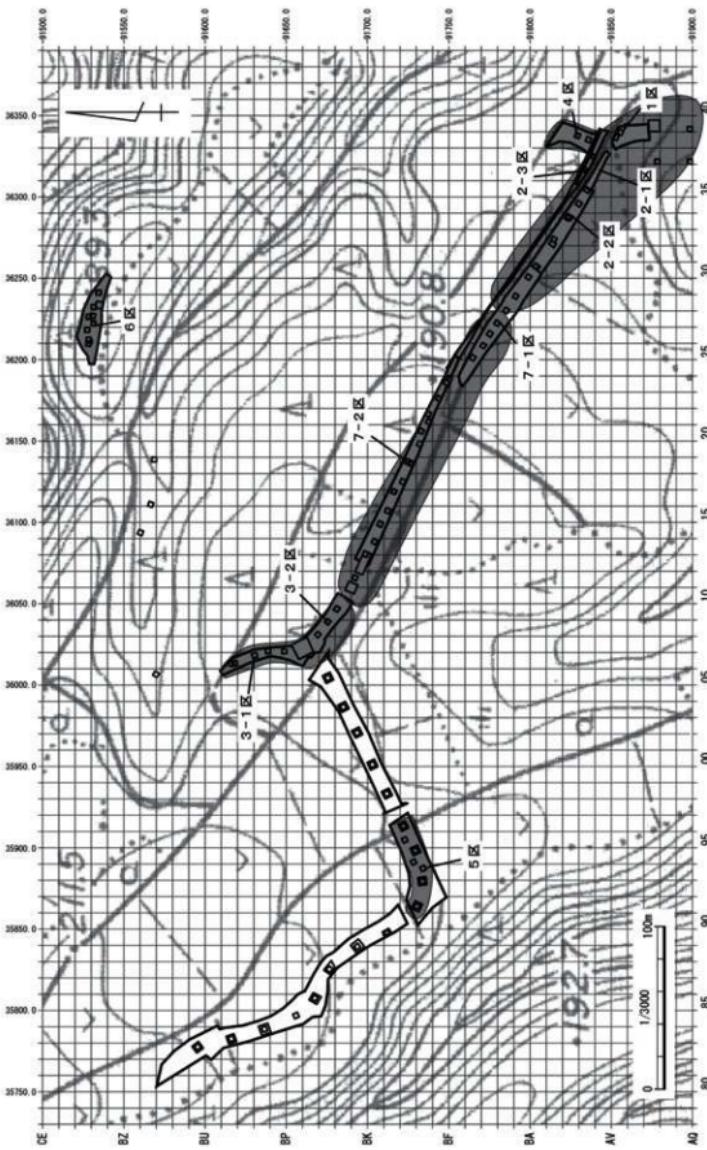
第1図 遺跡群の位置



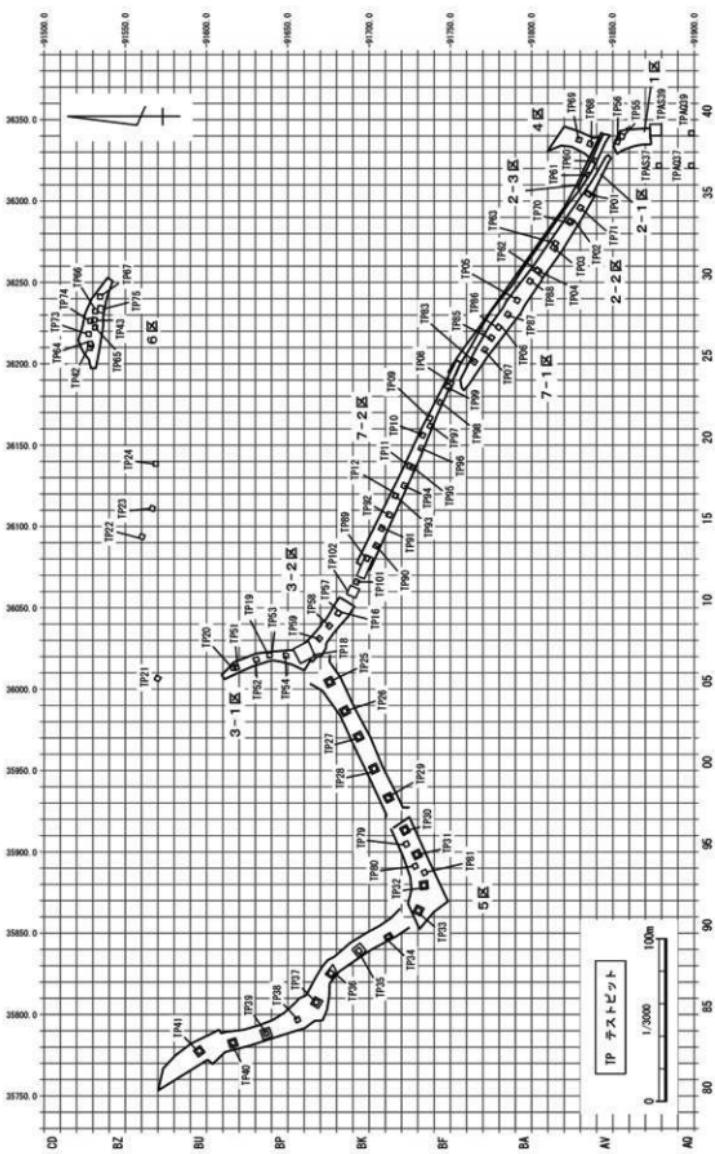
第2図 土3地点・CR36地点・埋蔵文化財包蔵地相關図



第3図 土3地点グリッド配置・テストビット・調査区位置図



第4図 CR36地点グリッド配置・調査区位置図



第5図 CR36 地点テストトピック配置図

第二東名路線内の埋蔵文化財踏査連絡会を設け、第二東名路線における埋蔵文化財の所在を、市町村教育委員会に照会した。寄せられたその照会に対する回答につき更に協議を深め、その結果を平成5年3月18日付で静岡県教育委員会教育長から日本道路公団東京第一建設局静岡調査事務所長宛てに回答している。この時点で調査対象箇所は136箇所、調査対象総面積が1,453,518m<sup>2</sup>である。

その後、日本道路公団に対し、平成5年11月19日付の長泉町から引佐町までの施工命令が出された。これを受けて日本道路公団東京第一建設局、静岡県土木部高速道路建設課、静岡県教育委員会文化課が、当該路線内の埋蔵文化財調査の進め方等について協議を開始した。調査対象範囲の確定、個々の遺跡の取り扱いにつき検討を加えるとともに、日本道路公団が財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所に対して、発掘調査実施の委託を行うことを確認している。しかし膨大な調査量を短期間で消化するための調査体制の整備について大きな課題となっている。

平成6年度は静岡県教育委員会文化課が当該路線内の調査対象箇所の状況調査を実施している。またパーキングエリアやサービスエリア建設予定地の踏査を関係市町村教育委員会に依頼している。平成4年度末に示された調査対象箇所及び調査対象総面積に、これらの状況調査・踏査結果等を集成・再検討し、調査対象地点133箇所、調査対象総面積1,286,759m<sup>2</sup>となっている。なお当該年度中に建設省の依頼を受けて、長泉町から御殿場市までの踏査を行い、調査対象地点のリストアップがなされている。

平成7年には路線の一部で幅杭の打設が開始され、埋蔵文化財の発掘調査について具体的に調整が可能な環境となり、同年12月13日に日本道路公団静岡建設所と静岡県教育委員会文化課は「第二東名開通埋蔵文化財連絡調整会議」第1回会議を開催した。その後、この会議を通して埋蔵文化財に係る取り扱いの詳細の協議が可能となっていく。

平成8年9月24日付日本道路公団静岡建設局(静岡建設所が改組)及び静岡県教育委員会は埋蔵文化財の取り扱いに関する確認書を締結し、同月25日付で財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所を加えた三者により、第二東名建設に係る埋蔵文化財調査の実施についての協定書を締結し、年度後半に静岡県西部地区から確認調査が実施され、平成9年度に至っては長泉町から引佐町までの調査対象地点で本格的な調査が開始され始めている。

一方、長泉町から御殿場市までの第二東名建設に係る調査開始の指示が平成9年1月31日付で日本道路公団に出され、同年12月25日付で施工命令が出されている。

平成10年9月2日付で日本道路公団静岡建設局長から静岡県教育委員会教育長宛てに「埋蔵文化財包蔵地の所在の有無について」の照会がなされている。平成6年度に既に調査対象地点が提示されていたが、この照会により、関係する市町教育委員会に対して平成10年9月25日付で再踏査の依頼を行うと同時に、同年10月2日に踏査に関する打合せが行われた。関係市町教育委員会からの踏査結果の集成・検討を行い、同年12月17日付で静岡県教育委員会教育長から日本道路公団静岡建設局長宛てに回答している。この踏査結果では調査対象地点21箇所、調査対象総面積108,734m<sup>2</sup>が計上された。この長泉町から御殿場市までの区間における発掘調査についても、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施することとする協定の変更は、平成11年3月5日付のことで、その後平成16年度にかけて複数回の協定の変更を実施している。

この報告書で触れる遺跡が位置する裾野市域において、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、No.145地点の老平遺跡からNo.154地点の薬師海土遺跡まで合計21ヶ所の地点で実施されている。当該報告書において対象とするのは、平成13～15年度にかけて本線のトンネル工事の際に発生する土の本線外盛土場(土3地点)の範囲に該当する富沢内野山Ⅰ西遺跡、またこの盛土場に通ずる工事用道路(CR36地点)の範囲に該当する富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡・富沢内野山Ⅴ遺跡の2地点、合計4つの遺跡である。

第1表 現地調査工程表

		平成13年度				平成14年度												平成15年度							
		12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月		
土3地点	確認調査 その1																								
	本調査 Ⅰ期																								
	確認調査 その2																								
	本調査 Ⅱ期																								
C R 36地点	確認調査 その1																								
	確認調査 その2																								
	本 調 査																								

なお平成23年4月より財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の事務を、静岡県埋蔵文化財センターが継承し、調査等にあたっている。

## 2 調査の経過

### (1) 土3地点(第3図 第1表)

平成14年1月から実施した確認調査その1は、C R用地(富沢内野山Ⅲ北遺跡の範囲)に連続する緩傾斜面の北側から南東にかけての範囲(調査対象面積約36,840m<sup>2</sup>)において実施した。実掘面積は954m<sup>2</sup>である。テストピット(略号T P)を46ヶ所設定し、掘削作業を行った。その結果、溝状遺構や土坑等の遺構、灰釉陶器や土師器等の古代の遺物を確認した。また地表面下約2mまで掘削した時点で、縄文時代から旧石器時代の遺物包含層を確認したため、包含層の性格・分布範囲・層位を確定するために5ヶ所でテストピットの範囲拡張を行った。範囲拡張により包含層の内容を確定した後、トレンチ調査も実施した。

平成13年度の確認調査の結果を受け、平成14年8月から平成15年3月にかけて本調査Ⅰ期を実施した。調査対象面積は7,800m<sup>2</sup>で、調査対象地の東側部分を1区、西側部分を2区と設定した。1区は8月から表土除去を開始、9月から包含層調査・遺構検出作業を開始し、1区北側では集石遺構と土坑を検出した。その後、休場層下層からテストピットを設定し、旧石器時代の包含層調査及び遺構検出を開始。旧石器時代終り頃の土坑、石器を確認した。1区は12月上旬に調査を終えている。2区は9月に表土から新期スコリア層まで重機で除去した後、縄文・弥生時代以降の包含層調査及び遺構検出作業を行い、集石土坑が検出された。その後テストピットを設定し、旧石器時代の包含層調査及び遺構検出作業を行い、石器集中地点と礫群を確認した。3月は次年度調査予定地の一部について表土除去を実施している。

本調査Ⅰ期と並行して、確認調査その2を平成15年2月に実施している。調査対象地の北西側部分27,360m<sup>2</sup>を対象とし、テストピットを6ヶ所(T P 1～6)設定・掘削した。その結果、テストピット1～4では遺物が認められたものの、出土した層位は二次堆積や崩落による流入と考えられた。またテストピット6は地表下6mまで掘削したが、遺構と遺物は確認できなかった。しかしテストピット5にお

いては旧石器～縄文時代の遺物が出土し、層位も一次堆積のものであると判断されることから、このテストピット周辺の緩斜面は遺跡の範囲であると判断された。

平成15年4月から行った本調査Ⅱ期の調査面積は4,056m<sup>2</sup>である。対象地南東側(現東名側)を3区、北西側を4区とした。3区は前年度3月に表土除去を実施した以外の箇所について表土除去を行った後に、新期スコリア層にて弥生以降の遺構の調査、続いて栗色土層上面まで重機掘削し、縄文時代の遺構面の調査を実施している。土坑や縄文土器が確認されている。最終的に休場層まで掘削を行っている。4区は5月に表土除去を開始し、表土直下より土師器や須恵器が出土した。また縄文土器は4区北東側に多く出土した。3区及び4区の調査は8月に終了した。

なお当該報告書において、現地調査における3区を4区、4区を3区と改称し編集している。

## (2) CR36地点(第4・5図 第1表)

平成14年1月から確認調査その1を着手した。調査対象面積は約7,200m<sup>2</sup>を測り、区域内にテストピットを設定、18ヶ所を掘削した。深い谷地形である区域を除き、尾根上のテストピットからは遺構と遺物が確認されたため次年度に調査を実施することになった。また土3地点に接続する区域も周辺の状況から調査対象と判断している。

平成14年4月から確認調査その2及び本調査に着手した。確認調査その2は前年度未調査であった地区を対象とした。テストピットは17基設定・掘削し、そのうちテストピット42・43からは縄文時代の遺物が多数出土し、確認調査は6月に終了した。

C R36地点の本調査は平成13年度の確認調査の成果、及び確認調査その2の成果に基づき、平成14年4月より着手された。排土場に接続する部分から調査を開始した。調査対象面積は8,380m<sup>2</sup>で、調査区は大きく7区に分割されて、調査が進行した。後に1・2・4区は富沢内野山Ⅲ北遺跡、3・5・7区は富沢内野山Ⅳ西遺跡、6区は富沢内野山Ⅴ遺跡と大まかに振り分けられている。この本調査は土3地点と接する1区から調査が着手された。この調査区はダンプ走路の関係から東側を1-1区、西側を1-2区とし、表土除去後に新期スコリア層上面の精査を実施した結果、溝状遺構や円形土坑が検出された。

2区は1区西側に位置しており、段差及び排土の点より調査区内へ重機が搬入できないため、4月中旬より人力で表土除去を実施している。3区は4月下旬より着手した。3区も排土の関係から谷地形である北側を3-1区として先行して重機による表土除去を行っている。表土直下の新期スコリア層上面で土坑群が検出され、4月中には土坑の調査が終了し、さらに下層の縄文時代の遺構・遺物の調査へと移行する。5月には2-1区では縄文時代の住居跡が確認された。住居跡は高所作業車を用いて、写真撮影を行っている。この住居の炉跡から炭化物が発見された。炭化物は洗浄とフローティング作業を実施している。7月には6区の範囲設定を行い、調査を開始した。抜根・表土除去の後に栗色土層の精査を行っている。7月中旬には4区、下旬に5区の調査に着手。8月に2区と4区、9月には6区の調査を終え、一部の調査区を日本道路公团へ引き渡している。10月には7区の調査に着手した。ベルトコンベアを設置し、人力により表土除去を行った。11月に富士黒土層内から土坑が検出されている。12月、旧石器時代の遺構・遺物を確認するためにテストピットを5基設定・掘削しているが確認できなかった。1月には7区の調査を終了、現地の埋め戻しを行い、これをもって富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡・富沢内野山Ⅴ遺跡の調査は全て終了した。

## 第2節 調査の方法

### 1 現地調査

土3地点とC R36地点の現地調査における共通する事項として、国土座標(日本測地系、平面直角座標第VII系)を用い、両地点の事業範囲内を10m×10m方眼のグリッドを設定している。これは広大な面積を占める土3地点及び狭長な事業予定地であるC R36地点の全体を把握するためで、土3地点の最南端からC R36地点の西北端まで約1,000mを測る。グリッドNo.は位置の特定・表示を簡易にする目的がある。グリッドは10m毎に南北のX軸にA・B・C、東西のY軸に1・2・3の順にアルファベット・アラビア数字を付与したもので、この10m×10mのグリッドの名称は南西隅の記号を採用している。またX軸のY以下はAA・AB・AC…としている。なお当該調査における原点、すなわちA0はX=-92,320.000、Y=+35,950.000である。

確認調査では遺構・遺物の状況を予め把握・予想するためテストピットを多く設けている。それぞれの呼称は、平成13年度の土3地点確認調査その1においてはグリッドNo.を、それ以外の調査はテストピット(TP)1・2・3…の付与をしている。テストピットは掘削場所を予め設定した後、表土は主に重機で掘削し、壁面精査及び表土より下層については人力により掘削を行っている。なお無遺物層等については重機による掘削も合わせて行った箇所もある。テストピットの規模は3m×3mで、壁面で観察される土の堆積状況や遺構の検出状況を写真・図化により記録している。また遺物が出土した際にも同様に写真や測量を行い、記録している。これら測量については光波測定器や手実測によるもので、パソコンデータ若しくは方眼紙等の紙記録として記録した。手実測では縮尺1/20を基本に平面図・断面図を作成しているが、詳細な記録化が必要な場合には、縮尺は1/10としている。遺物の取り上げに際しても光波測定器を活用している。原則として遺物1点ごとに土器=P、石器=S、礫=Rの記号と遺物番号を付け、出土層位も合わせて、国土座標のX、Y座標と標高値(Z)を記録して取り上げている。また現地記録写真是作業工程撮影用と平行して、35mm判のカラーネガ、カラーリバーサル、モノクロでの撮影を行い、あわせて遺構等は4×5判、6×7判のモノクロ、カラーの撮影を行った。

本調査では確認調査の成果を踏まえ、重機により調査対象域の表土等の掘削、人力による遺物包含層掘削、遺構面精査、遺構掘削を実施している。排出土はクローラーダンプ等により移動させている。また調査区によっては重機掘削が不可能である場合には、人力による表土等掘削がなされている。人力掘削に際してはベルトコンベアを使用し、掘削土の移動の効率化を図っている。確認された遺構・遺物の記録化については上記したとおり、光波測定器や手実測等の手段による。また写真撮影についても同様である。ただし調査区や遺構の全景を把握するための広範囲にわたる撮影については、必要に応じて高所作業車やタワー、ラジコンヘリコプターを使用している。

なお現地の安全対策として、テストピット内への転落事故防止のため、周囲をロープによる囲繞し、安全な昇降を確保するため階段を設えている。また土3地点が谷地形である点から、作業員用作業道が斜面地に延びている。この作業道では滑り止めのフェルトマットの敷設がなされ、また斜度のきつい箇所についてはアルミステップを設け、作業員の安全な場内移動を確保した。調査区はネットフェンス等により、調査区内外を安全のため区画している。

### 2 資料整理

当該報告書刊行に向けての資料整理が本格的に実施されたのは、平成23~24年度の2ヶ年である。出土遺物の洗浄、注記、台帳作成、また現地で撮影した写真的整理等の所謂基礎整理作業については、財

団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所長泉地区事務所基礎整理棟にて既に実施しており、当該作業は平成23年4月、静岡県埋蔵文化財センター長泉事務所にて出土遺物の分類・仕分け作業から着手された。

遺物はまず時期・層位ごとの分類を行い、接合・復原作業を行った。土器は文様などの特徴から分類を行った後、接合作業を実施した。時代を特定できるものや、文様構成が明確なもの、残存状況がよいものに関しては、拓本及び実測図を作成した。これらの遺物は接合作業、加えて復原作業の後に実測作業を実施している。黒曜石製の石鏸等の遺物自体が小さく、微小な剥離調整が施された遺物については、作業の効率化を図るためにトレース・観察表作成業務もあわせて、外部委託した資料がある。また縄文時代草創期の土器については、文様が微細で通常の拓本では文様の観察が出来ないものがあるため、三次元計測を平成24年度外部に委託した。

報告書の挿図はデジタルデータ及びアナログ版下を作成している。トレースを終えた土器等の手実測図・拓本はスキャニングを行い、デジタル化をしている。また遺物一覧表等の挿表の作成は表計算ソフトを用いている。現地にて取得した遺物の基本データは株式会社シン技術コンサルの「遺跡管理システム」にて管理し、遺物のドットマップや各種台帳作成はこれを用いて行っている。報告書の報告形態の変更に伴い、作成された遺構図面をもとに、パソコンで修正・編集作業を行った。

写真図版は平成24年度に作成作業を実施している。現地写真は $6 \times 7$ 判の中型カメラで撮影された写真を中心に掲載している。また遺物の写真は $6 \times 7$ 判の中型カメラでセンター写真室にて撮影している。

出土遺物に関する自然科学的分析について、土器に付着している炭化物や住居跡から出土した炭化材、炭化種子の分析(年代測定・樹種同定)、遺跡から出土した石器の石材(黒曜石)の分析(産地同定)等を実施している。その結果は色々附編に掲載している。



写真1 土3地点作業風景



写真2 CR36地点作業風景



写真3 土器復元作業



写真4 土器実測作業

## 第3節 遺跡周辺の環境

当該報告書にて調査成果を報告する富沢内野山Ⅰ西遺跡・富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡・富沢内野山Ⅴ遺跡は裾野市富沢・桃園に所在する。別個の埋蔵文化財包蔵地とは言え、隣接した遺跡群であるため、一括して周辺の環境を述べる。

### 1 地理的環境

この4遺跡は静岡県裾野市に所在する(第1図)。遺跡はJR裾野駅から西方に約1.2km、東側を東名高速道路が走る愛鷹山東麓の傾斜地上に占地する(第6図)。標高約190m程度を測る丘陵尾根上の平坦地に富沢内野山Ⅲ北遺跡・富沢内野山Ⅳ西遺跡が位置し、またその南側に発達した谷部に富沢内野山Ⅰ西遺跡が位置する。富沢内野山Ⅴ遺跡は富沢内野山Ⅲ北遺跡及び富沢内野山Ⅳ西遺跡が位置する尾根の北側に分岐した小尾根上に位置する。東側には北から南に黄瀬川が流れ、愛鷹山や箱根外輪山からの支流を収束する。

遺跡が位置する愛鷹山(標高1,504m)は富士山の南東に存在する、約500,000~400,000年前から活動を始め、約100,000年前に活動を停止した火山である。その後約80,000年前から活動を開始した古富士火山は、その噴出物を堆積させ、ローム層を形成した。約12,000年前には新富士火山から芝川溶岩流が流出、約11,000年前には古富士火山の活動終息及び山体崩壊を起こしている。約35,000~11,000年前に噴出した古富士火山由来の火山灰は「愛鷹上部ローム層」と呼ばれているが、このローム層は腐植質土壤の黒色帯とスコリア層が交互に堆積したものである。活動を終息させた愛鷹山はこの古富士火山活動期に開析作用が起り、放射状の谷地形が発達する。その結果形成された樹根状の尾根の上に新富士火山(現在の富士山)の噴出物が覆い、現在の地形が形成されている。

この地域における人々の生活の痕跡が顕著に見られるのが縄文時代以降であり、旧石器時代の文化層はこのローム層中に幾重にも重複して確認される。約8,000~5,000年前の縄文時代早期~前期の遺物が含まれる富士黒土層は腐植質の火山灰土に由来し、新富士火山の静穏期を裏付けるものとされる。しかし約2,900~2,300年前に御殿場泥流(富士山の山体崩壊)により、黄瀬川に沿って三島市から清水町にまでその扇状地状の地形を形成する。遺跡が位置する愛鷹山斜面地は幾度の山体崩壊に由来する泥流を被ることがなかったため、旧石器時代~縄文時代の遺跡が集中して発見される地域となっている。

### 2 歴史的環境

愛鷹山麓には旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く存在する。第二東名や農地構造改革事業、住宅地、工業団地の開発事業により、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多数調査され、各遺跡の実態が明らかとなりつつある。

#### 旧石器時代

後期旧石器時代の遺跡は県東部では愛鷹・箱根山麓で集中して確認されているが、近年、複数の文化層が確認できる大規模な遺跡が調査されている。長泉町富士石遺跡は第Ⅰ黒色帶上部で大規模な石器製作跡が発見された他、旧石器時代のものとしては珍しい石製装飾品が出土している。また、後期旧石器時代後半期の遺跡として、富士石遺跡の北東に位置する梅ノ木沢遺跡は第V黒色帶で局部磨製石斧や休場層中において2cm以下の小型ナイフ形石器、剥片素材の尖頭器が出土した。その他、愛鷹・箱根山麓では、東野遺跡をはじめとして、第Ⅲ黒色帶から第Ⅱ黒色帶にかけて列状配置した土坑群が検出され

る例があり、計画的な狩猟が行われていたことが知られる。裾野市内の旧石器時代の遺跡として知られてきたのは、富沢平林遺跡、内野山II遺跡、尾畠遺跡、丸山II遺跡、日向遺跡、上川遺跡がある。箱根外輪山西麓に位置する丸山IIや日向以外は愛鷹山山麓に位置する遺跡である。また第二東名建設に伴う調査により葛山上条遺跡、葛山大端ヶII遺跡、佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、老平遺跡、入ノ洞遺跡、内野山V遺跡、塚松遺跡において後期旧石器時代遺物の存在が明らかになり、近年愛鷹山東～南麓と箱根外輪山西麓に挟まれたこの地域の再評価が期待されている。

### 縄文時代

縄文時代は静岡県東部地域、特に愛鷹山周辺で多くの遺跡が確認されるようになる。縄文時代勢頭にあたる草創期に、愛鷹山付近では休場層上部から富士黒土層にかけて草創期の尖頭器あるいは有舌尖頭器などの石器を出土した遺跡が数多く存在している。草創期前半の土器は沼津市拓南東遺跡、中見代第I遺跡、尾上イラウネ遺跡などで出土している。同市の葛原沢第IV遺跡では草創期の住居跡が検出され、そこから隆蒂文土器と尖頭器類が伴って出土している。また同遺跡は爪形文や絡条体圧痕文を施した草創期の土器が多く出土している。草創期後半の土器を検出した愛鷹山麓の遺跡では沼津市イタドリA・丸尾北遺跡からは表裏縄文土器が出土している。愛鷹山麓以外の県東部の遺跡では、富士宮市大鹿窪B遺跡で住居跡が検出され、そこから押圧縄文が多数出土した。伊豆の国市仲道A遺跡では押圧縄文や回転縄文といった土器が確認されている。裾野市内では佛ヶ尾遺跡、下ノ大窪遺跡、老平遺跡、塚松遺跡、棚返遺跡で草創期の遺物が確認されているが、いずれも草創期のものと思しき尖頭器類の出土である。

縄文時代早期は静岡県東部地域において、遺跡が多く出現する時期である。早期前半では、撫糸文を出土する遺跡がいくつかみられる。早期前半の関東地方撫糸文前半段階に相当する土器を出土した遺跡は多くはないものの、沼津市上松沢平遺跡などで確認されている。これより時期がやや下ると、愛鷹山麓には押型文とそれに伴う時期の撫糸文を出土する遺跡が増加する。特に愛鷹山南麓の尾上イラウネ遺跡や大谷津遺跡といった沼津市域の遺跡では押型文・撫糸文共に出土量、種類共に充実している。裾野市内では千福小杉平第II遺跡の他に、老平遺跡で撫糸文土器がまとまって出土している。該期の遺構として集石2基が確認されている。早期後半では、条痕文系土器が登場する。長泉町梅ノ木沢遺跡、富士石遺跡では該期の遺物が大量に出土している。また裾野市内において佛ヶ尾遺跡や下ノ大窪遺跡などから打越式期の住居跡が検出されている。愛鷹山山麓周辺において野島式、茅山上層式、茅山下層式の他に、中部高地由来の判ノ木山西式、入海式、清水柳E類等の早期後半の土器を検出す遺跡数が大幅に増加することから、当該地域の人口増加が考えられる。

縄文時代前期は、早期と比較して遺跡数は減少傾向にある。沼津市清水柳北遺跡では木鳥式土器の出土が、長泉町東野II橋下遺跡では神ノ木台式、有尾式、閑山式、上ノ坊式土器を出土し、該期の住居跡11軒を検出した。同町富士石遺跡でも該期の遺物の出土を確認している。前期後半となると裾野市入ノ洞B遺跡や葛山大端ヶII遺跡などで諸磯式期の住居跡が確認されている。また関西由来の北白川下層式土器は濃厚な分布は認められないものの、該期の遺跡に広く浅い分布を示している。

縄文時代中期は箱根外輪山西麓での遺跡増加が目立つ時期である。三島市押出シ遺跡では縄文時代中期後葉の住居跡が35軒検出され、中期中葉から後葉の勝坂式、曾利・加曾利E式土器が大量に出土している。縄文時代中期における海進は現在の狩野川沿い、旧大仁町付近まで大きく入り込んでいたものと推定されており、伊豆市(旧修善寺町)大塚遺跡、出口遺跡、入谷平遺跡、伊豆の国市(旧大仁町)仲道A遺跡でも多くの中期の住居跡が検出されている。愛鷹山南東麓でも長泉町上山地B遺跡、桜烟上遺跡が大規模な集落遺跡として知られ、後者は中期中葉の井戸尻式期の住居跡や中期後半の曾利V式併行期の柄鏡形敷石住居跡を検出している。その他、同町柏庵B遺跡、長峰遺跡がある。これらは信州地方を中心

心とした中部高地由来の縄文文化の影響下にある遺跡であるが、一方伊豆の国市(旧大仁町)公藏免遺跡では東海系の北屋敷式土器が多く見られ、沼津市広合遺跡、ニッ洞遺跡でも出土が報告されているなど、該期の地域間交流を考えさせる状況がある。裾野市域では道場山遺跡、屯屋敷遺跡などの箱根外輪山西麓に位置する遺跡の他に、上川遺跡、尾畠遺跡、今里薬師海道遺跡、棚返遺跡、老平遺跡、下ノ大塙遺跡等の愛鷹山山麓に位置する遺跡が知られる。特に尾畠遺跡では顔面把手付土器や翡翠製で球状の石製品が出土し、さらに隣接する細山遺跡では釣手土器が出土しており、注目される。

縄文時代の後期は、県内でも縄文時代の遺跡数が減少することが明らかになっている。該期の称名寺式や堀之内式土器を出土する遺跡はみられるが、愛鷹山麓でも遺跡数が激減する傾向にあり、気候の寒冷化に伴うものと考えられる。裾野市内では今里薬師海道遺跡、棚返遺跡、葛山上條遺跡、千福南山Ⅲ西遺跡、内野山Ⅰ遺跡等が該期の遺跡として知られる。中でも千福南山Ⅲ西遺跡において後期の加曾利B式の算盤玉形土器の出土が報告されている。

縄文時代晩期は後期よりも遺跡が減少する。既述した長泉町桜畑遺跡や追平B遺跡では、清水天王山式が出土している。また御殿場市閑谷塚遺跡、宮ノ台遺跡で土器が出土している。裾野市内においては今里薬師海道遺跡等が知られるのみである。

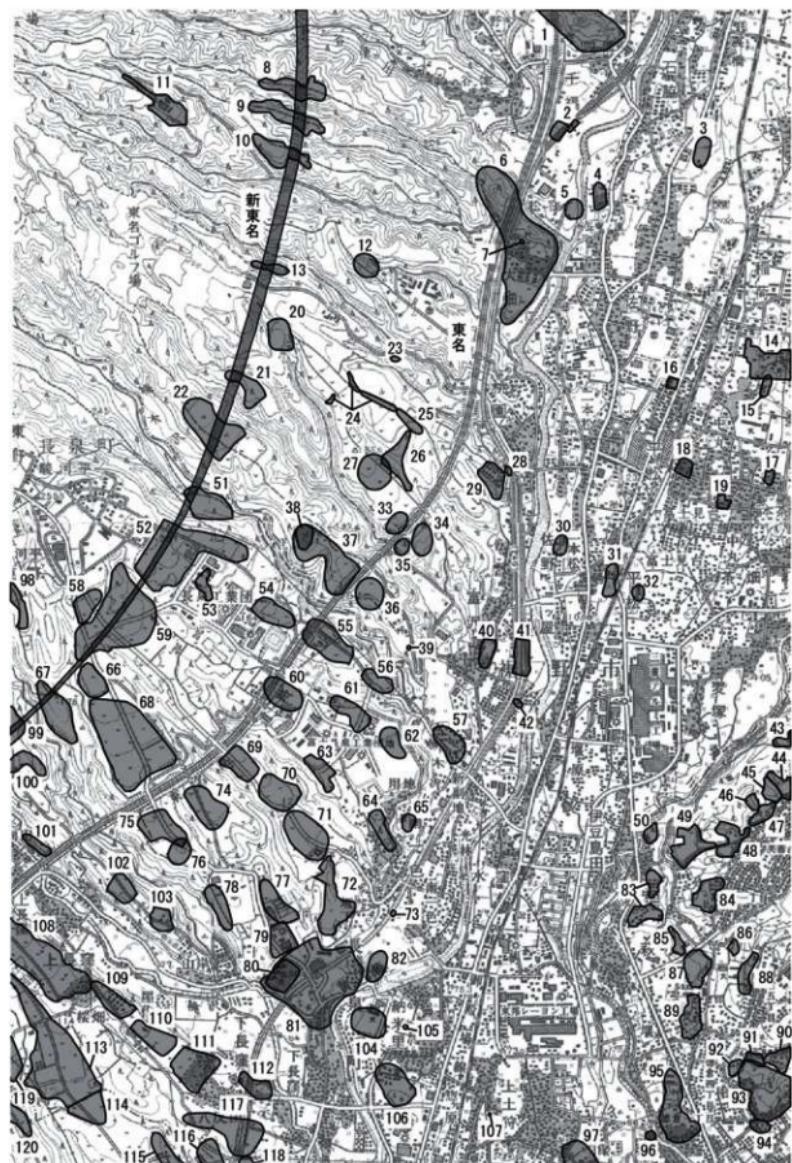
### 弥生時代

静岡県東部地域における弥生時代の遺跡は潤井川流域、黄瀬川流域や狩野川により形成された田方平野、そして愛鷹山南麓と浮島沼周辺に多く分布する。弥生時代前期の遺跡は潤井川流域の富士宮市渋沢遺跡の土器棺墓が著名であるが、それ以外に長泉町大平遺跡にて前期末段階の住居跡が知られるのみである。弥生時代中期は遺跡の数が増加する。中期前半では三島市鶴喰前田遺跡、中手乱遺跡、沼津市雄鹿塚遺跡等、中期後半は三島市長伏六反田遺跡や、戦前から注目されていた清水町矢崎遺跡が知られる。長伏六反田遺跡では方形周溝墓が検出され、遺存状態の良好な土器群が出土している。弥生時代後期になると愛鷹山南麓等の丘陵地でも遺跡が展開している。沼津市内では八兵衛洞遺跡で84軒の堅穴住居跡が検出され、同市内の二本松遺跡、清水柳北遺跡では方形周溝墓が確認されている。また植出遺跡では弥生時代末期から古墳時代初頭にかけての大集落が確認されている。一方裾野市内においては縄文時代の遺跡数と比較して弥生時代の遺跡は極めて少ない。丸山Ⅰ遺跡や二本松下遺跡では中期初頭の条痕文系土器が出土しているという。また富沢原遺跡では後期末葉の壺が出土している。

### 古墳時代以降

静岡県東部地域では沼津市高尾山古墳が初現とされる。しかし他に前期～中期に該当する古墳は確認されておらずその様相は判然としないが、後期になると群集墳が見られるようになる。当該地域の横穴式石室を持つ最古の古墳と考えられているのが、6世紀末から築造され始める長泉町上ノ段古墳群と理解される。また7世紀中葉に築造された原分古墳は石室内より金銅装馬具が出土している。裾野市内では上丹古墳、中丸Ⅱ号墳、三ツ石古墳が知られる。

当該地域は駿河国駿河郡に該当する。古代東海道の足柄路が市域を貫通し、足柄峠を越えて東隣の相模国に延びるものと考えられている。しかし静岡市曲金北遺跡で検出されたような道路跡は未だ確認されていない。古代交通路に係る遺跡としては、小山町上横山遺跡で検出された奈良時代の集落は古代東海道に近接するものと評価されているに過ぎない。また駅町に伴い付近に長倉駅家が存在したものと考えられるが、現時点では確認されていない。長泉町から裾野市域の何處にか、その存在が推定されているに過ぎないのである。



第6図 周辺遺跡位置図

第2表 周辺遺跡一覧表①

No.	包蔵地名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
1	千福城跡							○		平山城・曲輪
2	千福馬場添遺跡									
3	上ヶ見遺跡					○				
4	五竜ノ海上遺跡				○					
5	旧植松家住宅遺跡									
6	大畠城跡							○		堀・井戸・曲輪
7	大畠城塹							○		
8	佛ヶ尾遺跡	○	○		○	○	○	○	○	
9	下ノ大庭遺跡	○	○							
10	老平遺跡	○	○					○		
11	中畠遺跡				○					
12	桃園遺跡			○						
13	人ノ洞臼遺跡	○	○							
14	稻荷遺跡					○	○			
15	中丸三ツ石古墳群					○				
16	平松上遺跡					○				
17	蓬頭遺跡						○			
18	天理町遺跡					○				
19	本茶畠遺跡									
20	内野山Ⅱ遺跡			○						
21	内野山Ⅴ遺跡	○	○							
22	鳴松遺跡	○	○							
23	富沢内野山Ⅸ遺跡	○	○							当該報告書掲載遺跡
24	富沢内野山Ⅶ西遺跡	○	○							当該報告書掲載遺跡
25	富沢内野山Ⅹ北遺跡	○	○							当該報告書掲載遺跡
26	富沢内野山Ⅰ西遺跡	○	○							当該報告書掲載遺跡
27	内野山Ⅰ遺跡			○						
28	入ノ洞遺跡			○				○		
29	尾畠遺跡	○	○							
30	二本松下遺跡				○	○				
31	平松下Ⅱ遺跡					○	○			
32	平松下Ⅰ遺跡					○	○			
33	細山遺跡			○						
34	八反田遺跡			○						
35	細山下遺跡					○				
36	富沢平林遺跡			○						
37	平林Ⅱ遺跡			○						
38	中林遺跡			○						
39	富沢牧横尾遺跡							○		
40	富沢内畠遺跡							○		
41	富沢原遺跡				○	○				
42	新福寺古墳群					○				横穴式石室・円墳
43	白熊林C遺跡	○	○							
44	赤松遺跡			○						
45	白陰林D遺跡			○	○					
46	白陰林F遺跡			○						
47	赤松下遺跡	○	○							
48	清水ヶ山遺跡	○	○							
49	元作塙遺跡			○						
50	萩A遺跡			○						
51	梅ノ木沢遺跡	○	○	○	○		○			
52	東野遺跡	○	○			○			○	
53	八分平臼遺跡	○	○							
54	八分平D遺跡			○						
55	梅ノ木平遺跡			○						
56	手代遺跡			○						
57	天神川古城								○	
58	八分平観音遺跡			○						
59	富士石遺跡	○	○					○	○	
60	大峰A遺跡			○						
61	上山地A遺跡			○						

第2表 周辺遺跡一覧表②

No.	包蔵地名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
62	上山地B遺跡		○							
63	大峰B遺跡		○							
64	南一色城跡							○		
65	宮脇古墳群				○					土塁・堀・曲輪 円墳
66	追平A遺跡		○							
67	八分平E遺跡	○	○			○	○			
68	追平B遺跡		○							
69	間渡遺跡		○							
70	池田A遺跡		○							
71	池田B遺跡	○	○				○	○	○	
72	鉢平遺跡		○							
73	石行塙古墳群				○					横穴式石室?
74	東野II橋下遺跡	○	○							
75	中身代遺跡		○							
76	木戸遺跡		○							
77	上野E遺跡		○							
78	茶木畠遺跡		○							
79	上野A遺跡		○							
80	上野B遺跡	○	○	○		○				
81	長久保城跡			○				○		二の丸他
82	大平遺跡			○						
83	中林山遺跡	○	○							
84	元作塙B遺跡		○							
85	萩B遺跡		○							
86	北ノ入A遺跡		○							
87	谷戸遺跡		○							
88	北ノ入B遺跡		○							
89	徳倉D遺跡	○	○							
90	中村遺跡			○						
91	中村A遺跡		○	○	○					
92	大久保遺跡		○							
93	徳倉城跡		○					○		
94	元岬遺跡				○					
95	反畑遺跡		○	○	○	○	○	○		
96	反畑経塚							○		
97	上土狩古墳群				○					横穴式石室・円墳4基
98	八分平遺跡		○							
99	細尾遺跡	○	○		○	○	○			
100	東細尾B遺跡		○							
101	向田B遺跡			○						
102	山岸上B遺跡			○						
103	山岸A遺跡	○	○							
104	大久根遺跡	○	○							
105	西耕地古墳				○					横穴式石室・円墳
106	山下遺跡		○							
107	山王塙古墳				○					横穴式石室・円墳
108	桜畠上遺跡	○	○							
109	桜畠下遺跡		○							
110	八反田後遺跡		○							
111	八反田遺跡		○							
112	西願寺遺跡	○	○							
113	柏原A遺跡		○							
114	柏原遺跡		○							
115	柏葉尾遺跡		○							
116	障塙上B遺跡	○	○							
117	平歛遺跡	○	○				○	○		
118	障塙上A遺跡		○							
119	柏原B遺跡	○	○		○					
120	丸尾第Ⅲ遺跡		○							

\* 静岡県地理情報システムを参考に作成

## 第2章 富沢内野山I西遺跡(土3地点)

### 第1節 基本層序と土層の堆積状況

富沢内野山I西遺跡は第2図で示したように、土3地点の南半部に該当し、調査区は1～4区が設定されている。当該遺跡はそもそも愛鷹山東麓に樹枝状に発達した谷地形内に位置する。多くの遺跡では日当たりが良く、景観・眺望が利く尾根頂部に位置するのに比べ、当該遺跡は特殊な事例と言える。これは遺跡が立地する谷地形部で最も期待される地質的特性は、湧水にあるものと考えられよう。

第7図は当該地区で最も基本的な層序と考えられたA J31グリッドで観察された土層、第8図は各テスコピット土層図を配列させたものである。なお現地調査段階において土層解釈で混乱が生じた模様で、基礎整理段階で修正がなされている。

1層は表土層で腐食土である。地目が山林であったこともあり、地表近くは腐食した樹皮・木葉が観察される。

2層は黒色土である。粘性・締りが低い。愛鷹山麓南では弥生時代以降の遺物が含まれている。略号はUKである。

3層は新期スコリア層とされる。この層の略号はNSCである。縄文時代末から弥生時代初頭に降灰したものと考えられるが、現地調査では砂沢スコリア(Zu)や湯船第1スコリアの仙石スコリア(S10)も混在するという所見が下されている。また仙石スコリア噴出直後にはカワゴ平バミス(KGP)の噴出が知られるが、前2者と比較して極めて微量である。件の砂沢スコリア・仙石スコリア共に縄文時代の富士山の噴火活動に由来し、3,500～2,200年前(calBP：較正年代)の降灰と考えられている。当該遺跡が谷地形に位置するという点から、降灰した火山灰が層として分離し得ていない。

4層は栗色土層～富士黒土層に該当する。前者の略号はKU、後者の略号はFBである。愛鷹山南麓では明瞭に分離され、後者には縄文時代早期後半の遺物が含まれている。

5層は上位と下位の層との間際に挟まる漸移層である。略号はZNである。地点によっては当該層位が判然としない。以上の層位は現世火山灰腐食土層と纏められる。

6層より下位は、上部ローム層として分類される。6～10層は所謂「休場層」である。YLと略される。上部ローム層の最上位に見られる。この休場層は部分的に挟まる赤褐色を呈するスコリアを境に、6層・休場層上層(YLU)、8層・休場層中層(YLM)、10層・休場層下層(YLL)の3層に分離される。件のスコリアは7層(休場層上部スコリア・YLS1)、9層(休場層下部スコリア・YLS2)である。4～6層にかけては後述する第IV文化層、6～8層は第III文化層に設定している。

11層は休場層直下黒色帯に該当する。略号はBBOである。

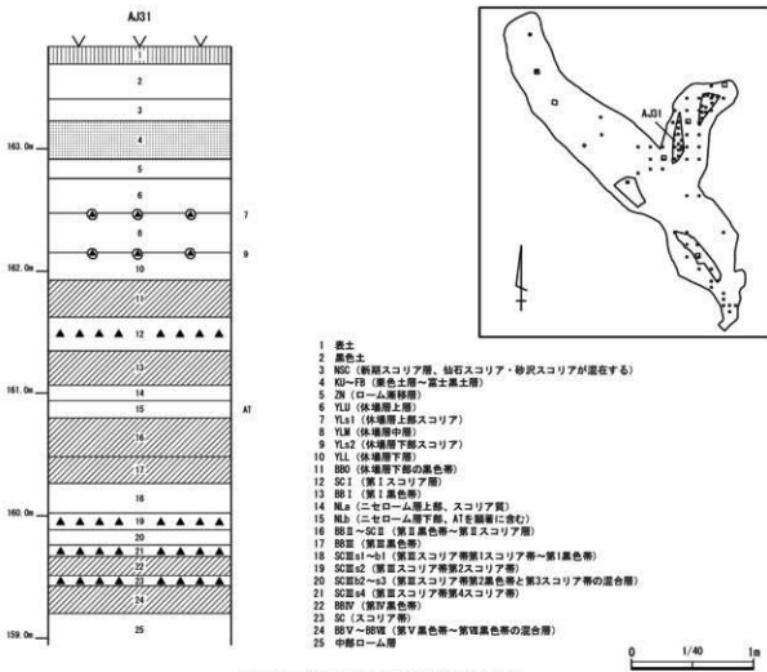
12層は第Iスコリア層である。略号はSCIである。

13層は第I黒色帯である。後述する第II文化層は第I黒色帯を中心に設定されている。略号はBBIである。

14・15層はニセローム層である。略号はNLである。スコリア質が特徴的なニセローム層上部と、始良丹沢広域火山灰(AT)を多く含むニセローム層下部に分離が可能で、前者を14層、後者を15層としている。

16層は第II黒色帯～第IIスコリア層に該当する。略号は前者がBBII、後者はSCIIである。

17層は第III黒色帯に該当する。略号はBBIIIである。



第7図 富沢内野山I西遺跡基準土層図

18層は第Ⅲスコリア帯第1スコリア帯～第1黒色帯に該当する。略号は前者がSC III s 1、後者はSC III b 1である。

19層は第Ⅲスコリア帯第2スコリア帯に該当する。略号はSC III s 2である。

20層は第Ⅲスコリア帯第2黒色帯と第3スコリア帯の混合層と現地で判断された。略号は前者がSC III b 2、後者はSC III s 3である。

21層は第Ⅲスコリア帯第4スコリア帯に該当する。略号はSC III s 4である。以上19～21層が後述する第I文化層と設定している。

22層は第Ⅳ黒色帯に該当する。略号はBB IVである。

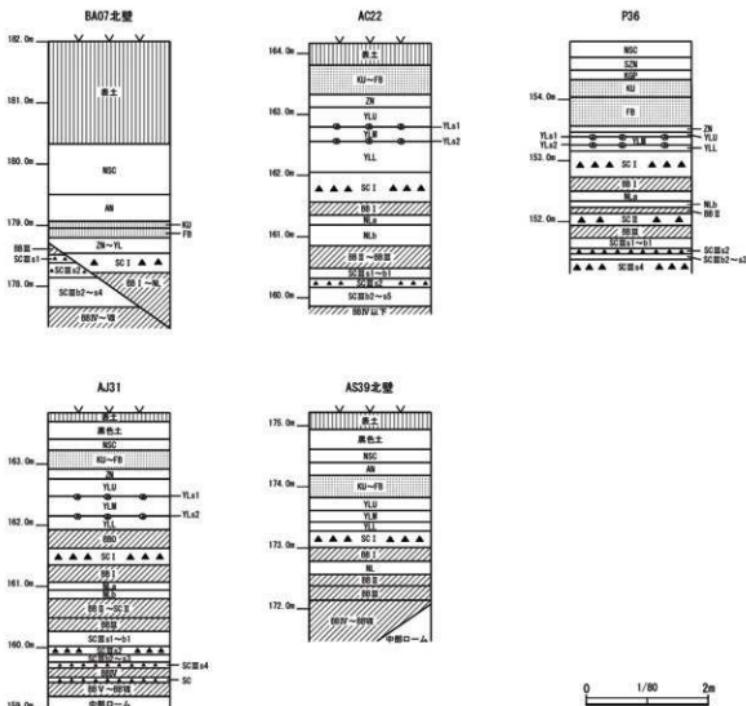
23層はスコリア帯に該当する。

24層は第Ⅴ黒色帯～第Ⅶ黒色帯までの混合層と現地で判断された。沼津市秋葉林遺跡や長泉町富士石遺跡では第Ⅶ黒色帯から、三島市生茨沢遺跡では第Ⅵ黒色帯直上、長泉町梅ノ木沢遺跡では第Ⅴ黒色帯から石器群の出土が確認されているが、当該富沢内野山I西遺跡では24層より下位では石器の出土は確認されていない。

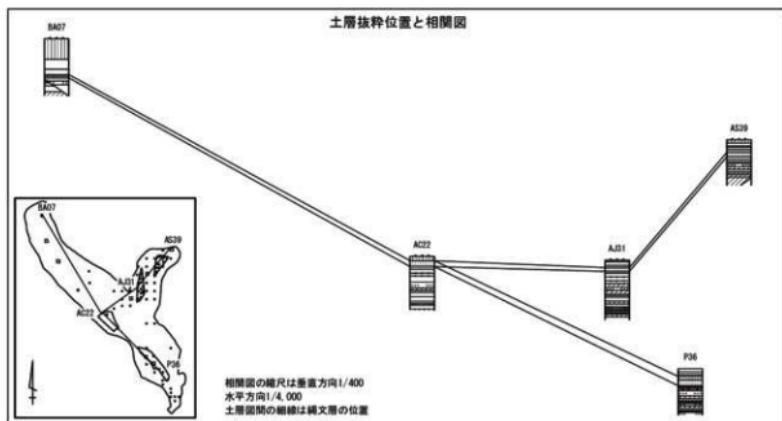
25層は中部ローム層に該当する。

土層は愛鷹・箱根山麓で通有の基本層序に依拠している。とはいっても該遺跡が位置する愛鷹山東麓では埋没土腐食層の発色が判然としない点等、土層の様子は一律ではない。

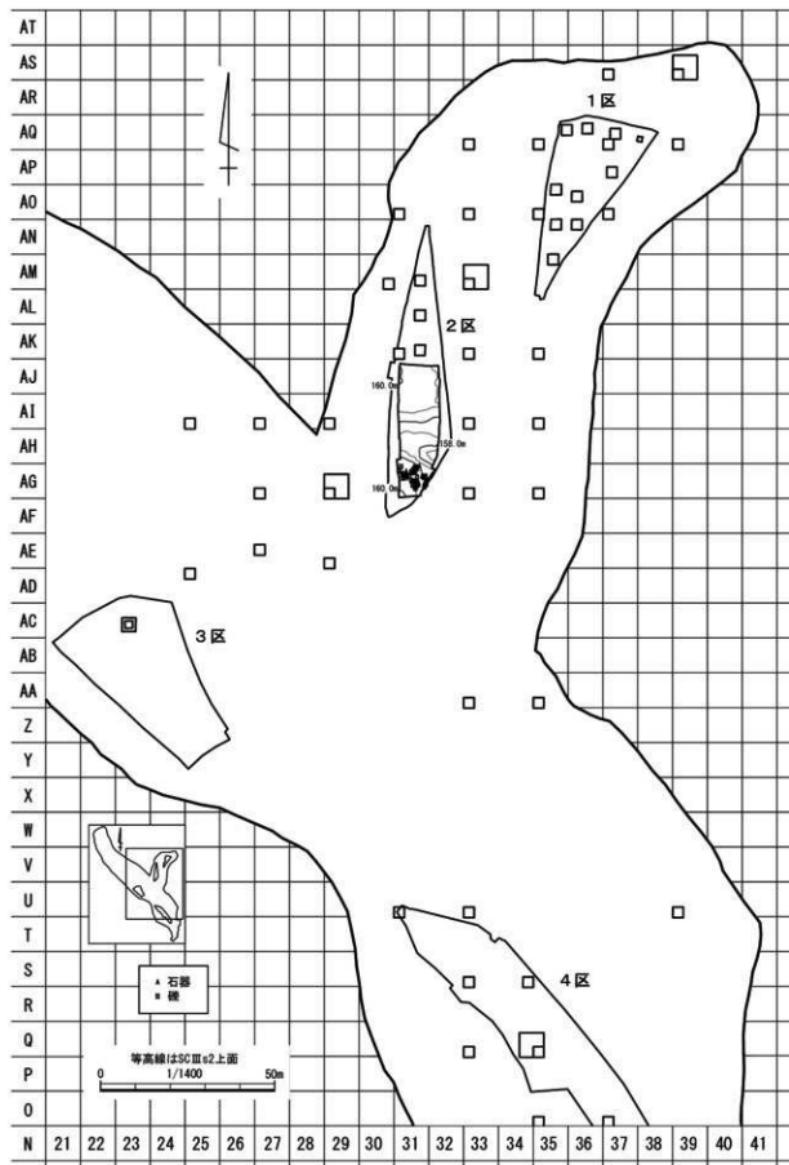
第1図 基本層序と土層の堆積状況



土層抜粋位置と相關図



第8図 土3地点土層柱状図



第9図 第I文化層石器出土状況

## 第2節 旧石器時代の遺構と遺物

### 1 概要

富沢内野山Ⅰ西遺跡で旧石器時代の遺物・遺構が確認されたのは1区及び2区である。当該遺跡が位置する谷地形は南東から北西に延びるが、北北東へ分岐する一支谷がある。2区はその支谷の西側斜面、1区は東側斜面から支谷最奥部にかけて位置している。調査区内の高低差では1区と2区共に休場層上層上面の数値で約4.5mを測り、緩い斜面地であることが理解できる。しかし2区で検出された第Ⅲスコリア帯第2スコリア帯上面では窪地状の地形が認められ、埋没した谷状地形とも考えられる。該期の遺物は第IV黒色帶より上位にて確認されているが、遺構では礫群が主体である。

礫群は主として、被熱に由来するものと考えられる赤化した礫により構成されている。多くの遺跡でも推定されているように、当該遺跡で確認された礫群も火を使用した施設と考えられる。なお愛鷹・箱根山麓の第Ⅲ黒色帶で多く確認されている落し穴は、1基も確認されていない。石器は礫群とほぼ同一地点で確認されるため、礫群を包括して遺物集中地点とも理解できるが、本報告では礫群を基調として報告する。また当該遺跡における旧石器時代の遺物として、ナイフ形石器・楔形石器・搔器・剝片・石核等が出土している。これらの出土層位は第Ⅲスコリア帯第2スコリア帯から富士黒土層までで、これらは黒曜石、ガラス質黒色安山岩、ホルンフェルス等を石材としている。なお旧石器時代後半期に出現する細石刃の出土層位は休場層上層～漸移層～富士黒土層まで上下に拡散し、特に漸移層より上層では縄文時代草創期以降の土器・石器群と共に出土している。

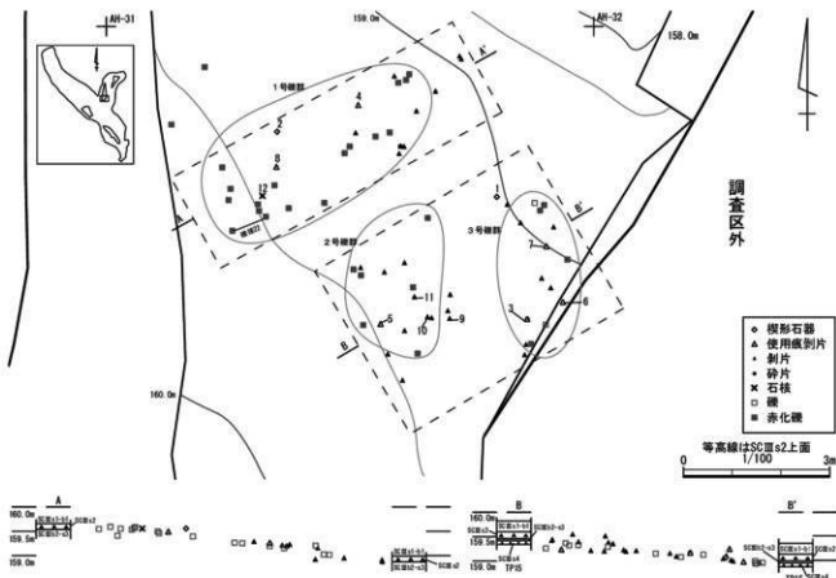
本報告では旧石器時代の文化層を第I～IV文化層に分類し、各文化層の礫群、石器組成を表に集成した。礫群の認定基準は3個以上の礫で構成され、拳大の礫を含むものとし、離れた場所で被熱に由来するると推定される赤化礫が2点出土という場合にも礫群の範疇と考えている。

なお各層位の堆積が薄いため、幾つかの層位に石器が拡散して出土している。上下移動が少ないものと考えられた礫についても同様である。本来的には分割可能な文化層であろうが、当該報告では一つの文化層に纏めている。なお縄文時代草創期については検討段階において第V文化層に位置付けていたが、該期の土器も多く出土し、遺構も確認されているため、第3節の縄文時代の遺構と遺物にて触れる。これら旧石器時代の礫群・石器の検討・分類については平成23年度に柴田亮平の教示のもと西田真由子が行い、勝又が文章化した。

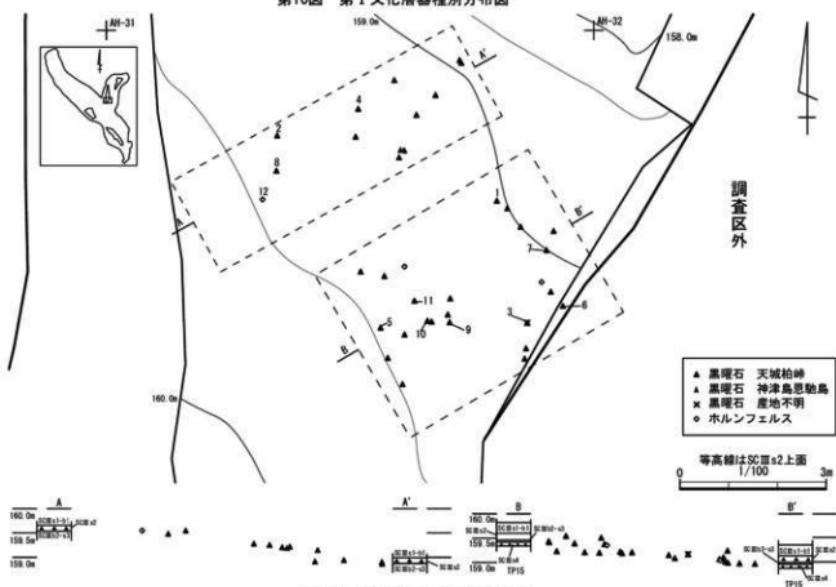
### 2 第I文化層

#### (1) 概要

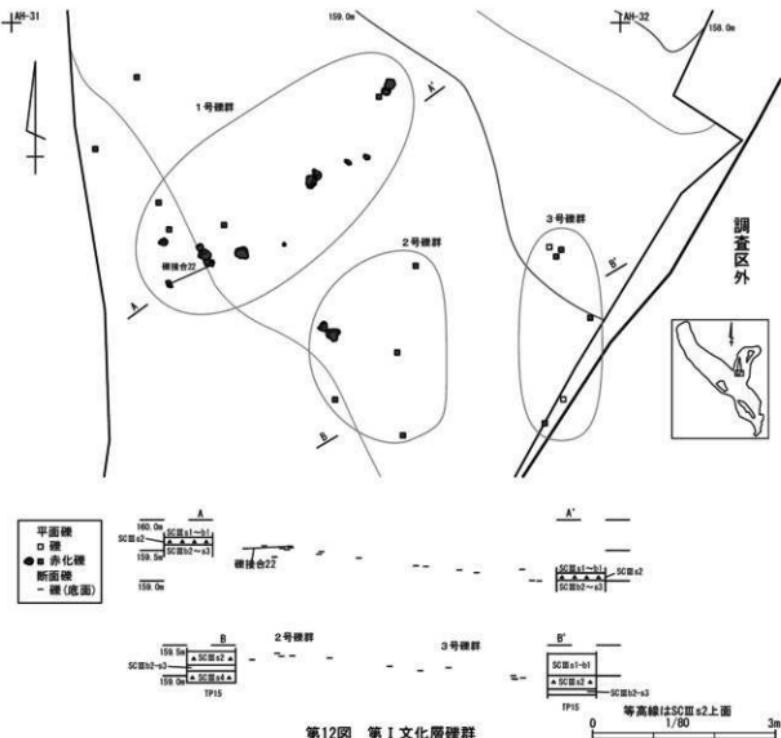
2区の第Ⅲスコリア帯第2黒色帶から第Ⅲスコリア帯第1黒色帶にかけて、石器48点、礫31点が出土している(第3・4表)。礫が第Ⅲスコリア帯第2スコリア帯付近に多く確認されたことにより、文化層を設定している。礫群・石器の分布は2区南端部、AG31グリッドにはば限定されている。土3地点東側支谷の西側斜面地にあたる2区の第Ⅲスコリア帯第2スコリア帯上面は、第9図で理解できるようにAH30・31グリッドにかけて窪む谷状の地形をなし、礫・石器群が確認された当該グリッドはその地形に面したほぼ平坦な地形に該当する。このAG31グリッド内に3基の礫群を確認した。検討段階では1基の礫群と認識していたが、細分可能と判断している。また石器は剝片が主体で、これら礫群毎に集中している。



第10図 第I文化層種別分布図



第11図 第I文化層石材分布図



第12図 第I文化層礫群

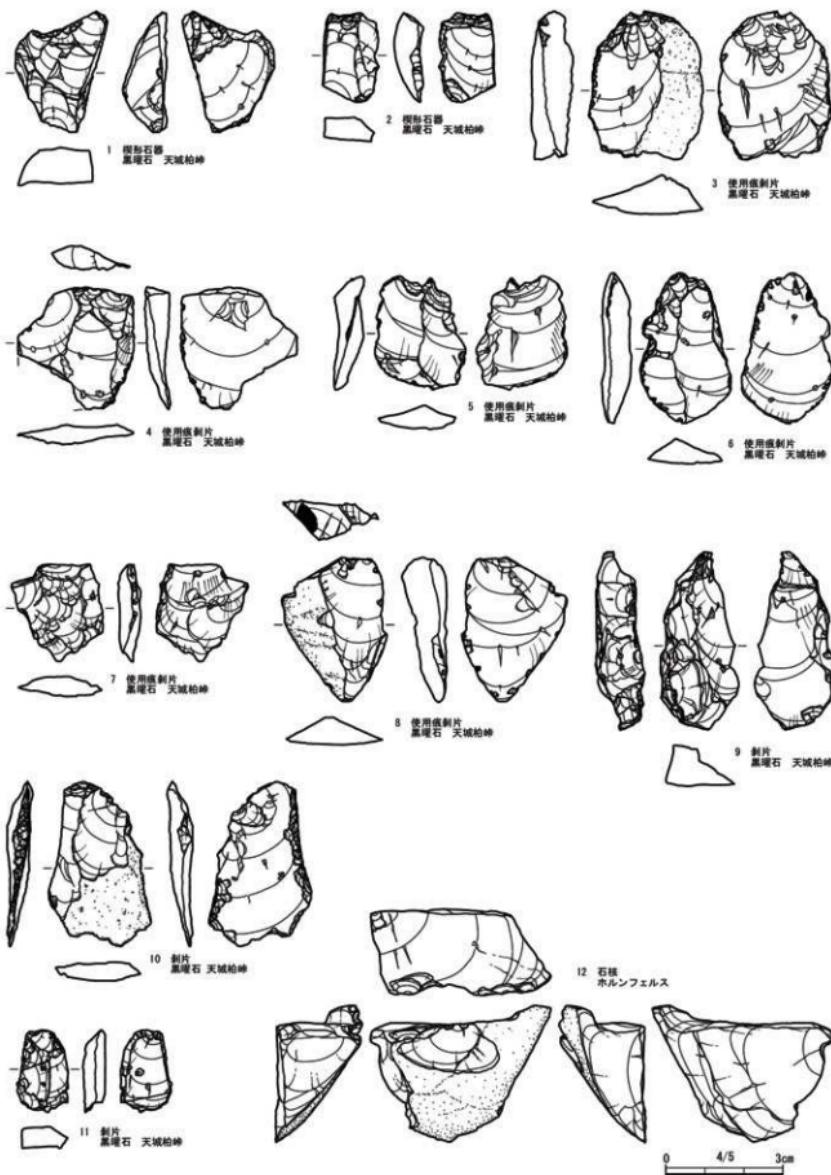
## (2) 遺構

### 1号礫群(第12図 第3表)

当該礫群はA G31グリッド北半部に位置し、礫17点で構成される。礫は主として第IIIスコリア帯第3スコリア帯～第IIIスコリア帯第2スコリア帯にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫で、亜角礫が主体である。径約20cm程度の大型礫が見られる。これらの比較的大型の礫が2～3個ずつの組み合わせで、南西から北東の方向へ点在する。本来的にはこの2～3個の大型礫のグループが使用単位だったのか、南東側に2号礫群が位置する。なお1号礫群付近で出土した炭化物3点につき放射性炭素年代測定(AMS)を行った結果、 $28,930 \pm 90$ yrBP、 $28,430 \pm 100$ yrBP、 $28,750 \pm 90$ yrBPという結果が得られた。詳細は附編を参照されたい。

### 2号礫群(第12図 第3表)

当該礫群はA G31グリッド中央からやや東側に位置し、礫6点で構成される。礫は主として第IIIスコリア帯第2スコリア帯下位から上位にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫で、亜角礫が5点を数える。中には径約20cm程度の大型礫が認められ、やや小ぶりの礫と隣り合う。東側に3号礫群、北西側に1号礫群が位置している。



第13図 第I文化層石器

第3表 第I文化層礫属性表

礫群番号	構成礫数	赤化				形態				石材	
		完形		非完形		亜円	亜角	円	不明	玄武岩	安山岩
		非赤化	赤化	赤化1	赤化2						
1号礫群	17		5	11	1	2	14	1		2	15
2号礫群	6		2	3	1	1	5				6
3号礫群	6	2		4		1	4		1		6
礫群外	2	2					2				2
計	31	4	7	18	2	4	25	1	1	2	29

第4表 第I文化層石器組成表

		楔形石器	使用痕 剥片	剝 片	碎 片	石 核	計	
黒曜石	天城柏峰	AGKT	2	6	30		38	
	神津島恩島鳥	KZOB			4		4	
	度地不明				3		3	
	黒曜石計		2	6	30	7	45	
ホルンフェルス	Hor			2		1	3	
計			2	6	32	7	1	48

3号礫群(第12図 第3表)

当該礫群はAG31グリッド東辺付近に位置し、礫6点で構成される。礫は主として第IIIスコリア帯第2スコリア帯中位から上位にかけて出土している。礫は赤化礫が主体であるが、2点赤化の認められない礫もある。礫群は2区東壁際で検出されており、本来は2区外へ礫群が拡がる可能性がある。

石器ブロック(第10・11図)

石器はAG31グリッド内に集中して出土し、その出土地点は同グリッド内の1~3号礫群の範囲と重複するため、それぞれ石器ブロックとして設定が可能である。出土石器は剝片が主体で、楔形石器や使用痕のある剝片等がある。石材は天城柏峰産の黒曜石が主体であるが、ホルンフェルスの石核が1号礫群中に、2・3号礫群には1点ずつ同石材の剝片が認められる。

(3) 遺物(第13図 第4・5・14表 写真図版20)

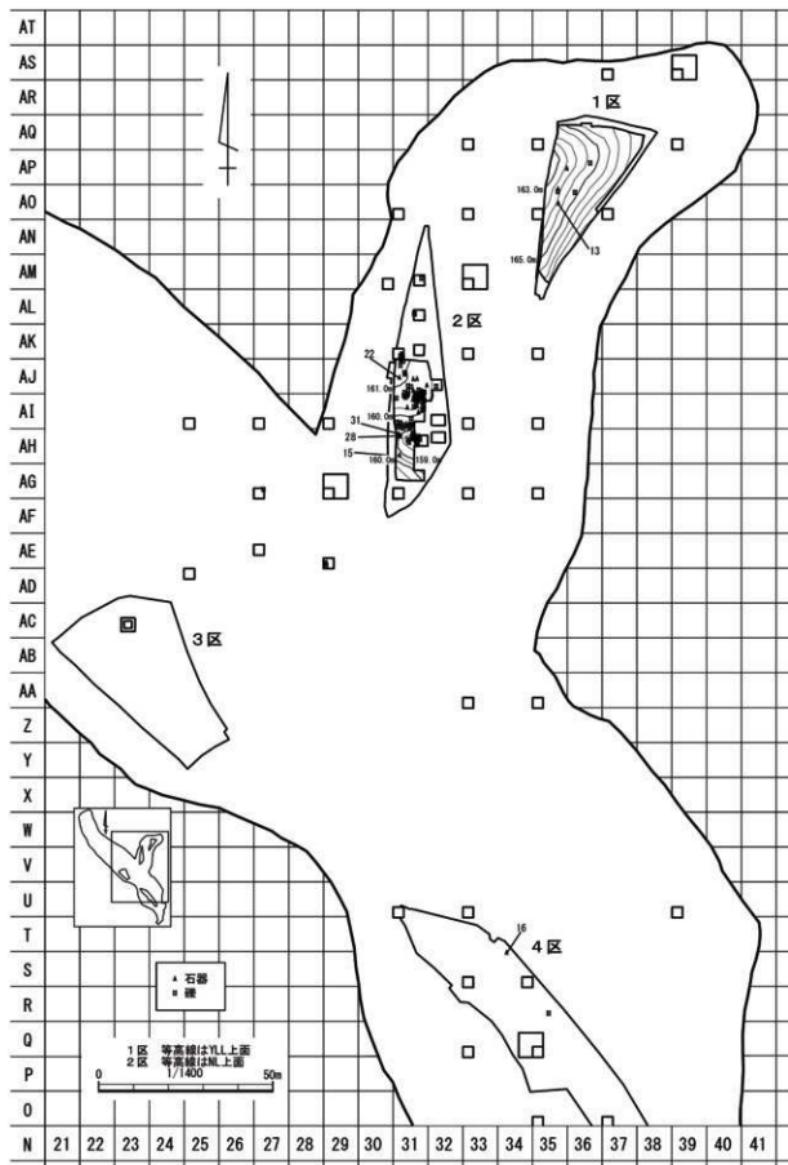
第I文化層から出土した石器は48点を数える。石器組成は第4表で示したように、天城柏峰産黒曜石の剝片が48点中30点を数え、主体をなしている。

1~12が第I文化層から出土した石器である。1・2は楔形石器である。石材は共に天城柏峰産黒曜石である。2ヶ所認められる剝離は打撃に由来する潰れか。前者は3号礫群付近、後者は1号礫群内で出土している。

3~11は剝片類か。そのうち3~8は使用痕がある剝片である。剝片の石材はいずれも天城柏峰産黒曜石である。4・5は側縁に細かな剝離が見られる。6は片側の側縁にやや抉り込まれたような剝離がある。8には礫面が残置する。使用痕が観察されなかった10は礫面が残置する剝片である。縦長剝片で両側縁に連続した剝離が観察される。二次加工剝片か。12は石核である。礫面が残置しており、石材はホルンフェルスである。1号礫群からの出土である。

第5表 第I文化層(掲載分)石器組成表

		楔形石器	使用痕 剝片	剝 片	石 核	計
黒曜石	天城柏峰	AGKT	2	6	3	11
	黒曜石計		2	6	3	11
ホルンフェルス	Hor				1	1
計			2	6	3	12



第14図 第II文化層石器出土状況

### 3 第II文化層

#### (1)概要

1区AO・AP35・36付近及び2区における第I黒色帶付近に石器93点、礫103点が出土している(第6・7表)。礫群は6基確認され、第I黒色帶の下位のニセローム層から上位の第Iスコリア帯にかけて礫が散見された。よって第I黒色帶を中心にして第II文化層を設定した。当該遺跡東側支谷の西側斜面地にあたる2区のニセローム層上面は、前節でも述べた第IIIスコリア帯第2スコリア帯上面におけるAH30・31グリッドの浅く窪む谷状の地形が反映されている。礫群は第14図でも理解できるように、この窪む地形内から北側の平坦面に分布する。一方、1区では礫群は検出されていない。

石器は1区においてはAO・AP35グリッド付近に散発的に出土する。2区においては窪む谷状地形北側の平坦面に多く分布している。窪状の地形内の遺物に関しては流れ込みの可能性も想起されたが、この文化層に一括して紹介する。

#### (2)遺構

##### 1号礫群(第17図 第6表)

当該礫群は2区AJ・AK31グリッドに位置し、礫8点で構成される。この礫群はテストピット19内でその存在を確認された。礫群を構成する礫は主として第I黒色帶上位から上面にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫で、亜角礫を主体となす。当該礫群の南約6.6mの位置に2号礫群が位置している。

##### 2号礫群(第17図 第6表)

当該礫群は2区AI・AJ31グリッドに位置し、礫8点で構成される。礫群を構成する礫は主として第I黒色帶下位から上面にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫で、亜角礫が主体となす。当該礫群の東側に3号礫群が隣接する。3号礫群と比較して礫は散発的である。

##### 3号礫群(第17図 第6表)

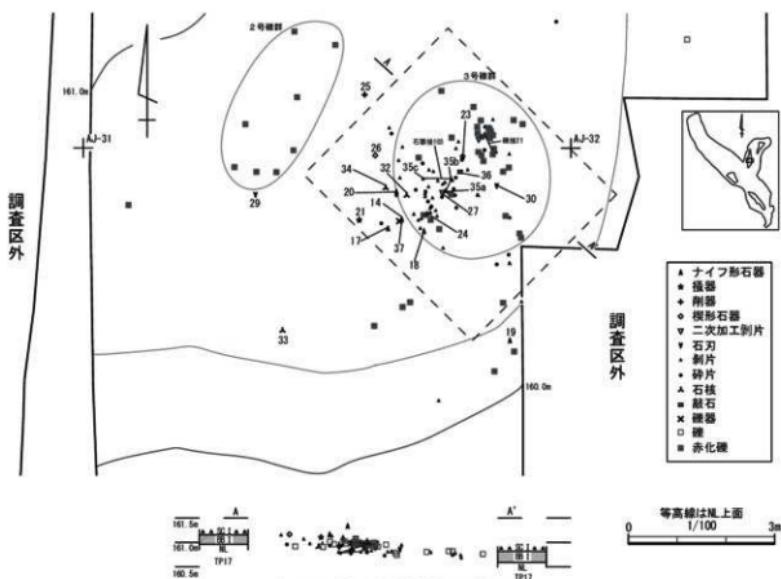
当該礫群は2区AI・AJ31グリッドに位置し、礫30点で構成される。礫群を構成する礫は主として第I黒色帶上位から上面にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫である。石材は輝石安山岩19点、玄武岩10点を数え、他の礫群と比較して玄武岩の比率が高い。当該礫群の南側には4号礫群が接する。後述する石器ブロックの範囲と重複する。

##### 4号礫群(第18図 第6表)

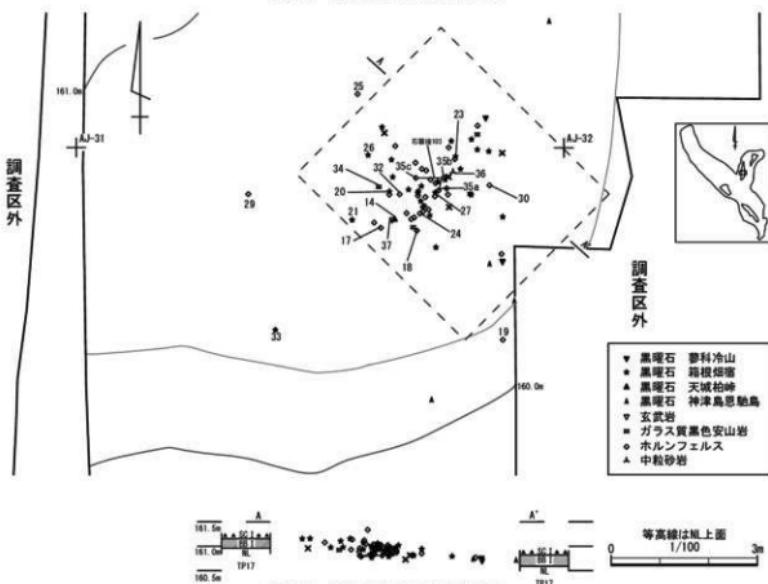
当該礫群は2区AI31グリッド北半部に位置し、礫6点で構成される。礫群を構成する礫は主として第I黒色帶から出土している。礫はいずれも赤化礫である。当該礫群が位置するのが標高160.5~160m付近で、礫群が1~3号礫群が位置する平坦面と浅く窪む谷地形との転換点に位置する。礫の分布密度は低い。当該礫群の南南西約3.6mの位置に5号礫群が位置する。

##### 5号礫群(第18図 第6表)

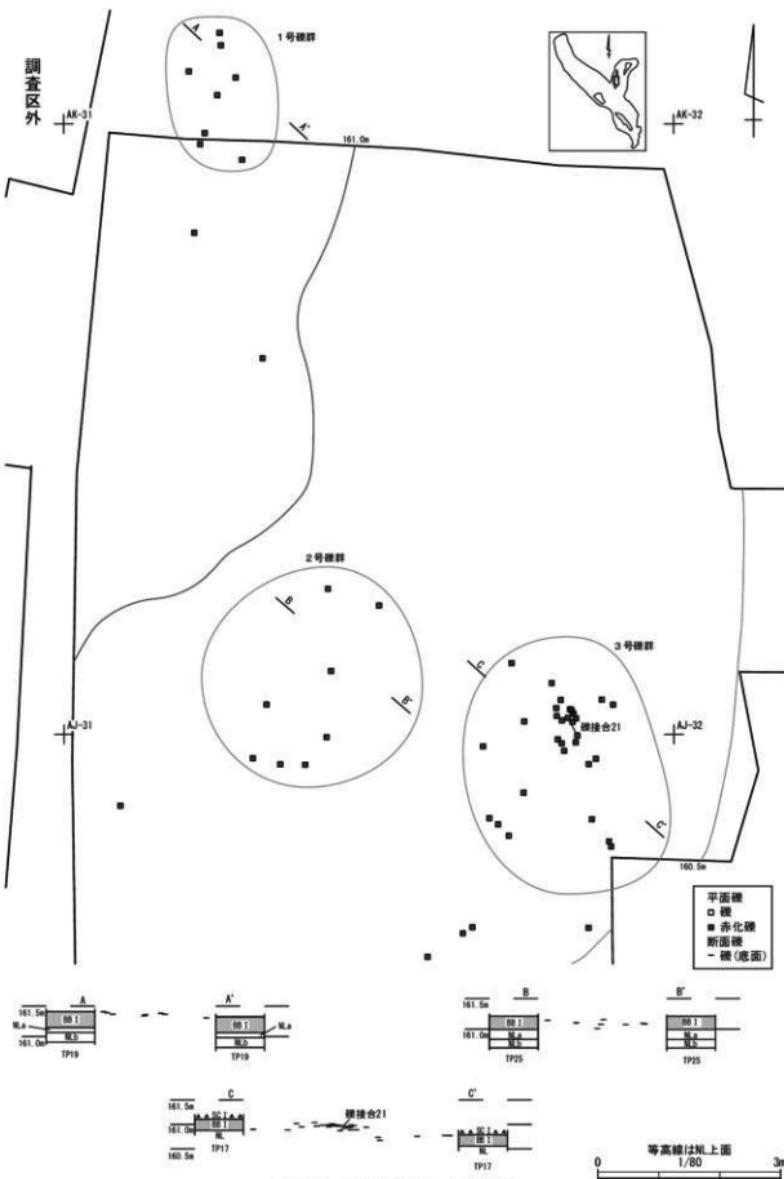
当該礫群は2区AI31グリッド南端部に位置し、礫14点で構成される。礫群を構成する礫は第I黒色帶~第Iスコリア帯にかけて出土している。当該礫群が位置するのは標高159~159.5m付近を中心とし、等高線に沿うように礫が散乱している。礫は14点中9点が赤化礫である。当該礫群の南東側に6号礫群が隣接する。



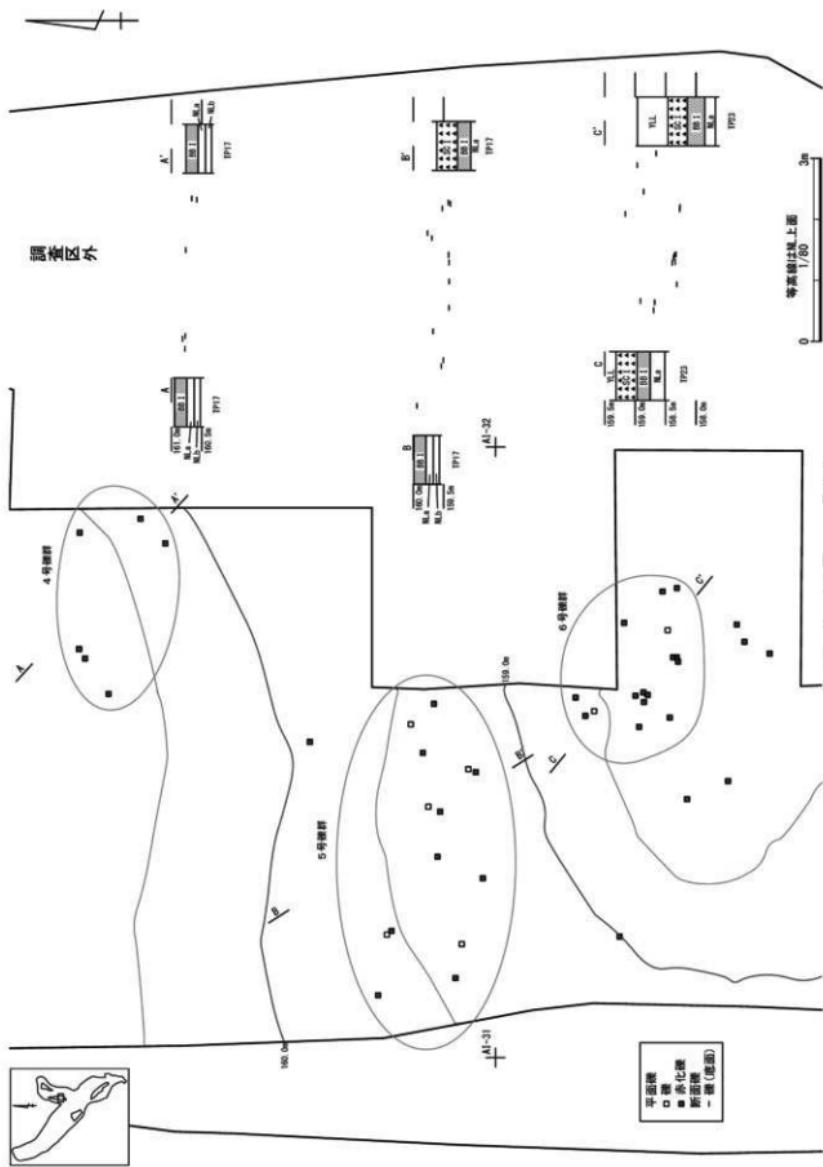
第15図 第II文化層器種別分布図



第16図 第II文化層石材別分布図



第17図 第II文化層1～3号縞群



第18図 第II文化層4～6号縄群

第6表 第II文化層礫属性表

礫群番号	構成 種数	赤化				形態			石材					
		完形		非完形		亜角	亜円	不明	玄武岩	多孔質	安山岩	安山岩質	サディ	不明
		非赤化	赤化	非赤化	赤化1									
1号礫群	8	2		6		7	1		1		7			
2号礫群	8	2		6		6	1	1			7	1		
3号礫群	30		11		18	1	27	3		10	1	19		
4号礫群	6		1		5		5	1			5	1		
5号礫群	14	2	3	3	6		13	1			12	1		1
6号礫群	16	6	2	8		15	1		4		11	1		
遺構外	21	1	4	1	14	1	17	3	1		20		1	
計	103	3	29	6	63	2	90	11	2	15	1	81	4	1

## 6号礫群(第18図 第6表)

当該礫群は2区AH31グリッド北半部に位置し、礫16点で構成される。礫群を構成する礫は第I黒色帯を中心に、第Iスコリア帯にかけて出土している。また当該礫群範囲内の休場層下層内に礫が含まれており、一応、第II文化層のものとして取り扱うが、本来的には第III文化層以降である可能性もある。当該礫群が位置するのは浅く窪む谷地形底面である。礫は16点中14点が赤化礫である。亜角礫を主体とする。

## 石器ブロック(第14~16図)

石器は1区AO・AP35・36グリッド付近、及び2区AI・AJ31グリッド付近、また4区で1点出土している。このうち集中して出土しているのは2区である。

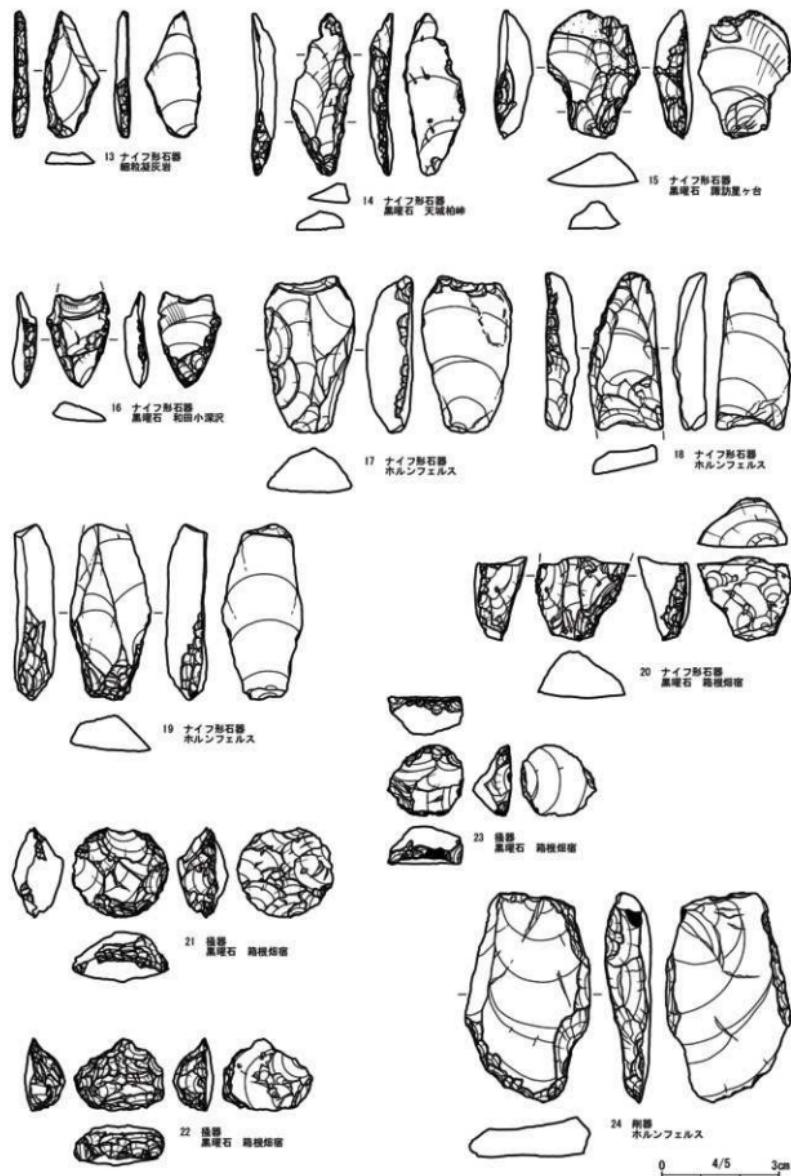
石器ブロックとして理解ができるのが、2区AI・AJ31グリッドに跨る石器分布域である。該当する付近には2号礫群及び3号礫群が見られるが、石器ブロックと重複するのが3号礫群で、石器ブロックは礫群中心から西南にずれている。石器ブロックを構成するのはナイフ形石器、搔器、削器等である。またホルンフェルス及び箱根烟宿産黒曜石の石核、剥片が出土し、ホルンフェルスの石刃も認められる点から、これらの石材の剥片剥離作業が行われた可能性がある。なお石器ブロック南側の4号礫群付近から、5・6号礫群が位置する浅く窪む谷地形へと地形が転換し、石器の出土が殆ど見られない特徴とする。

## (3) 遺物(第19~22図 第7・8・14表 写真図版20)

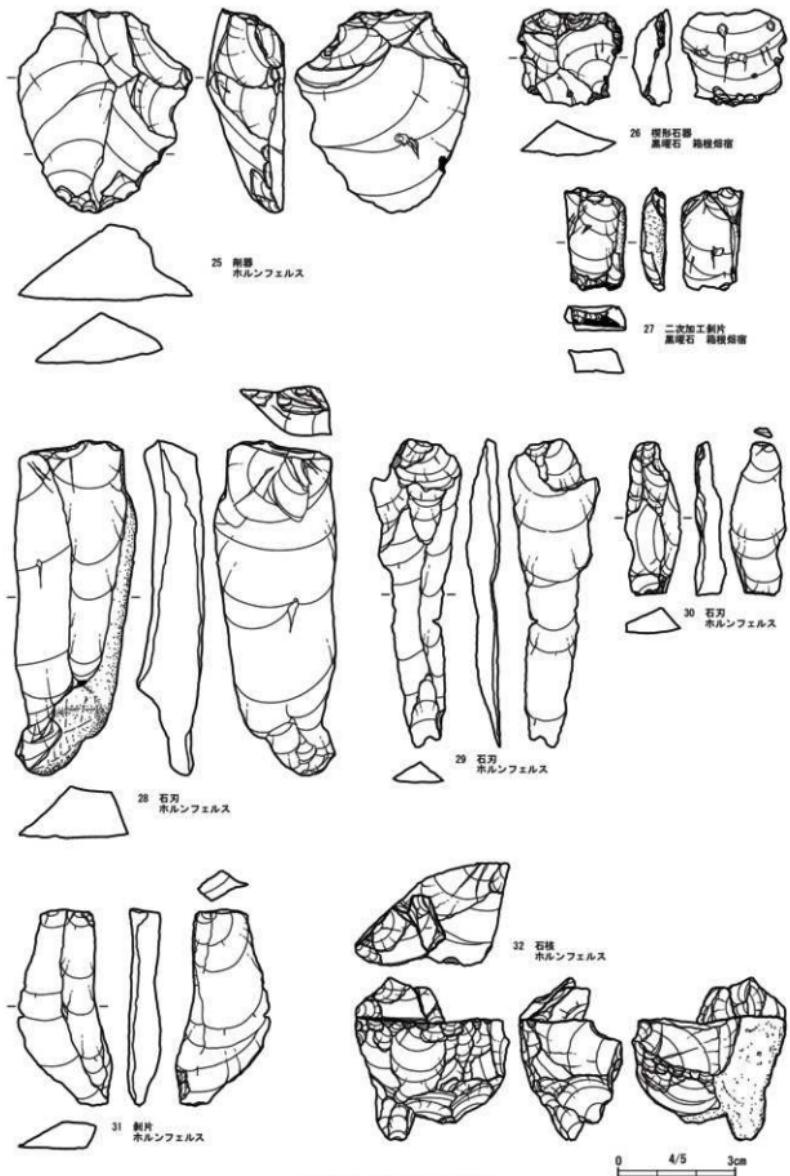
第II文化層から出土した石器は93点を数える。そのうち27点を図化・掲載した。第7表の石器組成表でも理解できるように、剥片が主体を占めている。

13~37が第II文化層から出土した石器である。13~20がナイフ形石器である。13は細粒凝灰岩である。二側縁加工を施している。石刃素材か。14~16・20は黒曜石ナイフ形石器である。14は天城柏峰産、15は諏訪星ヶ台産、16は和田小深沢産、20は箱根烟宿産黒曜石を石材としている。14は二側縁加工を施している。横断面では背部が厚めである。15・16・20は折損資料か。15は厚手で、基部を大きく調整している。16は二側縁加工を施したものか。20も極めて厚みがある。17~19はホルンフェルス製ナイフ形石器で、そのうち17・19の断面形は三角形を呈する。17は先端が折損した後に、二次加工を施したものか。基部には打面が残置する。18は基部が折損した資料である。プランティング(急傾斜度調整)を施し、鋸歯状をなす。19は石刃素材か。先端が折損している。基部側の側縁を二辺共に加工したものか。

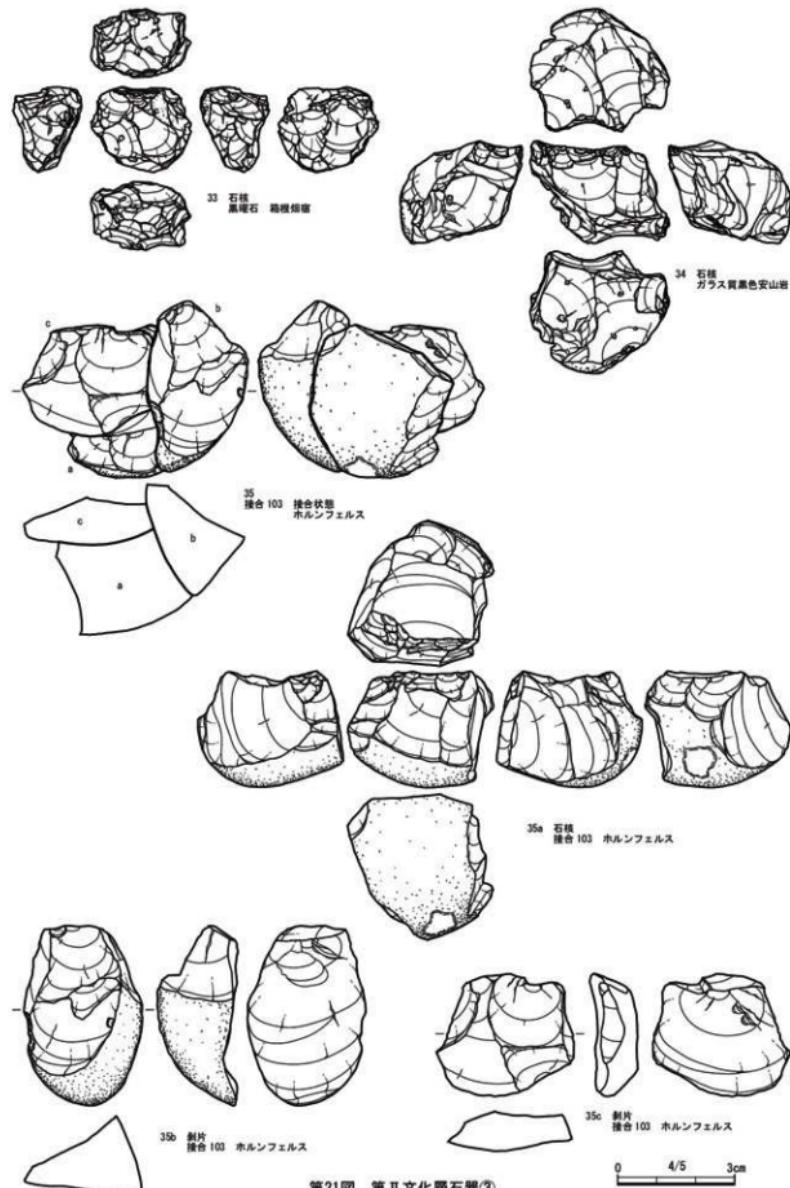
21~23は搔器である。3点とも箱根烟宿産黒曜石を素材とし、平面形は円形である。そのうち21は比較的丁寧に整形され、ほぼ全周に刃部加工が施されている。



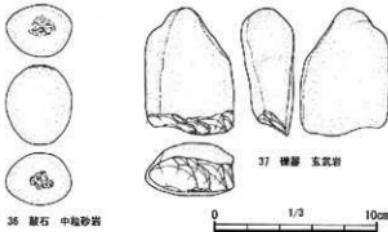
第19図 第II文化層石器①



第20図 第II文化層石器②



第21図 第II文化層石器③



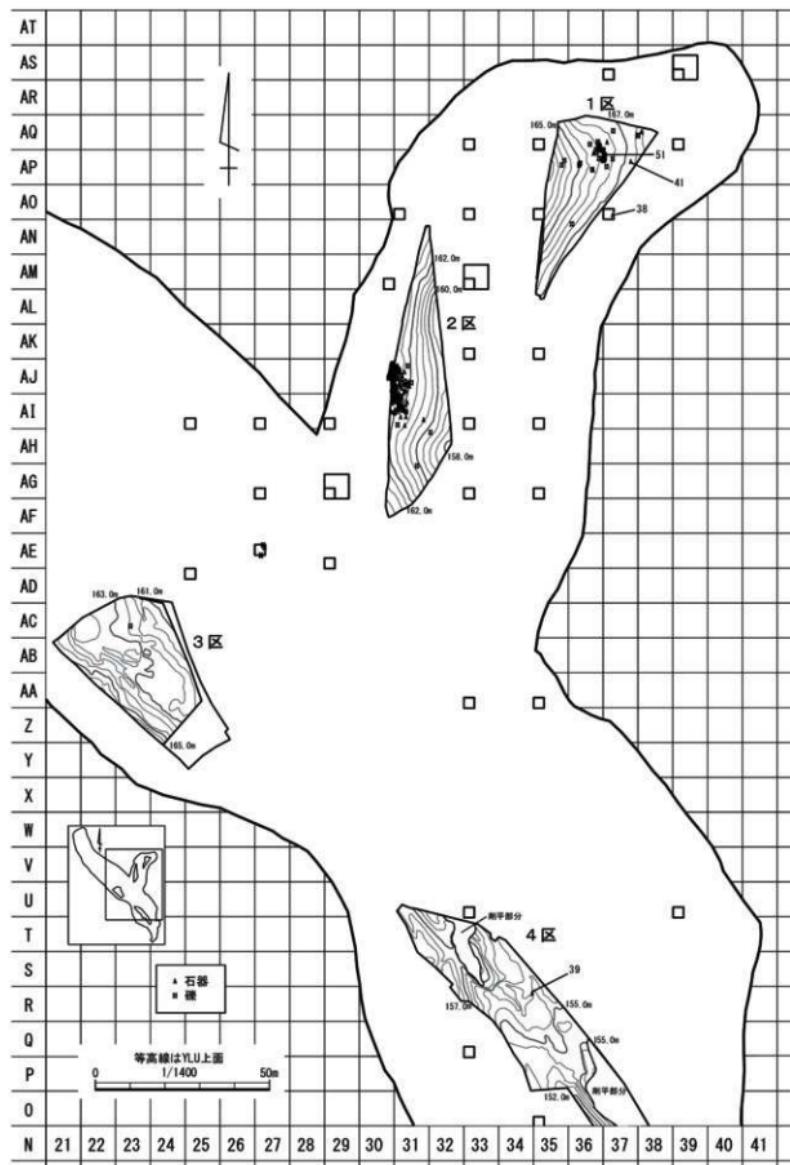
第22図 第II文化層石器④

第7表 第II文化層石器組成表

		ナイフ形石器	縫器	削器	複形石器	二次加工制片	石刃	剝片	碎片	石核	種器	敲石	計
天城柏峰	AGKT	1						1	1				3
箱根烟宿	HWHJ	1	3		1	2		14	4	1			26
神津島思鶴島	KZOB							4	3				7
諏訪里ヶ台	SWHD	1											1
夢料冷山	TSTY							5					5
和田小深沢	WDKB	1											1
産地不明								1	3				4
黒曜石計		4	3		1	2		25	11	1			47
玄武岩	Ba										1		1
ガラス質黑色安山岩	GAn							3		1			4
ホルンフェルス	Hor	3		2				3	21	8	2		39
細粒凝灰岩	FT	1											1
中粒砂岩	MSS											1	1
計		8	3	2	1	2	3	49	19	4	1	1	93

第8表 第II文化層(掲載分)石器組成表

		ナイフ形石器	縫器	削器	複形石器	二次加工制片	石刃	剝片	石核	種器	敲石	計
天城柏峰	AGKT	1										1
箱根烟宿	HWHJ	1	3		1	1			1			7
諏訪里ヶ台	SWHD	1										1
和田小深沢	WDKB	1										1
黒曜石計		4	3		1	1			1			10
玄武岩	Ba									1		1
ガラス質黑色安山岩	GAn									1		1
ホルンフェルス	Hor	3		2				3	3	2		13
細粒凝灰岩	FT	1										1
中粒砂岩	MSS										1	1
計		8	3	2	1	1	3	3	4	1	1	27



第23図 第Ⅲ文化層石器出土状況

24・25は削器か。2点ともホルンフェルスを石材としている。24は側縁から先端部にかけて刃部を整形している。向かいの側縁にはやや大きめの剥離調整を施す。25は厚手の剥片を利用している。先端部に刃部を整形している。剥片打面側は剥離調整か。

26は楔形石器か。石材は箱根畠宿産黒曜石である。2ヶ所認められる剥離は打撃に由来する潰れか。

27~31は剥片類か。27は箱根畠宿産黒曜石を石材とする二次加工剥片か。礫面が残置する。側縁の一帯に細かな剥離調整を施している。28~31はホルンフェルスを石材とする。28~30は石刃に分類可能である。28は一方の側縁から先端にかけて礫面が残置する。厚手で、上端部に打面と打痕が観察される。また31は側縁と稜線が平行でないため、石刃に分類しなかった。

32~35は石核か。32及び35がホルンフェルス、33は箱根畠宿産黒曜石、34がガラス質黒色安山岩を石材とする。32・35は2区A I 31グリッドの石器ブロックのほぼ中心部で出土した接合資料である。33は石器ブロック範囲より外れた南西約3mの位置で出土している。

36・37は礫石器である。36は敲石か。中粒砂岩を石材とする。2区A I 31グリッドの3号礫群のほぼ中央で出土している。やや小型の円礫で、両端部に敲打痕が観察される。37は礫器である。玄武岩を石材とする。一方の端部に片刃の刃部が作り出されている。

## 4 第III文化層

### (1) 概要

1区A P・A Q36・37グリッド付近、2区A I・A J 31グリッド付近及び3区・4区にて、石器236点、礫82点が出土している(第23図)。礫群は5基確認されている。休場層上層を中心に礫が散見されたことにより第III文化層を設定している。1区で確認した1号・2号礫群は、第II文化層において石器が散見された区域とほぼ重複する。また2区では、第I・II文化層内で礫と石器を多く認めたAH30・31グリッドの浅く窪む谷状の地形を望む平坦地ではなく、より標高が上位の位置に礫群・石器ブロックが認められる。

石器は2区A I・A J 31グリッド付近に多く分布する。なお休場層上層から富士黒土層付近にかけて石器が重層的に出土しており、第IV文化層から縄文時代の石器と当該文化層の石器が混在している状況である。

### (2) 遺構

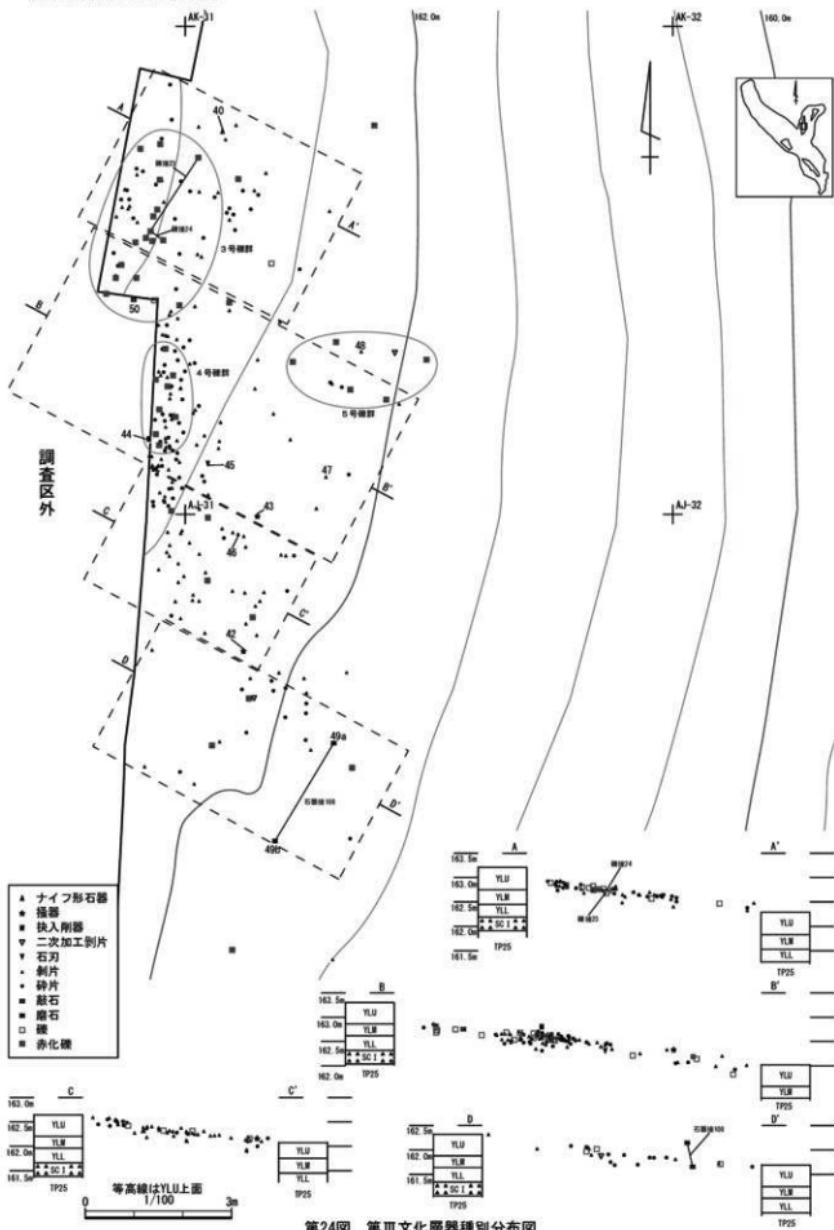
#### 1号礫群(第26図 第9表)

当該礫群はA P・A Q36グリッドに位置し、礫13点で構成される。礫群を構成する礫は主として休場層上層上位にて出土している。礫はいずれも赤化礫で、石材として輝石安山岩6点、玄武岩5点である。他の礫群と比較して玄武岩の比率が高い。当該礫群の南側に2号礫群が接する。

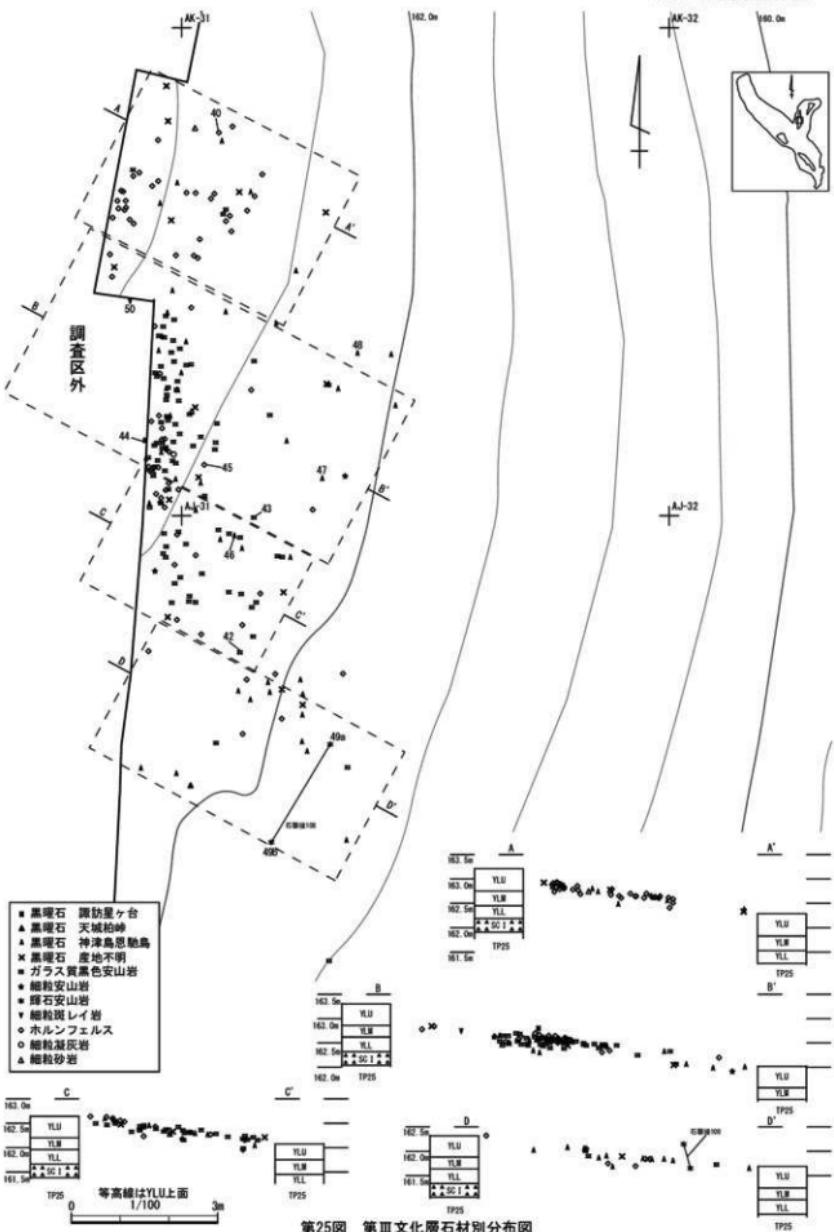
#### 2号礫群(第26図 第9表)

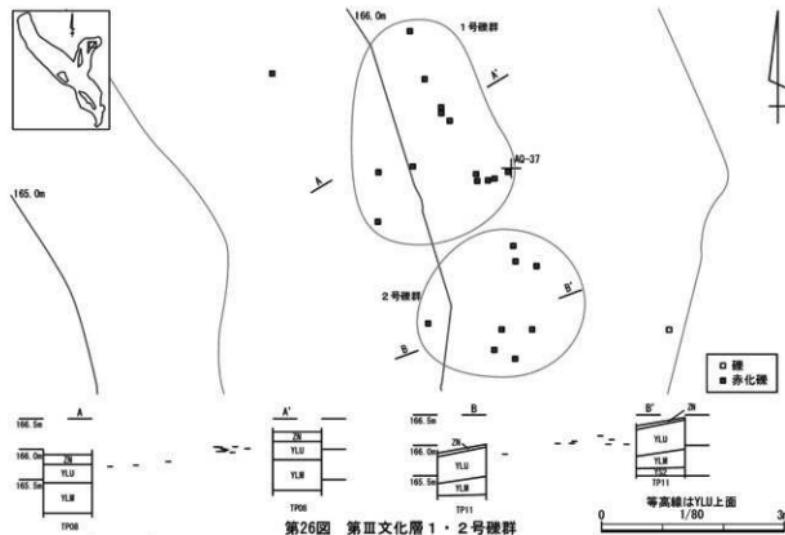
当該礫群は1区A P 36・37グリッドに位置し、礫8点で構成される。礫群を構成する礫は主に休場層上層中位から上位にかけて出土している。礫はいずれも赤化礫である。当該礫群の北側に1号礫群が広がる。平面的には1号礫群と近接しているが、出土層位が当該礫群の方がやや下位のため、別個の礫群と判断した。2号礫群北辺で台石1点が出土している。

第2章 富内山I西道路(土3地点)

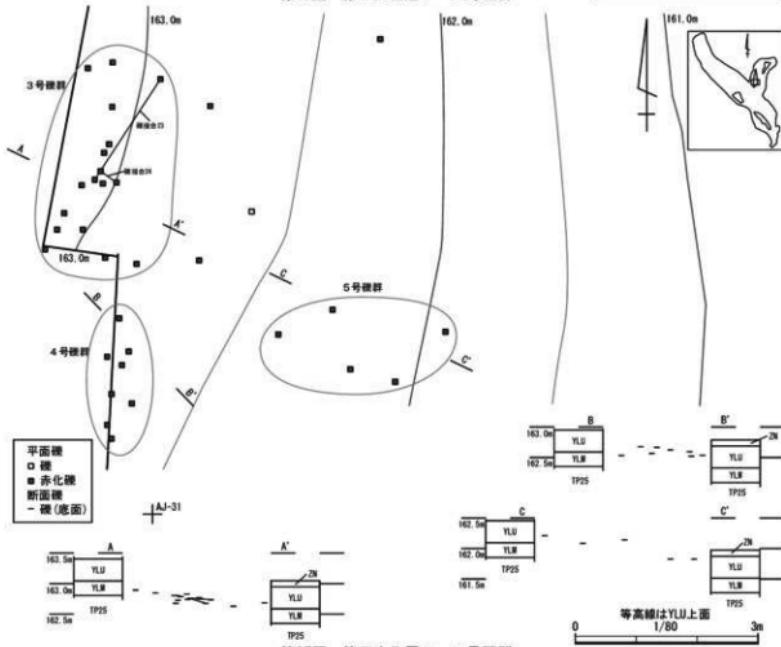


第24図 第III文化層種別分布図





第26図 第Ⅲ文化層1・2号櫛群



第27図 第Ⅲ文化層3～5号櫛群

**3号礫群(第27図 第9表)**

当該礫群は2区A J30・31グリッドに位置し、礫18点で構成される。礫群を構成する礫は主に休場層上層にて出土している。礫はいずれも赤化礫である。当該礫群の南側に4号礫群が広がる。礫群は2区西壁際で検出されており、本来は2区外へ拡がる可能性がある。

**4号礫群(第27図 第9表)**

当該礫群は2区A J30グリッド東辺に位置し、礫8点で構成される。礫群を構成する礫は主に休場層上層中位にて出土している。礫はいずれも赤化礫である。当該礫群の東側約1.8mの位置に5号礫群が位置する。4号礫群は平面的には3号礫群と近接しているが、出土層位が当該礫群の方が若干上位である。礫群は2区西壁際で検出されており、本来は2区外へ広がる可能性がある。

**5号礫群(第27図 第9表)**

当該礫群は2区A J31グリッドに位置し、礫5点で構成される。礫群を構成する礫は主に休場層上層にて出土している。礫はいずれも赤化礫である。この礫群は出土層位では4号礫群とほぼ同じであるが、独立した礫群である。

**石器ブロック(第24・25図)**

第III文化層における石器群は2区A I・A J30・31グリッド付近で特に集中するため、石器ブロックとして理解可能である。石器は休場層上層を中心出土する。

該当する区域には3～5号礫群が位置するが、石器の出土分布は礫群の範囲を超えてA J30グリッドへ帶状に延びる。このグリッドを含め、2区は東へと緩やかに傾斜する地形を基調とするが、石器分布がさほど2区東半部に認められてはいない。この石器ブロックにはナイフ形石器、搔器、削器、剥片等多数の石器により構成される。石器群の主体を占める剥片及び碎片では、3号礫群付近においてホルンフェルスが主体を占める一方、4号礫群付近ではガラス質黒色安山岩が卓越する。4号礫群以南、A J31グリッド杭周辺においてはガラス質黒色安山岩の剥片等が最も多く、ホルンフェルスもある程度出土している。これらホルンフェルスとガラス質黒色安山岩の剥片等の分布により、それぞれの礫群付近にて石材剥離作業が行われた可能性を認める。これら3号礫群及び4号礫群は、出土位置に高低差がやや認められるため各々の所属時期差を想起されるも、剥片等で見られる上下移動とその垂直分布では、石材剥離作業の時期差は判然としない。

なお神津島恩馳島産黒曜石の剥片等はこの石器ブロックの範囲にくまなく散乱する。第IV文化層では神津島恩馳島産黒曜石の細石刃が多く見られることから、当該剥片も第IV文化層に属する可能性も想起されたが、出土層位が休場層中層の出土が多くを占めるため、第III文化層のものとして取り扱っている。

**(3) 遺物(第28・29図 第10・11・14表 写真図版21)**

第III文化層から出土した石器は236点を数える。石器組成は第10表で示したようにガラス質黒色安山岩の剥片が60点と約4分の1を占める。

38～51が第III文化層から出土した石器である。38は細粒安山岩を石材とし、全体的に風化が進む。1区A O37テストピット休場層上層から出土した。この38の器厚は厚手で、片方の側縁に石器素材面が残る。全体の平面形状が木葉形に近似するため、当該資料は尖頭器未製品と推定した。第III文化層における尖頭器類はこの資料のみである。

39～41はナイフ形石器である。39・40の石材はホルンフェルス、41は諏訪星ヶ台産黒曜石である。39

第9表 第III文化層礫属性表

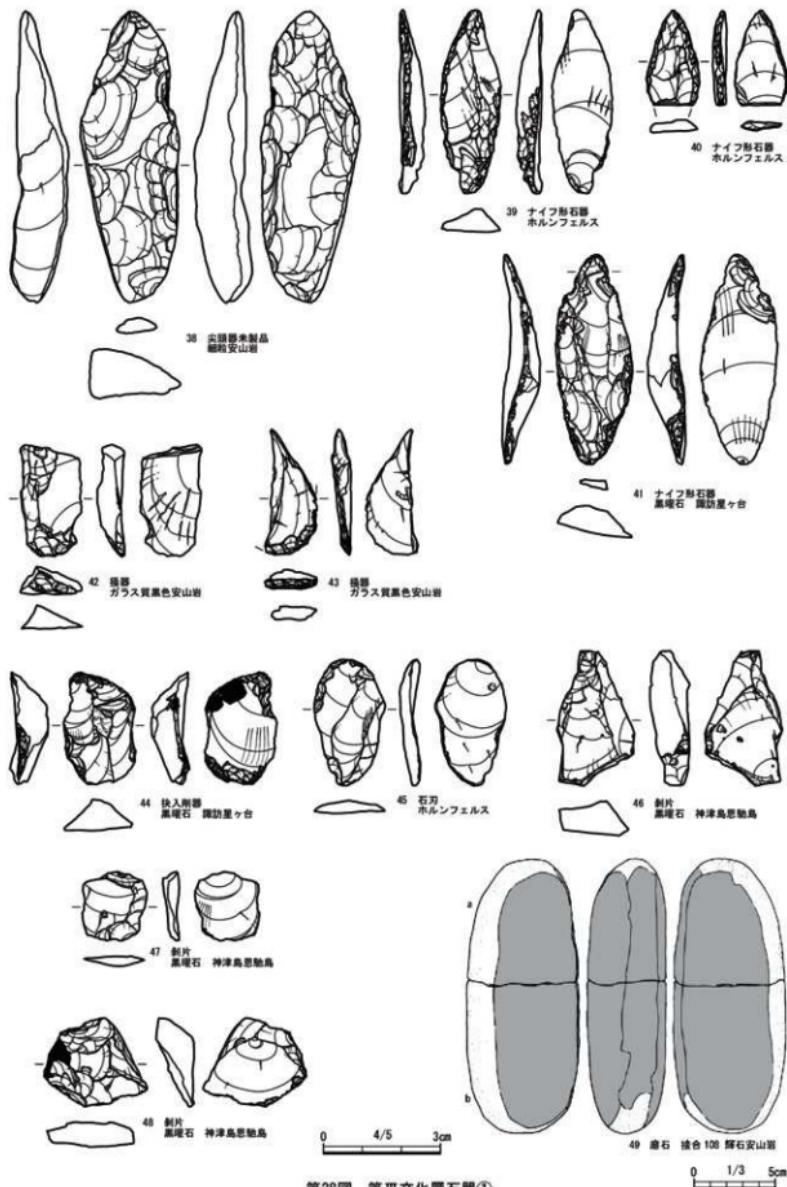
礫群番号	構成 礫数	赤化			形態				石材												
		完形		非完形	不明	亜角	亜円	円	不明	玄武岩	玄武岩質	安山岩	安山岩質	多孔質	多孔質	流紋岩	頁岩	珪質	砂岩	細粒	砂岩中粒
		赤化	非赤化	赤化I																	
1号礫群	13	3	8	2		12	1			5		6	1	1							
2号礫群	8	4		4		4	3	1			1	7									
3号礫群	18	5	12		1	16	1		1	5		12	1								
4号礫群	8	6	2			2	3	3			5	1							1	1	
5号礫群	5	1		4		4		1		1		3						1			
道横外	30	9	2	18	1	24	4	2		2	3	21	1	1				1	1		
計	82	28	2	44	7	1	62	12	7	1	13	4	54	4	2	1	1	2	1		

第10表 第III文化層石器組成表

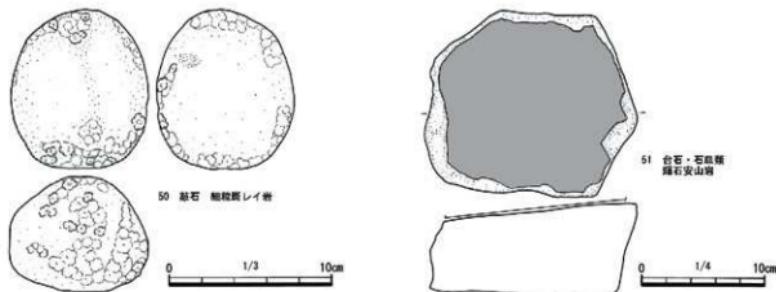
黒曜石	種類	品名	尖頭器未製品	ナイフ形石器	標器	抉入削器	使用痕削片	二次加工削片	石刃	剥片	碎片	敲石	磨石	台石・石皿類	計		
																1	1
天城柏神		AGKT									1						1
箱根烟宿		HHHJ									1						1
神津島恩馳島		KZ06							3	22	21						46
諏訪里ヶ台		SWHD	1		1	1											3
蓼科丸山		TSTY								1							1
産地不明										1	13						14
黒曜石計			1		1	1	3		25	35							66
ガラス質黒色安山岩		GAn		2					60	22							84
細粒安山岩		FAn	1						1								2
輝石安山岩		An(Py)											2	1	3		
細粒斑レイ岩		FG									1	41	32				76
ホルンフェルス		Hor	2								1						
細粒凝灰岩		FT									1						1
細粒砂岩		FSS								3							3
計			1	3	2	1	1	3	1	130	90	1	2	1			236

第11表 第III文化層(掲載分)石器組成表

黒曜石	種類	品名	尖頭器未製品	ナイフ形石器	標器	抉入削器	石刃	剥片	碎片	敲石	磨石	台石・石皿類	計			
													3	2		
神津島恩馳島		KZ06							3							3
諏訪里ヶ台		SWHD		1		1										2
黒曜石計				1		1		3								5
ガラス質黒色安山岩		GAn		2												2
細粒安山岩		FAn	1													1
輝石安山岩		An(Py)									2	1	3			1
細粒斑レイ岩		FG								1						1
ホルンフェルス		Hor	2		1	1	1	1								3
計			1	3	2	1	1	3	1	2	1					15



第28図 第III文化層石器①



第29図 第III文化層石器②

は二側縁加工を施している。肩部が見える。4区R34グリッドの栗色土層中からの出土である。40は打点が存在したと思しき基部付近は折損している。41は先端部左右側縁が剥離のために抉られている。左側縁は細かい剥離により加工されている。

42・43は搔器か。2点ともガラス質黒色安山岩で、下端部には刃部が認められる。43は刃部から基部にかけて折損している。共に休場層上層からの出土である。

44は抉入削器か。右側縁の一部に細かな剥離により、抉り状の刃部を設けている。また両端部にも細かな剥離加工を施している。

45～48は剥片類である。そのうち45はホルンフェルスを石材とする石刀か。全体的に風化が進む。打点側縁辺に細かな剥離による二次加工の痕跡が見られる。46～48は神津島恩馳島産黒曜石を石材とする。48は微細な剥離が縁辺に認められるため、刃器として利用した可能性もある。

49～51は疊石器類である。49は磨石か。石材は輝石安山岩である。A 31グリッドで出土している。長梢円形蹠を利用し、両正面及び側面、計3面を磨面とする接合資料である。49aは休場層上層、49bは富士黒土層からの出土である。50は敲石で石材は細粒斑レイ岩である。2区A J 30グリッドの休場層上層から出土している。円蹠を利用し、上下端部及び側縁に敲打痕が認められる。3号蹠群付近の出土である。51は台石で、輝石安山岩を石材とする。平坦面は磨面か。

## 5 第IV文化層

### (1) 概要

第IV文化層は細石刃の出土により設定した(第30図)。1・2区A I・A J 30・31グリッド付近、4区にて石器36点が出土している。石器は休場層から富士黒土層にかけて出土し、層位的には第III文化層と一部重なり、出土地点もほぼ同じであるため、細石刃等を抽出して文化層を設定したものである。第IV文化層の細石刃は附編にて掲載した望月明彦氏による黒曜石产地分析により、神津島恩馳島産黒曜石が大勢を占め、一方第III文化層に分類した黒曜石剥片も神津島恩馳島産が多い状況が明らかになっている。この剥片は前項で述べたように休場層上層からの出土であり、細石刃等よりも相対的に下位の出土である点から剥片類は第III文化層のものと考えている。しかし石器類の上下移動が激しいという前提からすれば、第III文化層と当該文化層の石器を確實に鑑別させたとは言えない。

第12表 細石刃石器組成表

		複合石器	細石刃	細石刃核	計
黒曜石	神津島恩馳島	AGKT	2	30	32
	諏訪星ヶ台	KZOB		2	2
	天城柏峰	SWHD		1	1
	黒曜石計		2	33	35
	ガラス質黒色安山岩	GAn		1	1
計			2	33	36

第13表 細石刃(掲載分)石器組成表

		複合石器	細石刃	細石刃核	計
黒曜石	天城柏峰	AGKT		1	1
	神津島恩馳島	KZOB	2	21	23
	諏訪星ヶ台	SWHD		2	2
	黒曜石計		2	24	26
	ガラス質黒色安山岩	GAn		1	1
計			2	24	27

## (2) 遺構

## 石器ブロック(第31・32図)

石器はA I・A J 30・31グリッドで集中して出土しており、石器ブロックとして理解できる。この石器ブロックは細石刃、楔形石器、細石刃核により構成される。主体は細石刃である。出土層位は休場層上層から漸移層、富士黒土層に至るまで拡散している。細石刃及び楔形石器の石材は神津島恩馳島産黒曜石が殆どである。また1点のみ出土した細石刃核の石材はガラス質黒色安山岩である。ガラス質黒色安山岩を石材とする石器は第III文化層でも多く出土しているが、細石刃核は第IV文化層のものとして分離している。

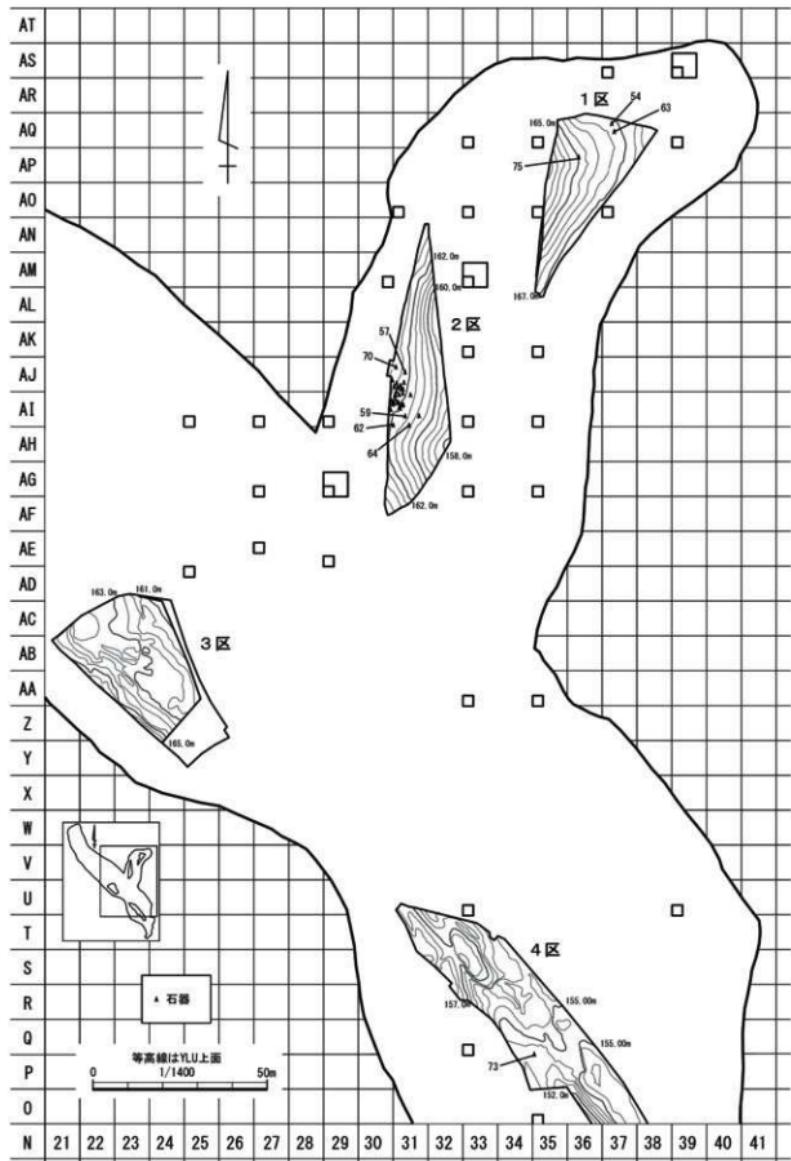
## (3) 遺物(第33図 第12・13表 写真図版21)

第IV文化層から出土した石器は36点を数える。そのうち27点を図化・掲載した。52~78が第IV文化層から出土した石器である。

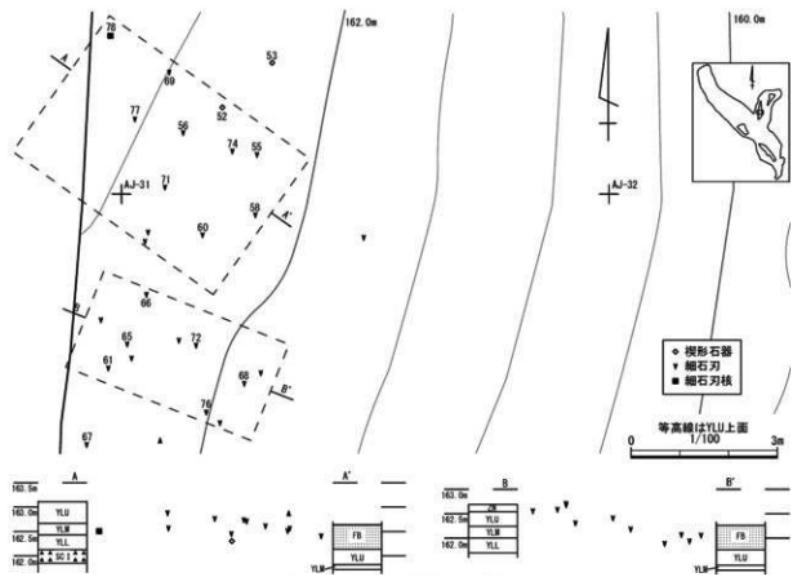
52・53は楔形石器か。2点とも石材は神津島恩馳島産黒曜石である。52の下端部は潰れか。53は石核の可能性もある。

54~77は細石刃か。石材は全て黒曜石で、諏訪星ヶ台産もしくは神津島恩馳島産であるが、主体は後者である。完形と思しき細石刃は無く、折り取られているものが大半を占め、打点側のみ残ったものが多いのがわかる。

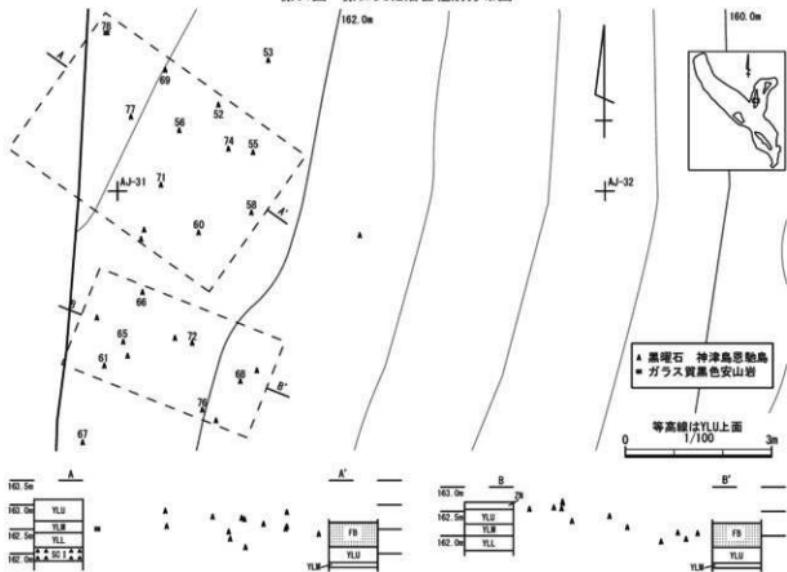
78は細石刃核と推定された資料である。この第IV文化層で当該石器のみガラス質黒色安山岩である。周辺地域では細石刃の石材は黒曜石を多用する中で、この石材の細石刃核は異色である。検討段階において厚手の搔器という位置づけもなされたが、搔器にしては刃部が長い。おそらくガラス質黒色安山岩の剥片の主要剥離面をそのまま打面とし、細石刃剥離作業を行ったものと推定される(堤 隆氏による教授)。



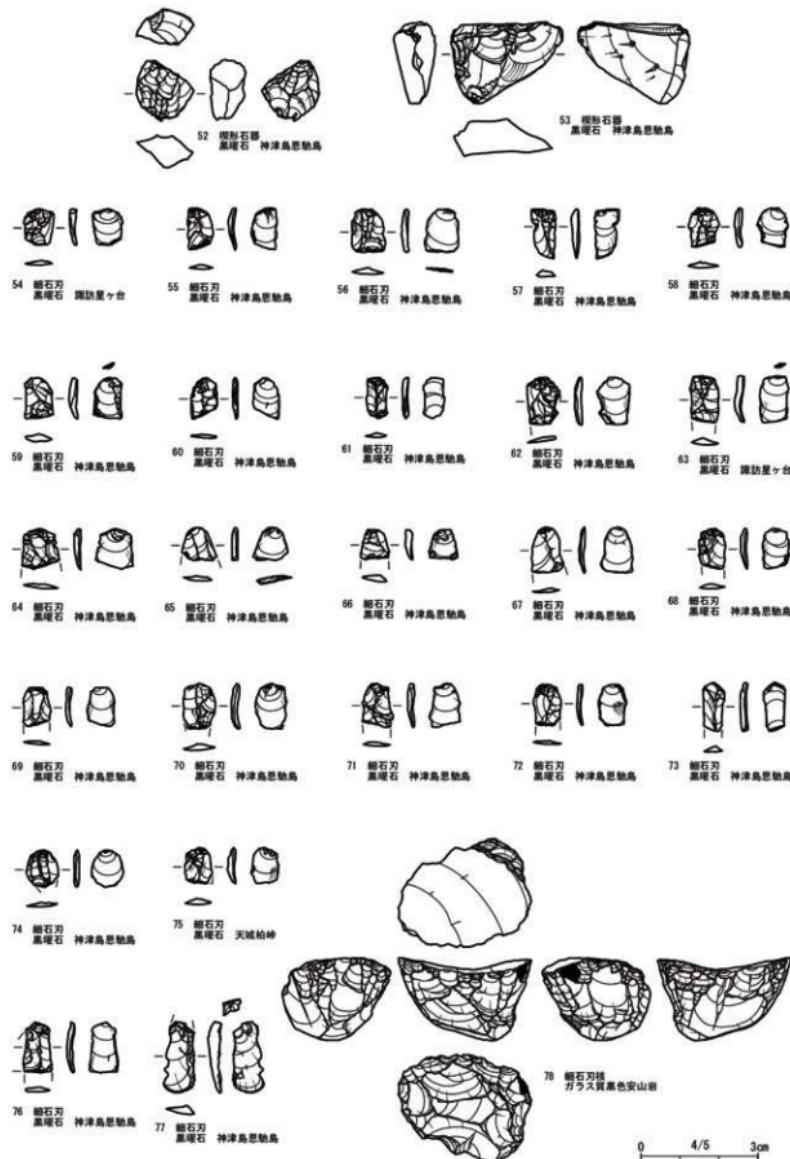
第30図 第IV文化層石器出土状況



第31図 第IV文化層種別分布図



第32図 第IV文化層石材別分布図



第33図 第IV文化層石器

## 第2節 石器時代の遺構と遺物

第14表 旧石器時代石器一覽表(第Ⅰ～Ⅲ文化層)







## 第3節 縄文時代の遺構と遺物

### 1 概要

#### (1) 遺構

富沢内野山Ⅰ西遺跡で縄文時代の遺構・遺物が確認されたのは1～4区である(第34図)。1区及び2区は前節で述べたように、遺跡が位置する谷から北北東へ分岐する支谷内に位置する。3区(現地調査時には4区)はその分岐部よりやや西側、谷の西側斜面から谷底付近、すなわちY～AC21～26グリッド付近に位置する。また4区(現地調査時には3区)は3区より谷口側の西側斜面地中位、すなわちM～V31～38グリッド付近に位置する。これら1～4区にて確認された縄文時代の遺構は集石・土坑・炉跡である。1区は支谷最奥部にあたり、尾根上に位置する富沢内野山Ⅲ北遺跡における縄文時代の生活領域と重複する。この支谷最奥部は西に下がる傾斜地であると同時に休場層下層面の地形からすれば、埋没した谷のような地形がさらに下位層に存在したのかもしれない。埋没谷の存在も想起される区域は、AO～AQ35～38グリッド付近に該当し、当該グリッド付近に集石と土坑が集中し、遺物も多く出土している。もっともこれらは時期差があり、また土坑も落し穴としての機能が想像されるものもあり、1区が継続して生活領域だったとは考えられない。また1区では草創期の遺物が伴う集石が確認されており、検討を要する。

また当該遺跡では1m以上の比高差をもって陥没している箇所がある。新期スコリア堆積時に形成されたと考えられるものなど、大きなものでも4ヶ所の断層が見られた。これらは地滑りに由来するものと考えられる。この地滑りに起因する断層により3区・4区の等高線は乱れている。3区及び4区において旧石器時代の包含層である休場ローム層が残存する範囲は狭小で、該期の知見が無いのはこのためである。縄文時代の遺構が幾つか散見されるが、果たして本来の位置から如何ほど移動しているのかは定かではない。

#### (2) 遺物

当該遺跡で注目されるのが草創期に位置づけられる土器群及び石器群である。該期の遺物は1区及び2区にて確認されている。当該遺跡で確認された土器群は草創期から後期まで時間幅があり出土点数は2,900点を数える。これらの土器群は時期を基準とする群、形式を基準とする類により分類した。この類は文様・胎土・器形等により種として細分が可能である。土器群の主体は早期である。石器群は土器群と同様、草創期から後期まで時間幅が想定される。石器については所属時期が判然としない例が多い中、草創期の尖頭器類を抽出し得ている。なお土器については池谷信之氏・小崎晋氏に指導を受けた。

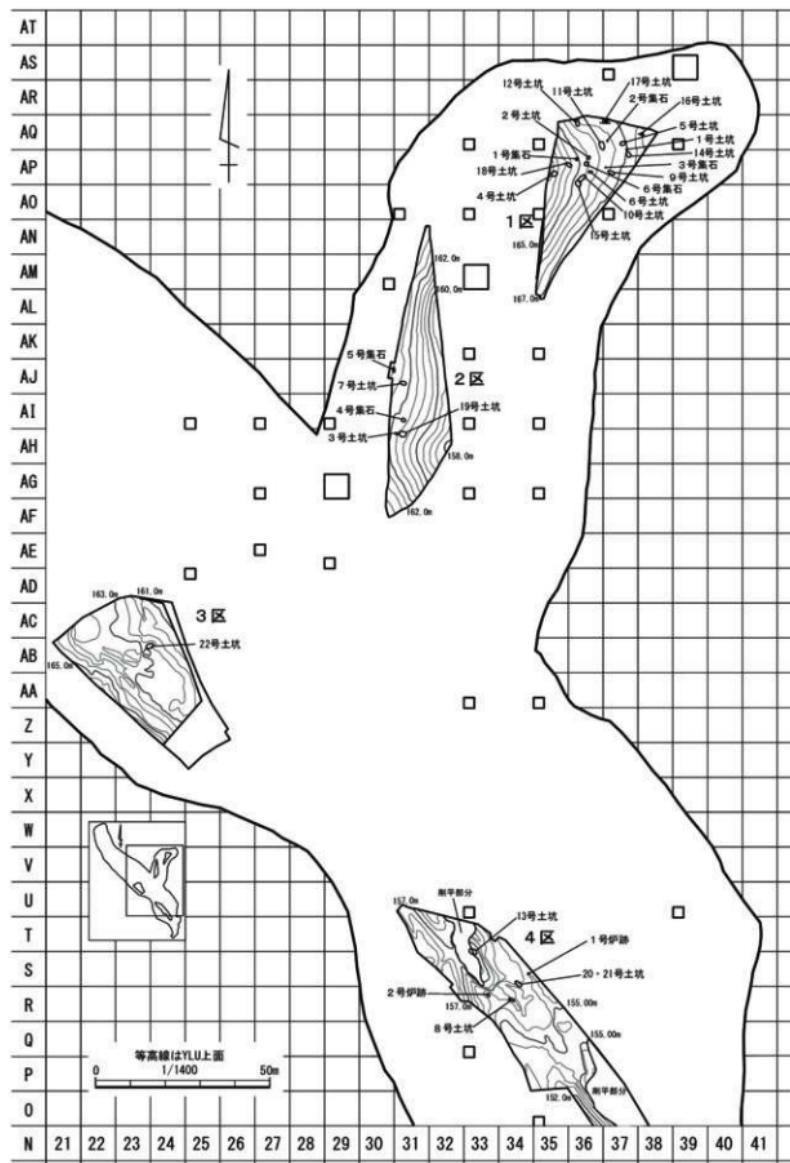
### 2 遺構と遺構内出土遺物

#### (1) 集石

集石は現地調査時にはSYという略号を付与し、調査・記録されている。当該遺構は本来的に人為的に熱を加えられた結果、赤色化した礫や破碎した礫が集積された遺構を「集石」として取り扱うことが多い。しかし当該報告では赤化礫等の無い人為的な礫の集積も「集石」として分類・紹介する。

#### 1号集石(第35・37図 第16・18表 写真図版5・24)

当該集石は1区AP36グリッドに位置する。集石を構成する礫は65点である。礫は主として漸移層上面から富士黒土層にかけて出土している。礫は赤化礫が主体である。本来はこの集石は土坑状の掘り込



第34図 繩文時代遺構位置図

みを伴うもので、径10~20cm程度の碟が円形に納まっていた可能性がある。また長さ約40cm×幅約20cm程度の大型碟が東側約40cmの位置で検出されている。検出された碟の状況から同じ遺構として取り扱っている。

集石内から79・80が出土している。両者とも縄文土器である。前者は横位の絡条体圧痕文が施されている。胎土中に纖維か。草創期の押圧縄文段階と考えられる。80は燃糸文か。内面には微かに炭化物吸着の痕跡が見られる。草創期の表裏縄文段階か。

#### 2号集石(第35図 第16表 写真図版5)

当該集石は1区A Q37グリッドに位置する。集石を構成する碟は8点である。碟は漸移層内で出土している。いずれも径10cm程度の碟であったが、赤化碟は認められない。土坑状の掘り込みは確認できなかった。また集石内外に遺物は確認されていない。

#### 3号集石(第35図 第16表 写真図版5)

当該集石遺構は1区A P37グリッドに位置する。集石を構成する碟は8点である。碟は漸移層内で出土している。いずれも径10cm未満の碟である。土坑状の掘り込みは確認できなかった。また集石内外に遺物は確認されていない。

#### 4号集石(第35・37図 第16・17表 写真図版11・25)

当該集石遺構は2区A I 30グリッドに位置する。A H30・31グリッドの埋没谷地形北辺付近にある。集石を構成する碟は33点である。現地調査時においては土坑内の集石と認識されたが、基礎整理段階で土坑を伴わない集石と理解された。しかし現地写真では碟周辺のみ黒褐色土の堆積が見られるので、碟は浅く窓んだ箇所に配置されたものか。当該集石は亜角碟で赤化碟が目立つ。集石最下部に径10~20cm程度の碟を7個配置した後に、最大長40cm程度の大型の角碟を載せ、さらに碟を載せている。

集石内から81が出土している。磨石である。石材は輝石安山岩である。磨り面が3面観察される。下半部は折損している。

#### 5号集石(第35・37図 第16~18表 写真図版12・24・25)

当該集石遺構は2区A J 30グリッドに位置する。2区でも最高所に位置する。集石を構成する碟は91点である。この5号集石は本来2基の集石であった可能性が基礎整理段階で検討されたが、当該報告では1基とした。碟は浅い掘り込みに納置されたものか。

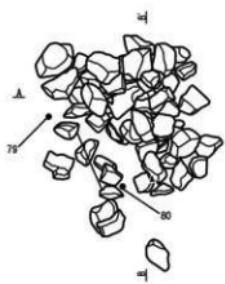
この集石内から遺物82~84が出土している。82・83は縄文土器である。前者はほぼ中央部に横位の隆帶文が貼り付けられている。また上位に斜位の隆帶文が僅かながら残存する。横位の隆帶文には薄く鋭利な工具により刺突文が施されている。内面は指頭によるナデ整形か。炭化物吸着のため黒色を呈する。後者は表面に山形押型文が施されている。押型文の施文順序は横位の後に、縦位に施している。胎土中に纖維か。異方向帶状施文の押型文土器と考えられる。84は磨石である。玄武岩を石材とする。扁平で梢円形を呈する碟を利用する。両側面には磨り面が認められる。上下端面や表裏面に磨り面は認められない。なお集石付近にて出土した炭化物につき放射性炭素年代測定(AMS)を行った結果、8,900±30yrBPという結果が得られた。詳細は附編を参照されたい。

#### 6号集石(第36~39図 第16・18表 写真図版6・22~24)

当該集石遺構は1区A P36グリッドに位置する。現地調査時点ではS Y03として調査を実施した。集

第2章 富沢内野山I西道路（土3地点）

1号集石 + H-36から  
上～2m  
底～2m



165.4m

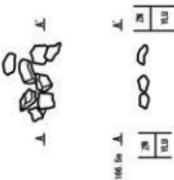


A



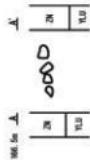
2号集石

+ H-37から  
上～2m  
底～1m



3号集石

+ H-37から  
上～2m  
底～0.5m

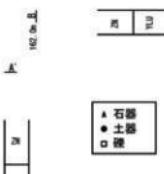


4号集石

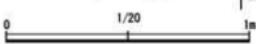
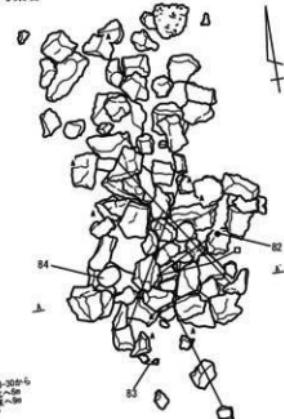
+ H-31から  
上～2m  
底～0.5m



B

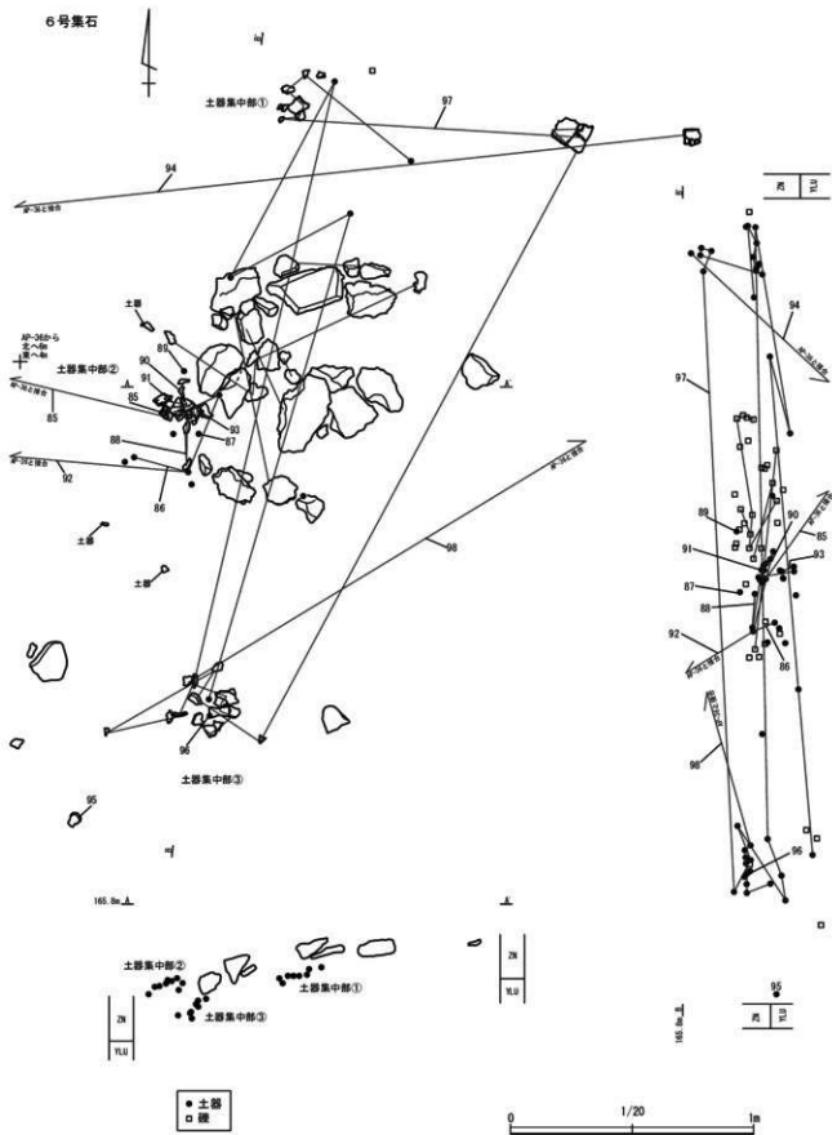


5号集石

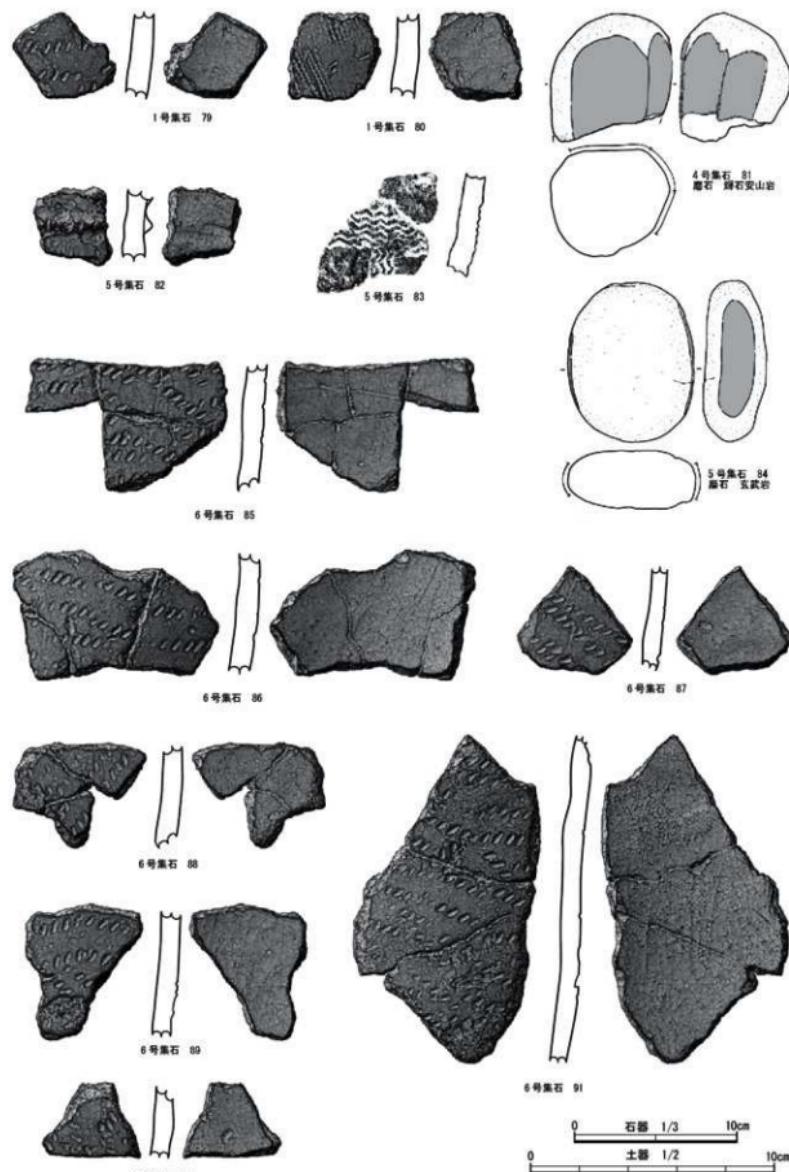


第35図 繩文時代集石①

0 1/20 1m



第36図 縄文時代集石②



第37図 繩文時代集石出土遺物①

石を構成する礫は37点である。礫は漸移層内で出土している。礫は最大長30cm程度を測るものから、拳大の大きさの礫まで散見される。大型の礫は「コ」の字状に配置されたか。土坑状の掘り込みは判然としない。集石付近には土器集中部①～③が確認される。土器集中部②は最も礫に近接して出土している。土器集中部②と礫の出土レベルはほぼ近似値である。さすれば住居跡のような遺構内で遺物集中及び集石が認められた可能性を有する。遺物85～93は土器集中部②、97は①、98は③に該当する。

集石付近から多くの縄文土器が出土しているが、そのうち85～98を掲載した。多くが草創期の遺物である。85～92は縦条体圧痕文が施された縄文土器である。横位もしくは斜位、横位と斜位の縦条体圧痕文が施された資料で、同一個体の可能性がある胴部の破片資料である。内面には特に施文の痕跡は無いが、縱位・横位のナデの痕跡が僅かに観察される。93・95は底部の細片資料である。前者は胴部下端にまで縦条体圧痕らしき痕跡が認められる。後者には底部に縦物の圧痕か。これらは草創期の押圧縄文段階の資料で、葛原沢II式新段階以降か。94は縄文が施された縄文土器である。器面に施された縄文は浅く、肉眼では判然としない。草創期の押圧縄文段階の次の回転縄文段階の所産か。96は口唇部の破片資料である。口唇部には刺突文がほぼ等間隔で施される。土器整形時の指頭痕や擦痕が内外面に観察される。口唇部直下に2段の刺突文列が施される。先端が削れた工具による刺突で、口唇部の刺突文と同一工具か。胎土中に雲母が散見される。この96のみ縄文時代前期の上ノ坊式か。

97・98は同一個体と考えられる資料である。胴部は直線的に立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。口唇部直下に縦条体圧痕が見られ、下位には横位に縄文が施されている。草創期でも回転縄文段階の所産で、仲道A式と時期的に並行か。97・98が出土したのは土器集中部①及び③であり、集石と重複する土器集中部②から出土した押圧縄文段階の土器の時期差も想起される。

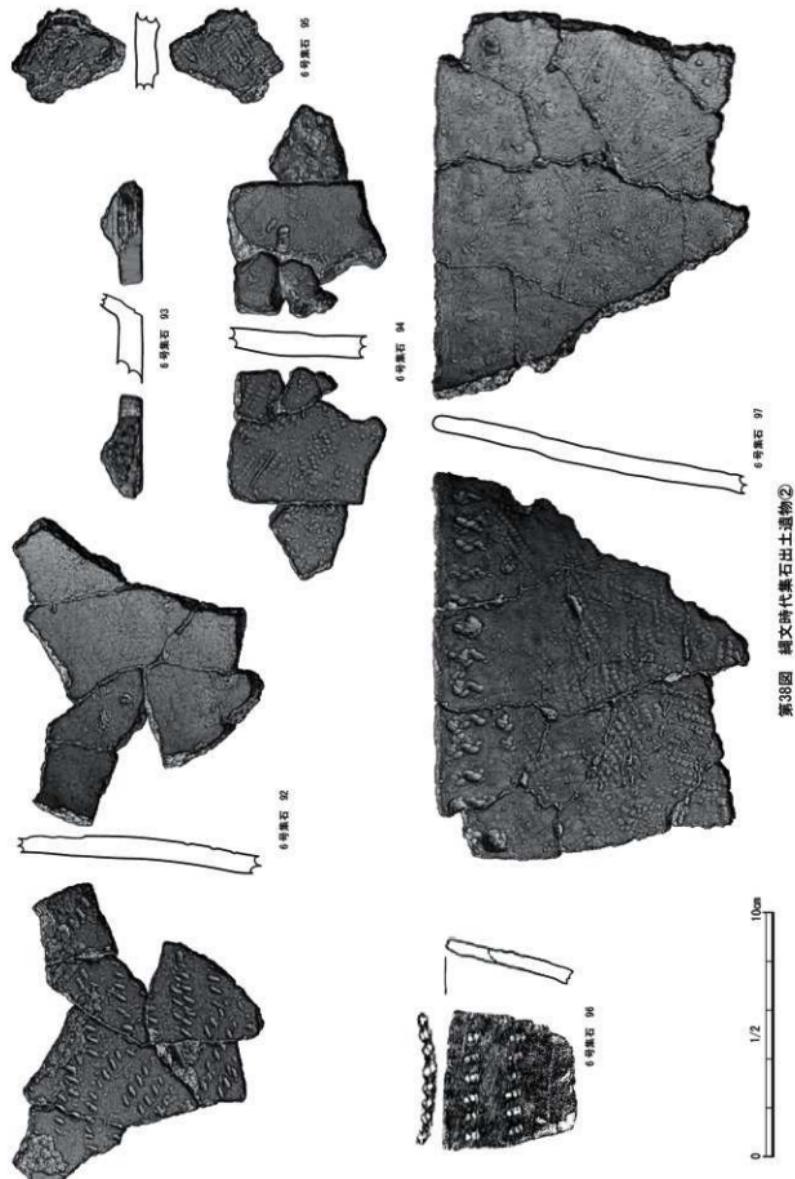
なお91・96・98は炭化物が付着していた。(従) 加速器分析研究所による年代測定の結果、91は $10,480 \pm 40$ yrBP、96は $5,630 \pm 20$ yrBP、98は $10,430 \pm 30$ yrBPと測定された。詳細は附図を参照されたい。

## (2) 土坑(第40～46図 第16～18表 写真図版7・10・17・19・25)

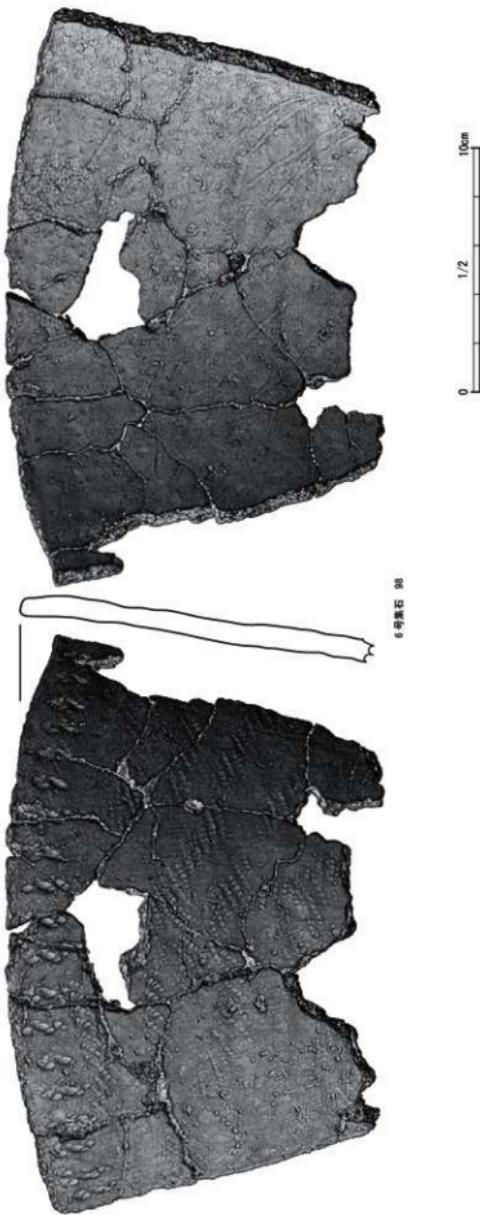
富沢内野山I西遺跡にて確認された土坑は22基を数える。そのうち14基は1区内で確認されている。その1区における土坑の位置は、前述したように埋没谷が位置するものと考えられるAO～AQ35～38グリッド付近に多く確認されている。土坑はその計測値や平面形等、底部の小穴有無等により分類が可能である。

1～3号土坑は平面が円～橢円形を呈し、径1m以下の小型の土坑に分類される。長径・短径の比率も1：1に近い。このうち覆土中に礫が散見される土坑は2・3号土坑である。2号土坑は1区AP36グリッド、6号集石の北側に位置し、休場層上層～漸移層上面にて確認された。内部より炭化物が出土し、放射性炭素年代測定の結果、 $10,230 \pm 30$ yrBPという結果が得られた。詳細は附図を参照されたい。3号土坑は2区AH31グリッドにかけての埋没谷北西辺、19号土坑西側に位置する。富士黒土層上面にて確認された。これらの土坑は黒褐色～暗褐色土の覆土を基調とする土坑であるのに対し、1号土坑は黄褐色土を覆土の主体とする。1区AP・AQ37グリッドに位置し、休場層下層上面で確認した。検出状況から1号土坑の覆土は休場層に由来するものと推定され、さすれば当該土坑の所属時期は旧石器時代に遡る可能性もある。

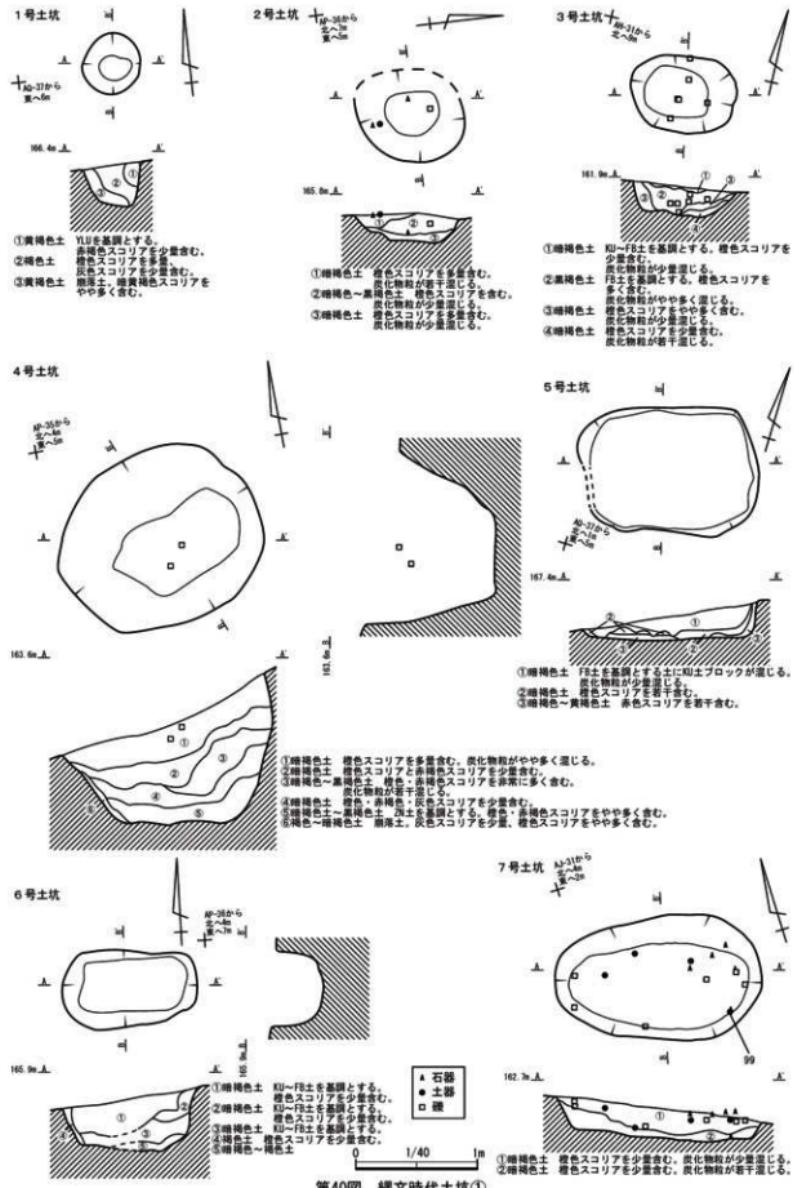
4～7号土坑は1～3号土坑よりも規模が大きいタイプの土坑である。長径も1～2m程度で、平面形は方形～橢円形で、長径・短径の比率は1：1～2：1の間にある。4号土坑は1区AP35グリッドの休場層上層上面にて確認された。土坑は1区西辺付近の傾斜面で検出標高値も162.8～163.5m付近を測る。上端はやや円形、底面は歪な橢円形を呈する土坑で、覆土中には炭化物粒・スコリアを含む暗褐色土を中心に観察される。最大深度は約1.3mを測り、底面は平坦である。5号及び6号土坑は長方形



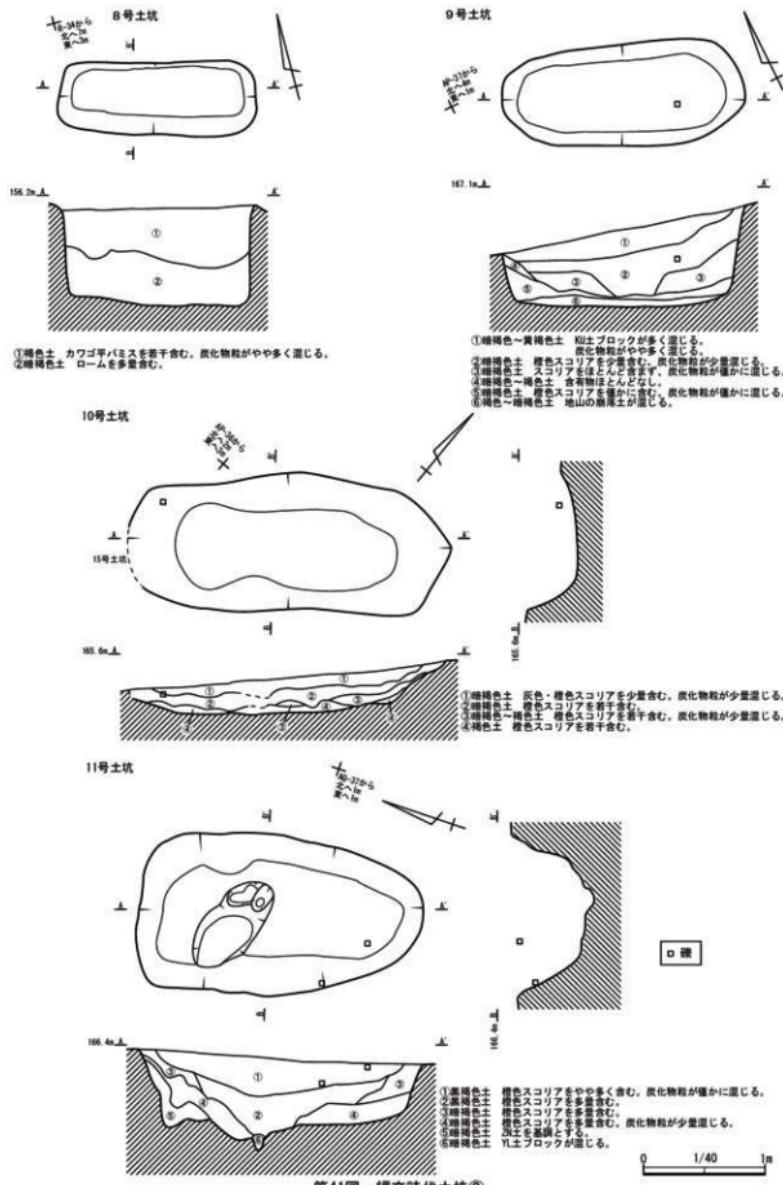
第38图 新石器时代集石出土遗物②



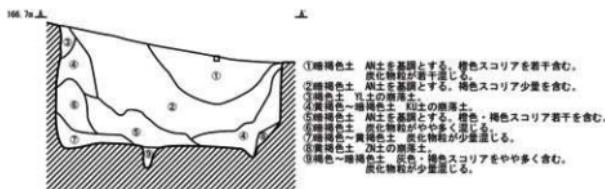
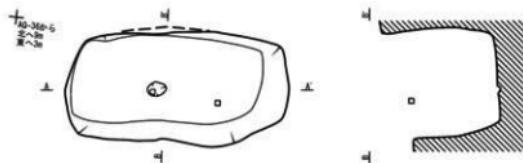
第39図 桶文時代漆石出土遺物③



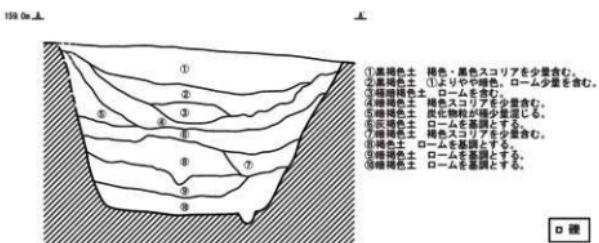
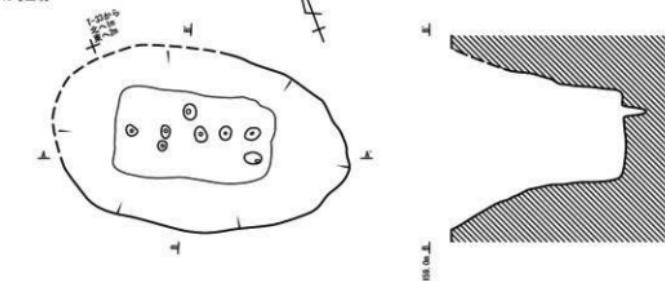
第40図 繩文時代土坑①



12号土坑



13号土坑



0 1/40 1m

第42図 縄文時代土坑③

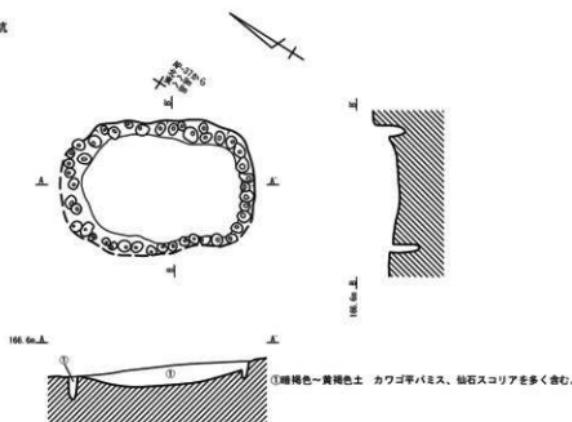
を呈する。両者とも覆土を栗色～富士黒土層を基調とする。1区A Q37グリッドの漸移層上面付近で確認された5号土坑は壁が直立気味で、底面も特に平坦に仕上げられており、1区A P36グリッドの休場層上層上面にて確認された6号土坑と性格が異なる。7号土坑は2区A J31グリッド、埋没谷の北側に位置し、栗色～富士黒土層中にて確認された。平面はやや長めの楕円形を呈し、炭化物粒と橙色スコリアが含まれる暗褐色土を覆土とする。覆土中に礫・土器等が出土している。99は7号土坑から出土した縄文土器で、胸部のみの破片資料である。内外面に横位方向のナデ調整の痕か。表面下端付近に横位の沈線文が施されている。胎土中に纖維が含まれる。縄文時代早期の所産か。

8～10号土坑は平面が狭長な長方形～楕円形を呈するタイプである。長径は1.5～3m、短径が0.6～1.2m程度で、長径と短径の比率は2.5：1前後である。8号土坑は4区R34グリッドに位置する。平面は長方形を呈し、壁は直立する。覆土第1層の褐色土中にカワゴ平パミスが含まれる。縄文時代後期代か。9号土坑は1区A P37グリッドに位置する。漸移層上面にて確認した。平面は長楕円形を呈し、壁は直立させている。この土坑は長軸方向を斜面上方に向けている。3号集石が西北側に位置する。一方、10号土坑は8・9号土坑と異なり、壁は直立させず、緩やかに立ち上げさせている。1区のA P36グリッドに位置し、漸移層上面にて確認された。土坑の長軸方向を埋没谷の方向と並行させている。また土坑端部が15号土坑と重複する。時期的には10号土坑が先行か。

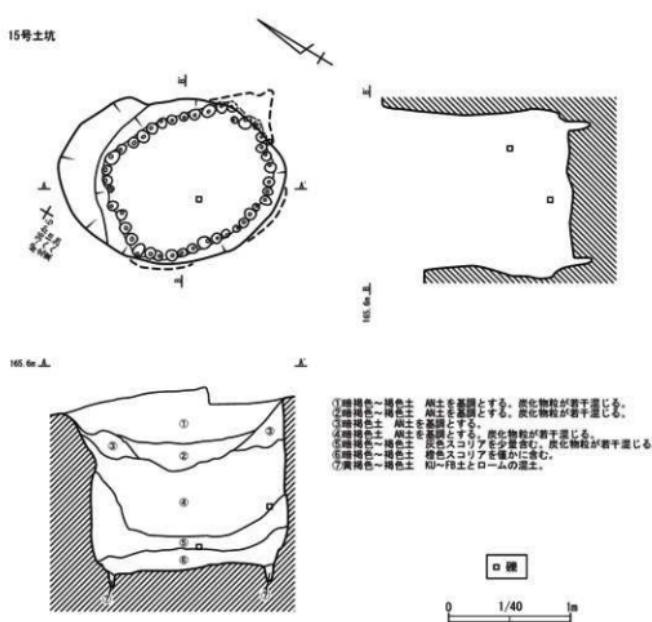
11～15号土坑は土坑内部に小穴等が認められるタイプである。11号土坑は1区A Q36・37グリッド、埋没谷のほぼ中央に位置する。漸移層上面にて検出されている。平面形は歪な楕円形を呈し、長軸方向と埋没谷の等高線がほぼ並行する。底面中央付近に小穴が掘られている。壁は直立気味である。12号土坑は1区A Q36グリッド、埋没谷の北縁付近に位置か。平面形は長方形で、壁は直立させている。小穴は底面のほぼ中央に1基認められる。覆土は暗褐色土を基調とし、カワゴ平パミスや新期スコリア等が含まれないという現地での所見から、所属時期は縄文時代中～後期代か。13号土坑は底面に複数の小穴が認められるタイプである。4区S・T33グリッドに位置する。栗色土層上面にて確認された。上端平面は楕円形、底面は長方形を呈する。土坑は一部後世の削平を受けている。底面に小穴8基が設けられている。小穴は18～26cm程度の深さを持ち、底面長軸方向に5基直列する。この13号土坑は典型的な狩猟用の落し穴と考えてよいだろう。14・15号土坑は隅丸長方形の底面の周縁に連続して小穴を配するタイプである。前者は1区A P37グリッド、後者はA P36グリッドに位置する。14号土坑は栗色～富士黒土層面で確認された風倒木痕の下位に位置し、初めて土坑の存在を確認したのは休場層下層上面である。覆土中にはカワゴ平パミス等が見られる。15号土坑は漸移層上面で確認された覆土は7層に分層が可能で、暗褐色土層が主体であり、10号土坑と接する。15号土坑の上端平面形は楕円形で、長径1.86m、短径1.31mを測る。底面周縁に認められた小穴は42基で、深さは概ね15cm程度を測る。一方の14号土坑はこれと同様の底面を持ち、周縁に認められる小穴は44基を数える。14号土坑は覆土中に含まれたスコリアの状況から縄文時代後期以降と考えられる。また15号土坑は14号土坑と同様の構造であるため、同時期の遺構と考えたい。ただしその特殊な構造から狩猟用の落し穴と即断し得ないものである。隣接する富沢内野山III北遺跡等では同じ構造の土坑は未確認である。

16～22号土坑は底面に小穴を設けないタイプであるが、1～11号土坑と比較して深い。16号土坑は1区A Q38グリッドに位置する。1区北東域で、埋没谷の谷尻付近か。平面形は円形を呈していたと考えられる。休場層上層上面で検出され、休場層由来の覆土を持つため、縄文時代草創期より時期的に遡る可能性を持つ。17号土坑は1区A Q37グリッドに位置する。調査区北壁際にて確認されたもので、土坑北半は調査区外へ延び、南端はテストピットにて失われている。底面の平面形は隅丸長方形を呈していたと考えられる。深さは2.62mを測る。調査区北壁面の土層観察から、当該土坑は暗褐色土層上面から掘り込まれており、上位の覆土にはカワゴ平パミスが含まれている。所属時期から縄文時代後期のもの

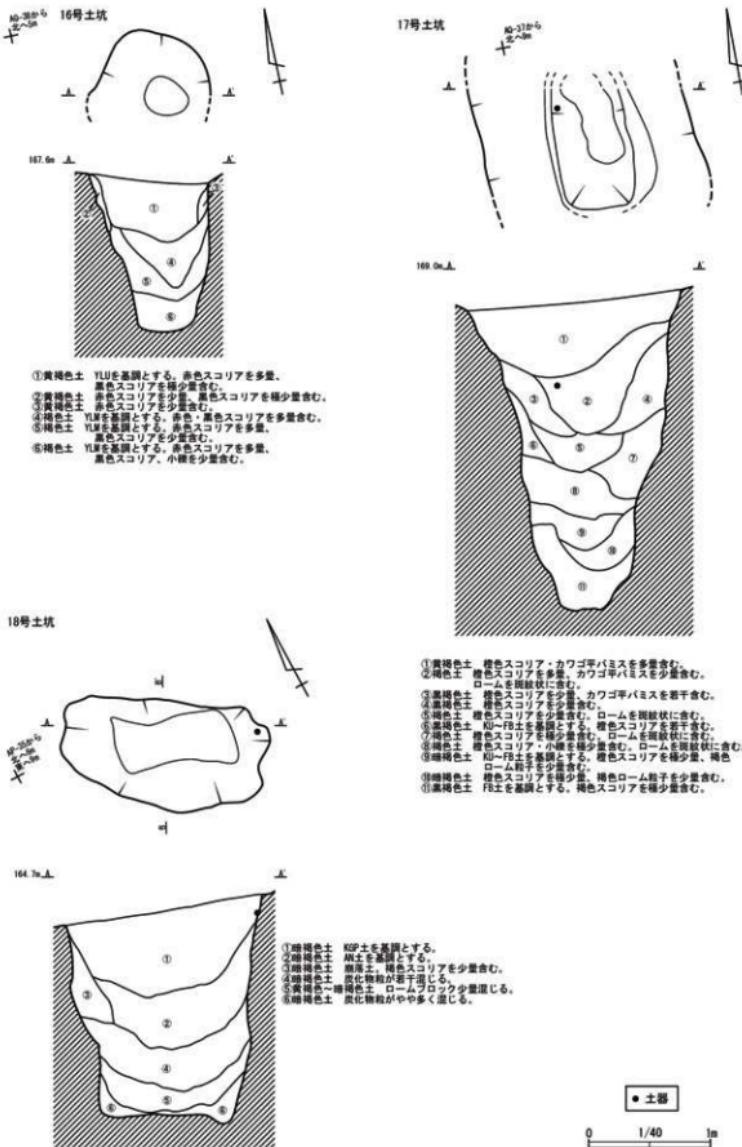
14号土坑



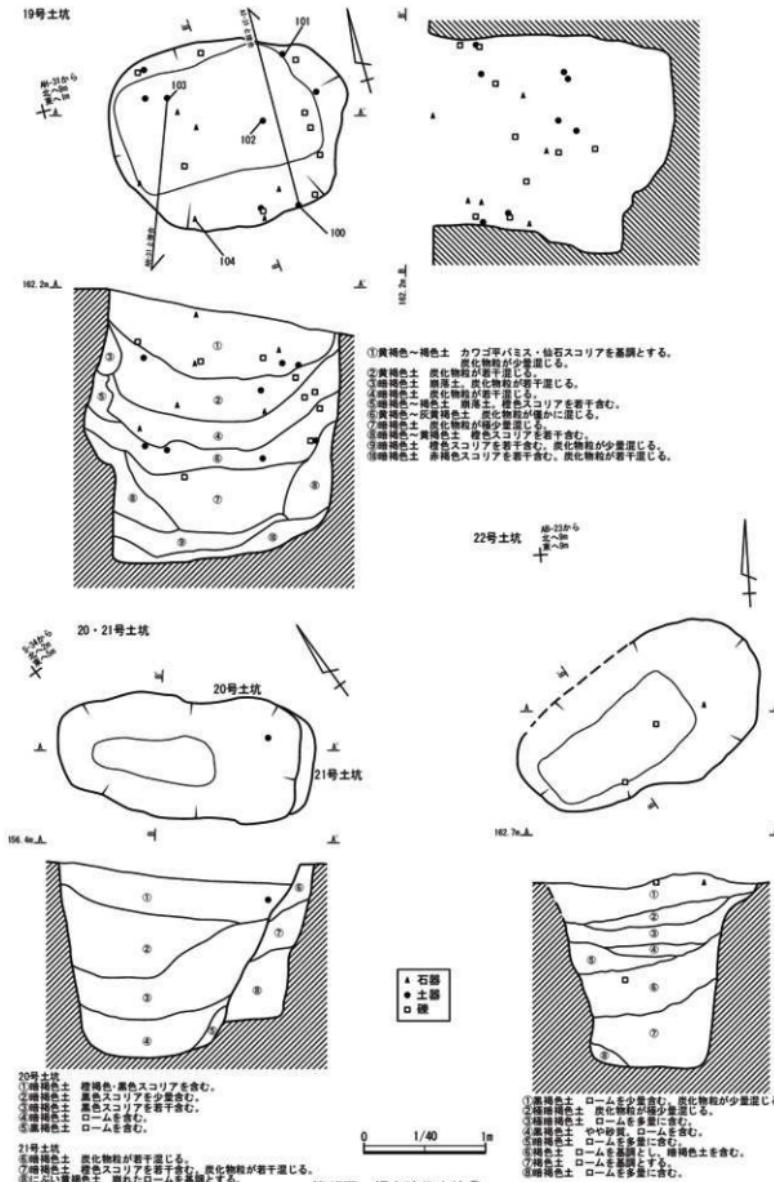
15号土坑

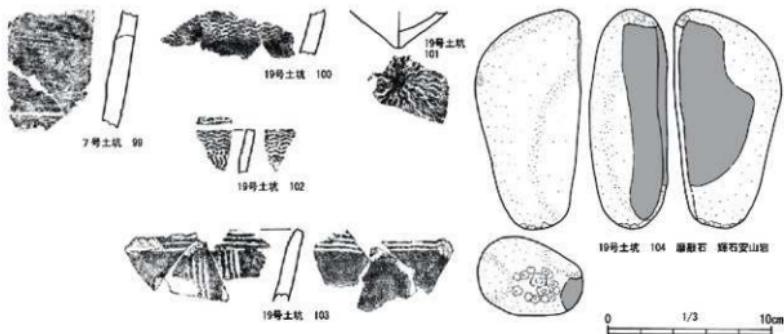


第43図 縄文時代土坑④

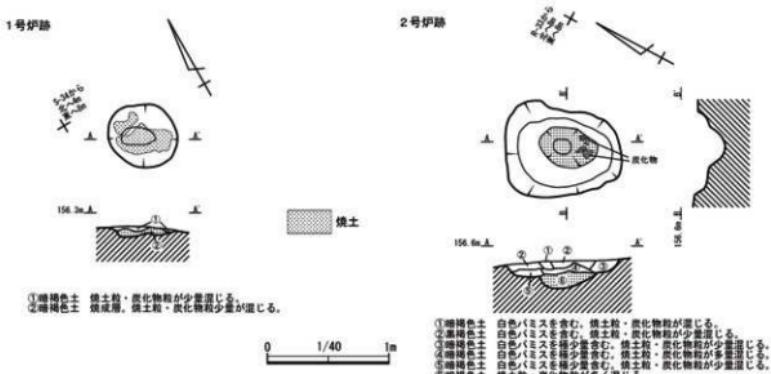


第44図 縄文時代土坑(5)





第46図 縄文時代土坑出土遺物



第47図 縄文時代炉跡

と考えられる。18号土坑は1区A P35・36グリッドに位置する。平面形は仄な長方形を呈する。覆土1層にはカワゴ平パミスが含まれる暗褐色土であるため、所属時期は縄文時代後期か。19号土坑は2区A H31グリッドに位置する。西側に3号土坑が位置する。栗色～富士黒土層上面にて確認された。上端の平面形は隅丸方形、底面は長方形を呈する。上端での計測値は $1.98\text{m} \times 1.55\text{m}$ で、深さは $2.21\text{m}$ を測る。栗色～富士黒土層上面にて確認され、覆土1層にはカワゴ平パミス・仙石スコリアが散見された。また覆土1層には遺物が多く含まれている。流れ込みの遺物と判断されている。100～104は19号土坑から出土した遺物である。100～103は縄文土器である。100は横位に山形押型文が施されている。102は口縁部のみの破片資料である。内外面共に口唇部直下に横位の山形押型文が施されている。外面は縦位の山形押型文も施されている。101は底部のみの破片資料である。尖底で縦位に山形押型文が施されている。103は押型文土器並行期の所産か。口縁部のみの破片資料で、内外面口唇部直下に横位の4本の沈線、また外面には横位の沈線より垂下する4本の沈線が見られる。この沈線を詳細に観察すると、施文具の傷に由来する凹凸が間隔をおいて見られた。この点から当該沈線は山形文が退化した押型文と考えられる。酷似する資料(217)が遺構外からも出土している。104は磨敲石である。平面形は棒状で、上端及び下端

に敲打痕が観察される。また側面と裏面に磨面も認められる。20・21号土坑は4区S34グリッドに位置している。栗色土層上面にて確認された。2基の土坑が重複したもので、図でも理解できるように21号土坑が先行して設けられ、その埋没後に20号土坑が掘削されたものと考えられる。20号土坑の平面形は長楕円形で、長径2.00m、短径1.01m、深さは1.62mを測る。22号土坑は3区A B23グリッドに位置している。上端の平面形は長楕円形、底面は長方形を呈している。長径2.08m、短径1.19m、深さ1.48mを測る。

### （3）炉跡(第47図)

富沢内野山I西遺跡にて確認された縄文時代の炉跡は2基を数える。1号炉跡は4区S34グリッドに位置する。栗色土層上面にて確認されている。平面は円形を呈し、長径0.58m、短径0.50mを測る。掘り込みは浅く、8cmを測る。遺構のほぼ中央部に焼土が認められる。2号炉跡は4区R33グリッドに位置する。栗色土層上面にて確認されている。平面は歪な楕円形を呈し、長径0.93m、短径0.79mを測る。ほぼ中央部に焼土が多く認められる。出土した炭化物2点につき放射性炭素年代測定を行った結果、 $4,390 \pm 20$ yrBP、 $4,340 \pm 20$ yrBPという結果が得られた。詳細は附編を参照されたい。

第16表 縄文時代遺構計測表

報告書遺構名	調査遺構名	グリッド	層位	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	土器	石器	礫	炭化物	計	備考
1号集石	SY01	AP-36	FB	1.70	1.03	-	2	1	65		68	
2号集石	SY02	AQ-37	ZN	0.30	0.24	-			8		8	
3号集石	SY04	AP-37	ZN	0.30	0.23	-			8		8	
4号集石	SY05	AI-31	ZN	1.26	0.87	-	3	4	33		40	
5号集石	SY06	AJ-30	ZN	1.85	0.93	-	4	10	91	1	106	
6号集石	SY03	AP-36	ZN	3.91	1.69	-	70		37		107	
1号土坑	SF22	AP-37	YLL	0.51	0.50	0.36						
2号土坑	SF10	AP-36	ZN	0.95	0.79	0.25	1	2	1	1	5	
3号土坑	SF24	AH-31	FB	0.87	0.63	0.31			6		6	
4号土坑	SF20	AP-35	YLU	1.65	1.41	1.21			2		2	
5号土坑	SF04	AQ-37	ZN	1.53	0.97	0.29						
6号土坑	SF19	AP-36	YLU	1.08	0.51	0.53						
7号土坑	SF23	AI-31	FB	1.65	0.92	0.38	4	5	6		15	
8号土坑	SF30	R-34	YLU	1.65	0.59	0.82						
9号土坑	SF02	AP-37	ZN	2.01	0.73	0.82			1		1	
10号土坑	SF16	AP-36	ZN	2.65	1.02	0.45			1		1	
11号土坑	SF03	AQ-36	ZN	2.34	1.09	0.83			2		2	
12号土坑	SF05	AG-36	ZN	1.84	0.87	1.17			2		2	
13号土坑	SF27	S-33	KU	2.48	1.35	1.62						
14号土坑	SF01	AP-37	YLL	1.60	1.05	0.33						
15号土坑	SF06	AP-36	ZN	1.86	1.31	1.62			2		2	
16号土坑	SF09	AQ-38	YLM	-	0.90	1.30						
17号土坑	SF08	AQ-37	AN	-	1.70	2.62	1				1	
18号土坑	SF18	AP-35	ZN	1.72	0.73	1.88	1				1	
19号土坑	SF14	AH-31	FB	1.98	1.55	2.21	12	6	9		27	
20号土坑	SF28	S-34	KU	2.00	1.01	1.62	1				1	
21号土坑	SF29	S-34	KU	-	-	1.26						
22号土坑	SF32	AB-23	FB	2.08	1.19	1.48	1	2			3	
1号伊跡	FP01	S-34	KU	0.58	0.50	0.08						
2号炉跡	FP02	R-33	KU	0.93	0.79	0.23				2	2	

第17表 縄文時代遺構内出土石器計測表

遺構名	採団番号	図版番号	遺物番号	グリッド	器種	石材	推定产地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
4号集石	81	25	9751	AI-31	磨石	輝石安山岩	(7.8)	7.2	6.6	496.9	
5号集石	84	25	10548	AJ-30	磨石	玄武岩		9.9	7.5	3.8	421.2
19号土坑	104	25	4287	AH-31	磨歯石	輝石安山岩		13.4	6.5	4.8	593.7

第18表 繩文時代遺構内出土土器観察表

遺構名	博団 番号	写真 番号	分類 群	色調(Hue)	文様調整等	繩 組	胎土	
1号集石	79	24	II	I	10YR5/3	横位の絡条体圧痕文。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
1号集石	80	24	II	3	7.STR6/4	無	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片	
5号集石	82	24	I		5TR6/6	縫隙貼り付け。剥落。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、白色岩片
5号集石	83	24	IV	2	7.STR5/4	異方向の山形文。	有	白色粒子多、黒色粒子多
6号集石	85	24	II	1	7.SYR4/2	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片
6号集石	86	24	II	1	10YR5/3	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片
6号集石	87	24	II	1	10YR4/2	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片
6号集石	88	24	II	1	7.SYR5/4	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、白色岩片
6号集石	89	24	II	1	7.YR5/3	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、白色岩片
6号集石	90	24	II	1	10YR5/3	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母
6号集石	91	24	II	1	10YR5/3	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、岩片
6号集石	92	24	II	1	10YR5/3	異方向の絡条体圧痕文。内面にナデ。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、岩片
6号集石	93		II	1	10YR5/3	底部。絡条体圧痕文。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、白色岩片
6号集石	94	24	II	2	7.STR6/6	繩文。	無	白色粒子、黒色粒子、白色岩片
6号集石	95		II	4	7.SYR4/3	底部。底に繩条体圧痕。	無	白色粒子、黑色粒子、白色岩片
6号集石	96	24	VII	3	7.SYR4/1	波状口縁。口唇部に剥落。工具による横位の連続削痕。内面に横位の擦痕。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
6号集石	97	23	II	2	5TR6/6	口唇部と口縁部貼付近に押圧文。横位の繩文。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
6号集石	98	23	II	2	7.SYR5/4	口唇部と口縁部貼付近に押圧文。横位の繩文、穿孔。	有	白色粒子、黒色粒子、雲母、白色岩片
7号土坑	99	25	IX	4	7.SYR4/6	紡糸工具による波線。内外面にナデ。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
19号土坑	100	25	IV	2	5YR4/4	横位の山形文。	有	白色粒子多、黒色粒子、白色岩片
19号土坑	101	25	IV	2	10YR4/1	尖底。横位の山形文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、雲母、輝石、白色岩片
19号土坑	102	25	IV	2	7.SYR5/4	口唇部に山形文。縫隙・横位帯状の山形文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石
19号土坑	103	25	IV	5	SYR6/4	外側に異方向帯状の波線。内面に横位の擦痕。	有	白色粒子、石英、輝石

### 3 遺構外出土遺物

当該遺跡から出土した縩文時代のものと考えられる土器は2,900点を数え、石器は3,576点を数える。この点数は現地での取り上げた遺物の点数であり、特に土器については長泉事務所における接合作業を経た結果、点数は著しく変化している。土器・石器の実測図の他に、出土分布図を掲載した。なお1区北半端部より北側で出土した中期代の土器は、次章の富沢内野山III北遺跡で触れる。また縩文時代草創期のものと考えられる尖頭器298~319は、図版を区別した。

#### (1) 土器

##### 第I群：草創期前半(第48~54図 第19表 写真図版26)

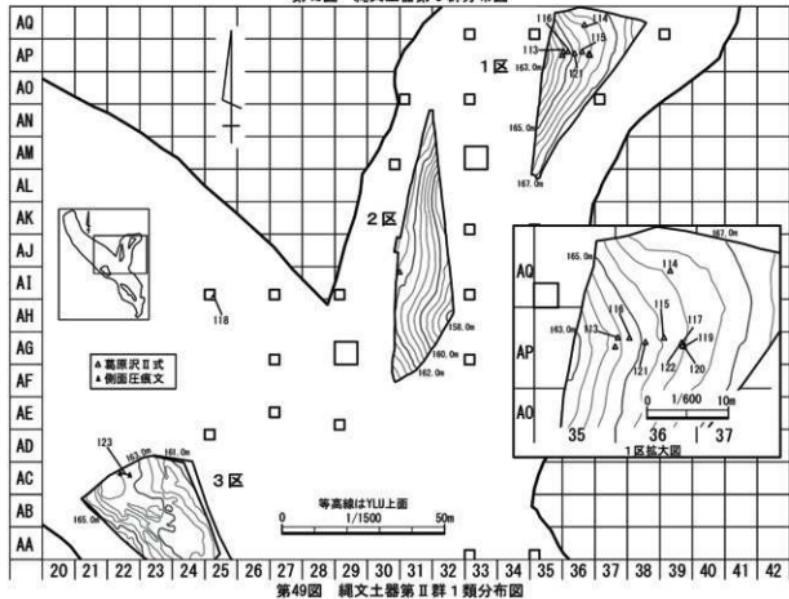
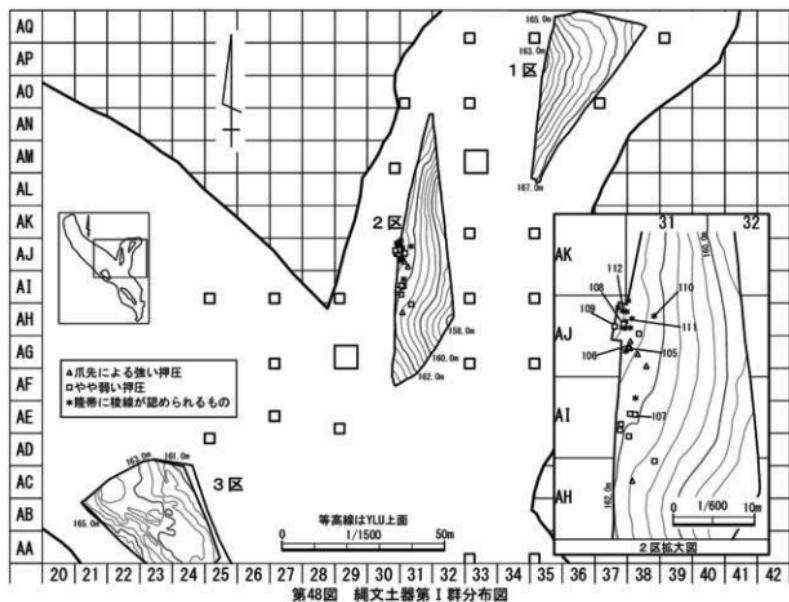
縩文時代草創期前半の隆帶文土器を第I群とした。105~112は第I群に分類した縩文土器である。器面には隆帶が貼り付けられ、施文具により刻目等が施されたもので、2区A J31グリッド付近に集中する。105・106は横位に1条の隆帶が貼り付けられている。これらは隆帶に爪によると思しき刻目が施されている。また他の土器と比較して比重が軽い印象を受ける。胎土も淡い紫色を帯びる。105・106よりもやや弱い力で刻目を施したものと考えられるのが107~109である。107は口縁部のみの破片資料で口唇部直下に隆帶が1条貼り付けられている。直線的に立ち上げられ、口唇部は丸く仕上げられている。やや薄手な感がある。108は2条の隆帶が貼り付けられている。109は隆帶の下位に別の隆帶が剥脱した痕跡がある。隆帶に稜線が認められるのが110~112である。先端の鋭い施文具により切り込むように刻目が施されている。110は口縁部のみの破片資料で、隆帶は口唇部直下に斜位に貼り付けられている。111は斜位の隆帶が剥脱した痕跡がある。なお107・108に付着していた炭化物を放射性炭素年代測定したところ、 $12,230 \pm 40$ yrBP、 $12,350 \pm 40$ yrBPという結果が得られた。詳細は附編を参照されたい。

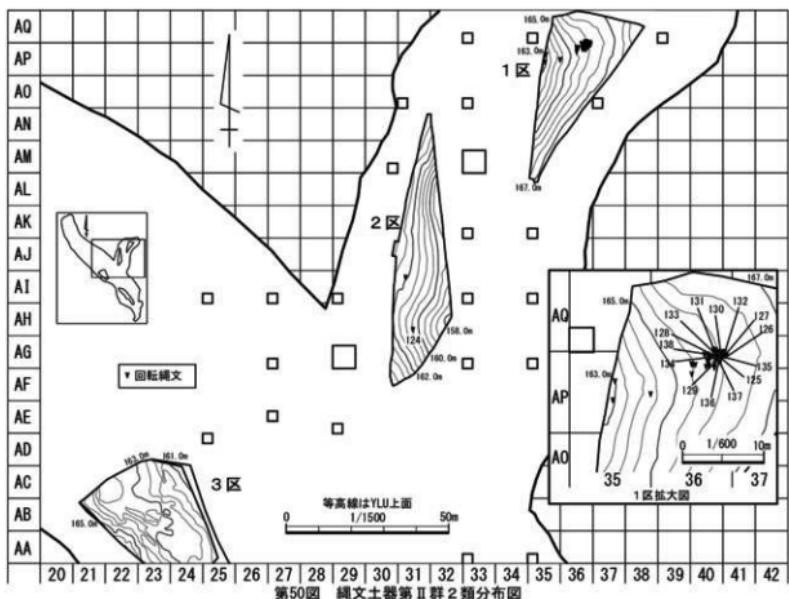
##### 第II群：草創期後半(第49~58図 第19表 写真図版26~28)

縩文時代草創期後半の土器を中心に第II群とした。この第II群は1~5類に分類が可能である。

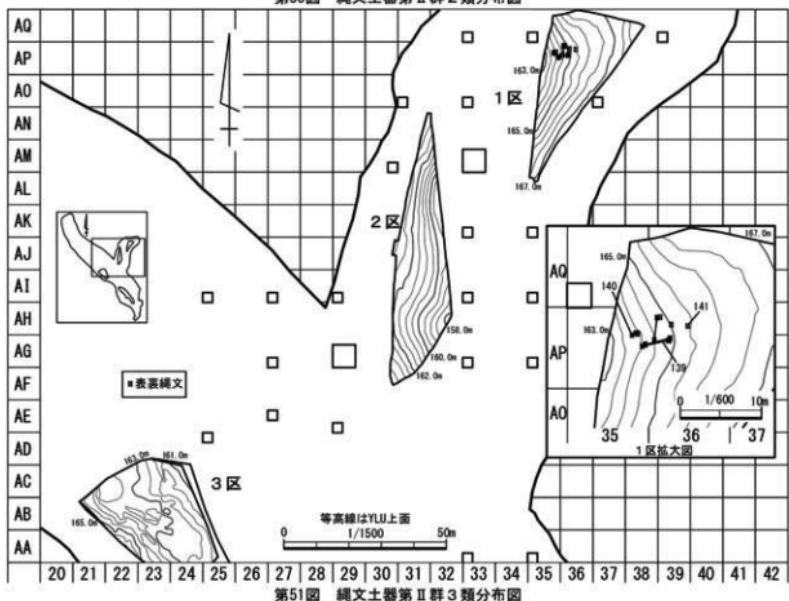
#### 1類(押圧縩文土器)

113~123を1類とした。そのうち側面圧痕文と思しき123以外は、絡条体圧痕文が施されているものと

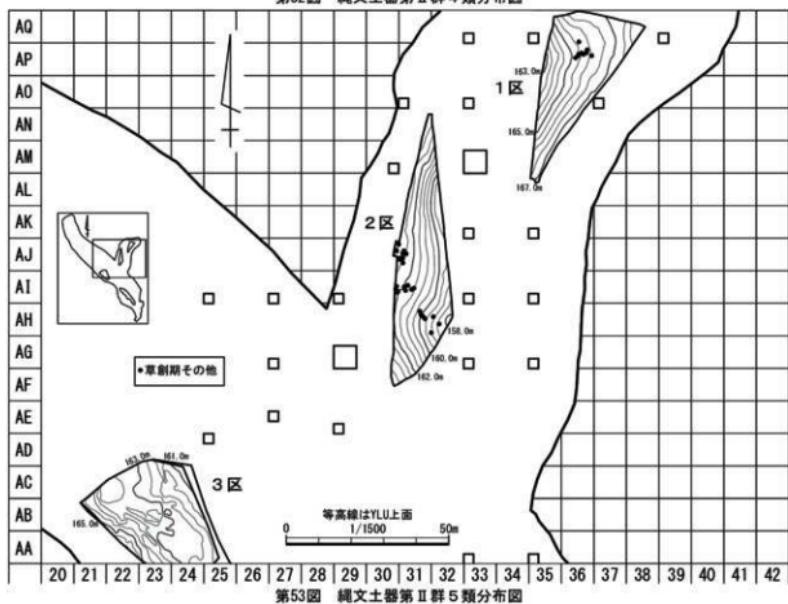
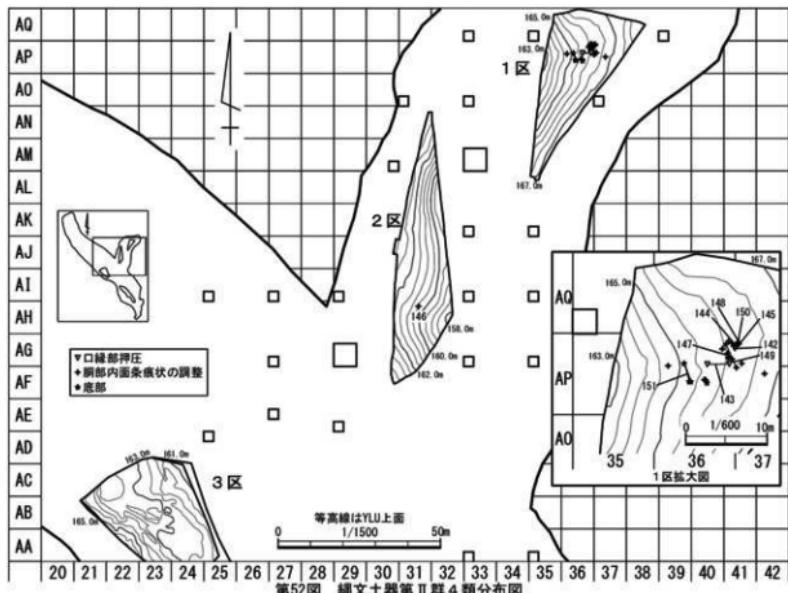


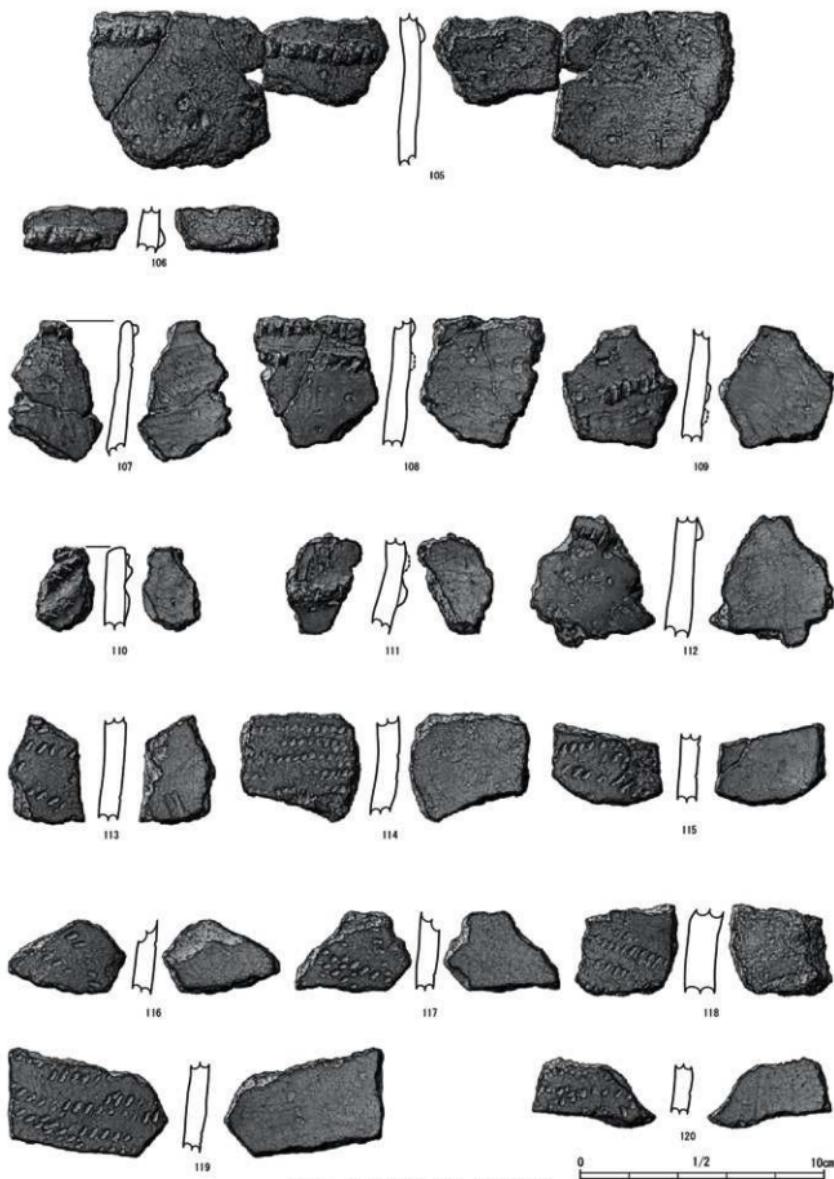


第50図 縄文土器第II群2類分布図

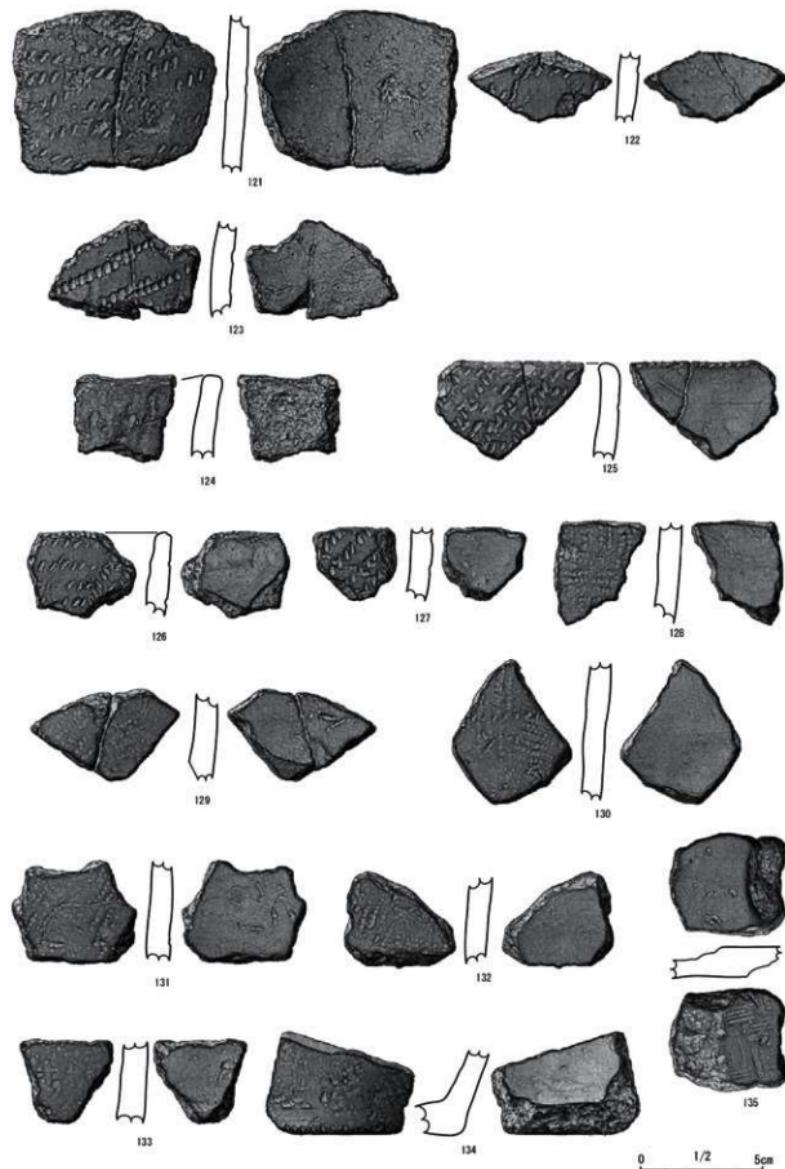


第51図 縄文土器第II群3類分布図

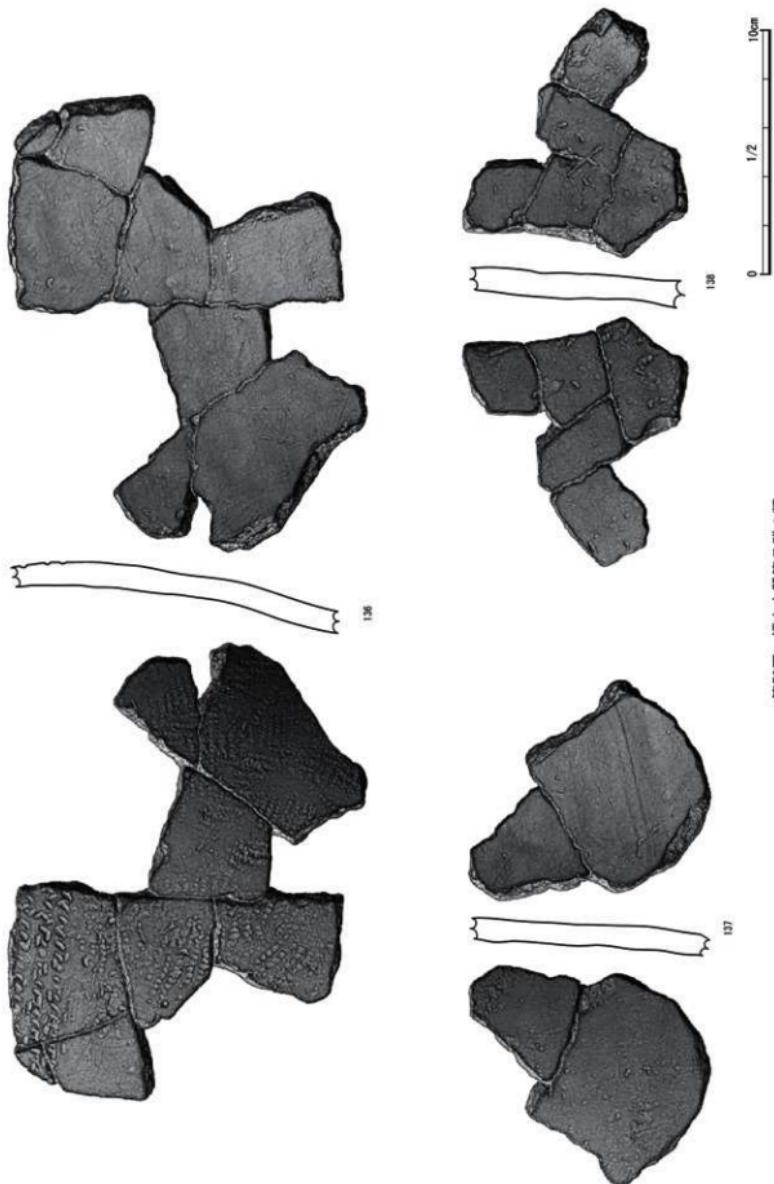




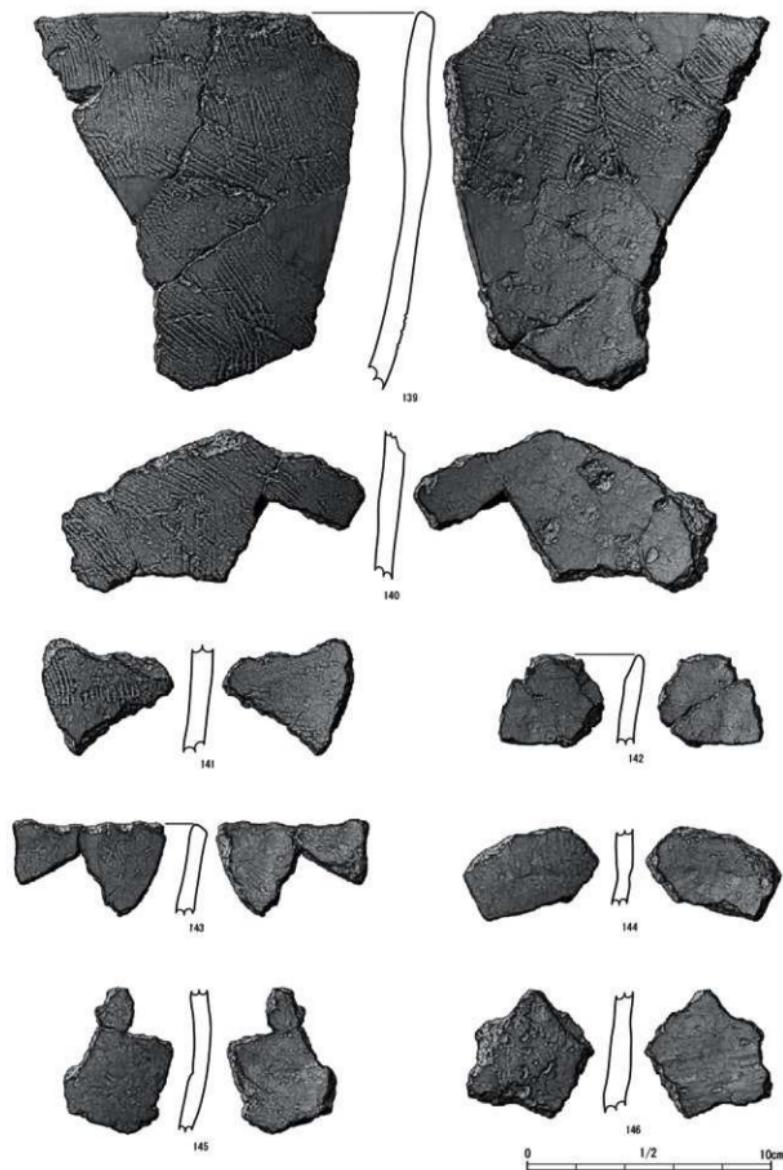
第54図 縄文土器第I群～第II群1類



第55図 繩文土器第II群1・2類



第56図 細土器第II群2類



第57図 繩文土器第II群3・4類

考えられる。出土位置は123のみ3区での出土で、その他の資料は2区A P35~37グリッドにかけて集中する。絡条体圧痕文の方向は横位を基調とし、117・118のように斜位に施されたものもある。絡条体圧痕文には軸の痕跡は判然としない。これらの胎土中には纖維はあまり含まれていない。葛原沢II式の古い段階は密に施文されているが、当該資料は間隔が空いている。123は他の資料の胎土と比較して、纖維が多く混ざる。斜位に側面圧痕文が施されている。

## 2類(回転縄文土器)

124~138を2類とした。資料数として2個体程度か。掲載可能なものは絡条体圧痕文及び縄文が施されたものと考えられるが、1点のみ押圧縄文及び縄文が施された土器が2区で出土している。当該2類土器は1区A P36グリッド北東隅付近に集中する。124は口縁部のみの破片資料である。波状口縁か。口唇部は平坦に仕上げられている。表面に施文が認められるが、側面圧痕か。125~138は色調や胎土に纖維が僅かに含まれる点等から同一個体の可能性が想起される。125・126は口縁部のみの破片資料である。異方向の絡条体圧痕文が施される。口唇部を丸く仕上げ、圧痕文が施されている。128~133は胴部資料で、縄文が施されている。136は胴下半部までの接合資料である。上位には絡条体圧痕が格子状に施されているが、下半部の施文は縄文である。底部資料が134・135である。平底で134の底面周縁に縄目が見られるが、絡条体によるものか。135には縦物の圧痕が僅かに観察される。

## 3類(表裏縄文土器)

139~141を3類とした。3点とも同一個体か。胴部はやや直線的に立ち上がり、口縁部付近で軽く外反する。胎土中に纖維を含む。外面にはほぼ撚糸文が施されている。口唇部にも施文したためか、平坦な仕上がりである。内面にも撚糸文が施されている。施文部位は口唇部直下より胴部上位に限られる。

## 4類(無文土器)

142~151を4類とした。口縁部資料の142・143は口唇部に絡条体の押圧か。146は内面に条痕が施される。147に付着した炭化物は、放射性炭素年代測定の結果、 $11,290 \pm 30$ yrBPという結果が得られた。

## 5類(無文土器)

今回の報告では掲載できなかったが、胎土の特徴及び分布域から草創期のものと推定された無文土器の細片を集成した。分布域は2区に集中しており、本来は第I群として考えた方が良いかもしれない。

### 第III群：早期前半(第59・67図 第19表 写真図版29)

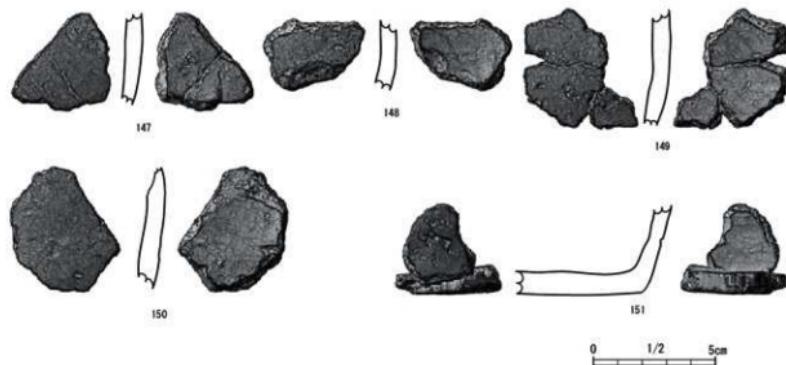
縄文時代早期前半に比定され、かつ静岡県東部地域に特徴的な軽い胎土を有する土器を中心に第III群とした。152は縄文が施されたものか判然としない。153は押型文土器である。縦位に山形文が施されている。色調は淡い紫色を帯び、器面は独特的の感触がある。第IV群1類154・155より後出か。

### 第IV群：早期前半(第60~70図 第19表 写真図版29~32)

縄文時代早期前半代の押型文土器と時期的に並行するものと考えられた土器を集成した。押型文及び撚糸文等の特徴により1~5類に分類される。

#### 1類(撚糸文土器他)

154~169を1類とした。施文は撚糸文を主体とし、押圧縄文とも考えられる資料も同類に含めている。



第58図 縄文土器第II群4類



第59図 縄文土器第III群分布図

出土位置は2区を中心に出土するが、1・3・4区にも少量の散布が認められる。

154は口縁部のみの破片資料である。軽く外反させて、口唇部にも施文している。押圧縄文を施した後に、ナデが施されたものか。155は脣部下半分の資料である。154と同一個体か。156～163は口縁部のみの破片資料で、154・155と比較して条が細かい資料である。156は直線的に立ち上げた口縁部である。口唇部を平坦に仕上げ、棒状工具により斜めに押圧、刻目をなす。富士宮市黒田向林遺跡に類例がある。157～160は表裏面に燃糸文が施されている。縦位の燃糸文が施された157は外反し、口唇部の燃糸文は施文後にナデられている。縦位の燃糸文を施した158・160は共に直線的に立ち上げ、最終整形時に指で強めに摘まみナデ上げたため、口唇部から約2cm付近から器高が次第に薄くなっている。なお160に炭化物が付着していたため、放射性炭素年代測定を行い、 $9,590 \pm 30$ yrBPという測定結果が得られた。159は口唇部が平坦に仕上げられている。表面は燃糸文を施した後にナデが施されたためか、燃糸の節がやや丸みを帯びている。161～163は表面のみに燃糸文が施された口縁部の破片資料である。161・162は僅かに外反するのに対し、163は直線的に立ち上げている。いずれも口唇部は平坦に仕上げているが、

163は指頭で摘まむことにより、口唇部の整形を行ったため、外面口唇部直下に指頭痕が残る。また乱雑な撲糸文が施されている。164～169は胴部のみの破片資料である。165・166は細かい撲糸文を交差させ、前者は内面にも施する。167は撲糸文を強く太く施し、その後にはナデを施す。

## 2類(押型文土器)

170～194を2類とした。伊豆の国市(旧大仁町)大平A遺跡の押型文土器群と同時期と考えられた資料である。出土位置はほぼ2区に限定され、AH・A I 31・32グリッドにかけての埋没谷地形内に密集する。この2類は押型文の施文の特徴により細分が可能で、雲母・器厚の厚薄で分類が可能である。

山形文を縦位に密接して施文されたのが170～173である。170・171は172・173と比較して器厚が薄く仕上げられている。4点とも胎土中に纖維は含まれず、雲母は含まれる。特に170・173には粒子が大きい金雲母が特徴である。172は附録にて小林氏と坂本氏により $8,420 \pm 40^{14}$ CBPと測定されている。

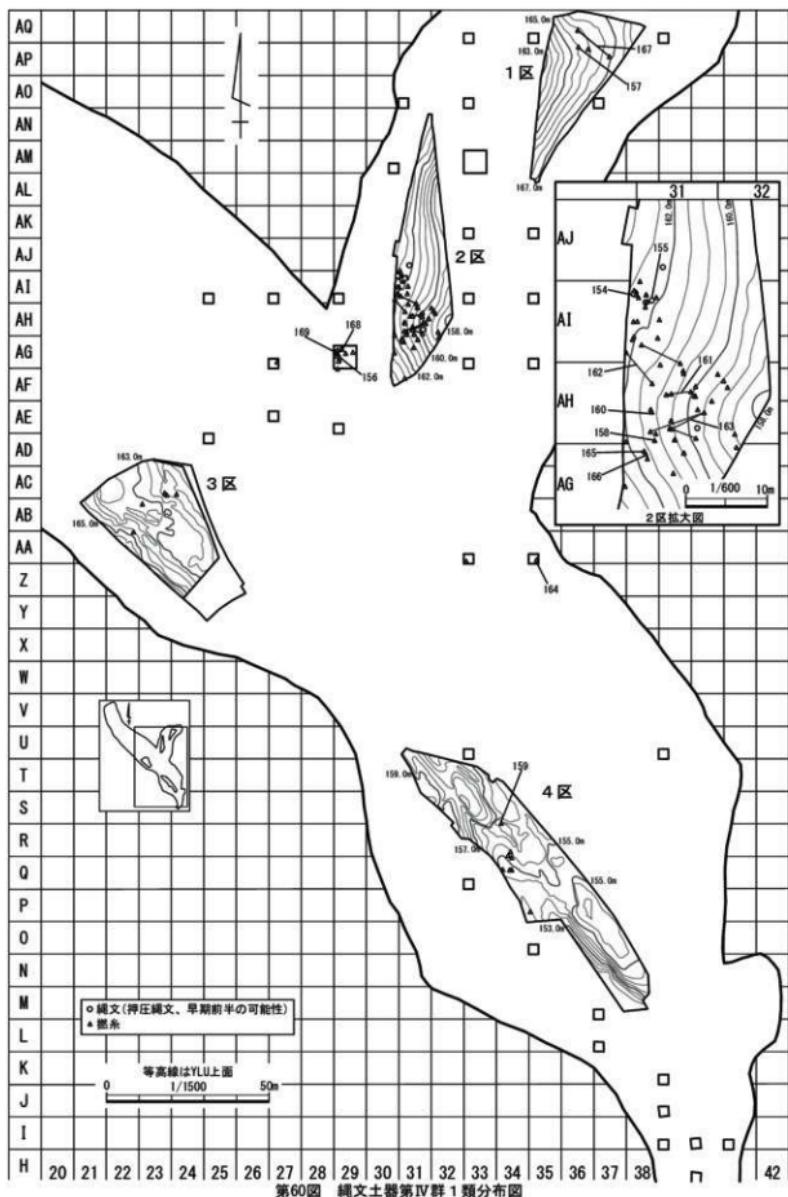
山形文が横位及び縦位、異方向に密接施文されたのが174である。胴部中位からやや直線的に立ち上がり、口縁部は軽く外反させている。口縁部の残存状況から波状口縁であったものと推定される。外面は口唇部直下より横位の山形文、口唇部より約2cm下位から縦位の山形文が密接して施されているが、表面の観察から施文の順序は縦位に施した後に、横位に施したものと推定される。口唇部にも施文する。内面は口縁部付近のみ横位に山形文を施している。胎土中には金雲母が含まれ、纖維は見られない。

山形文が横位、縦位に密接せず、帶状に施文されたのが175～192である。このうち175～181は口縁部資料で、外面及び内面口唇部直下に施文が認められる。175は胴部中位から直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外反させている。外面は口唇部直下より重複した横位の山形文、そして約2cm程度の間隔を置き、横位の山形文を施している。この2段目の横位山形文より2～3cm程度の間隔で、縦位に山形文を帶状施文している。内面は口唇部直下に横位の山形文が施されている。口唇部は施文のため平坦である。外面の山形文の間隙や内面下半部には擦痕に近いナデの痕跡が見られる。176～178は外面口唇部直下に施された横位の山形文から、縦位の山形文が帶状施文される。一方、179・180は2段の横位の山形文が施された口縁部である。以上の口縁部資料175～181のうち、残存状況から波状口縁と推定されたのは177のみである。182～192は胴部のみの破片資料である。これらのうち191は胴部下端付近、底部に近い資料と考えられる。器厚は比較的薄く、この資料のみ金雲母が胎土中に少量見られる。縦位の山形文が施されているが施文が浅く、かつ施文後のナデにより判然としない。なお180には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を行った結果、 $9,020 \pm 30$ yrBPという数値が出されている。

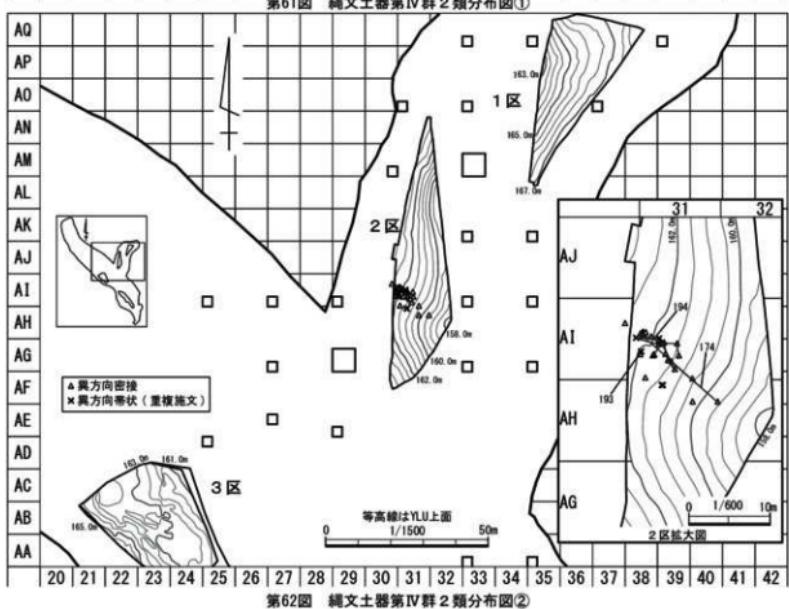
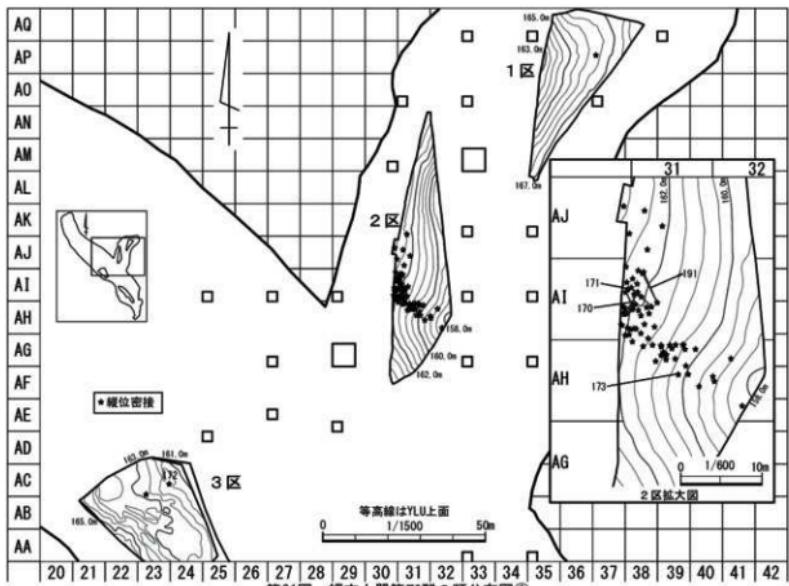
193・194は口縁部のみの破片資料で、2点とも胎土中に金雲母が多く含まれ、器厚も薄い。軽く外反する口縁部に仕上げている。外面は口唇部直下から縦位に密接して山形文を施した後に、重複するように横位にも施す。口唇部及び内面口唇部直下には横位の山形文が施されている。193・194は同一個体か。

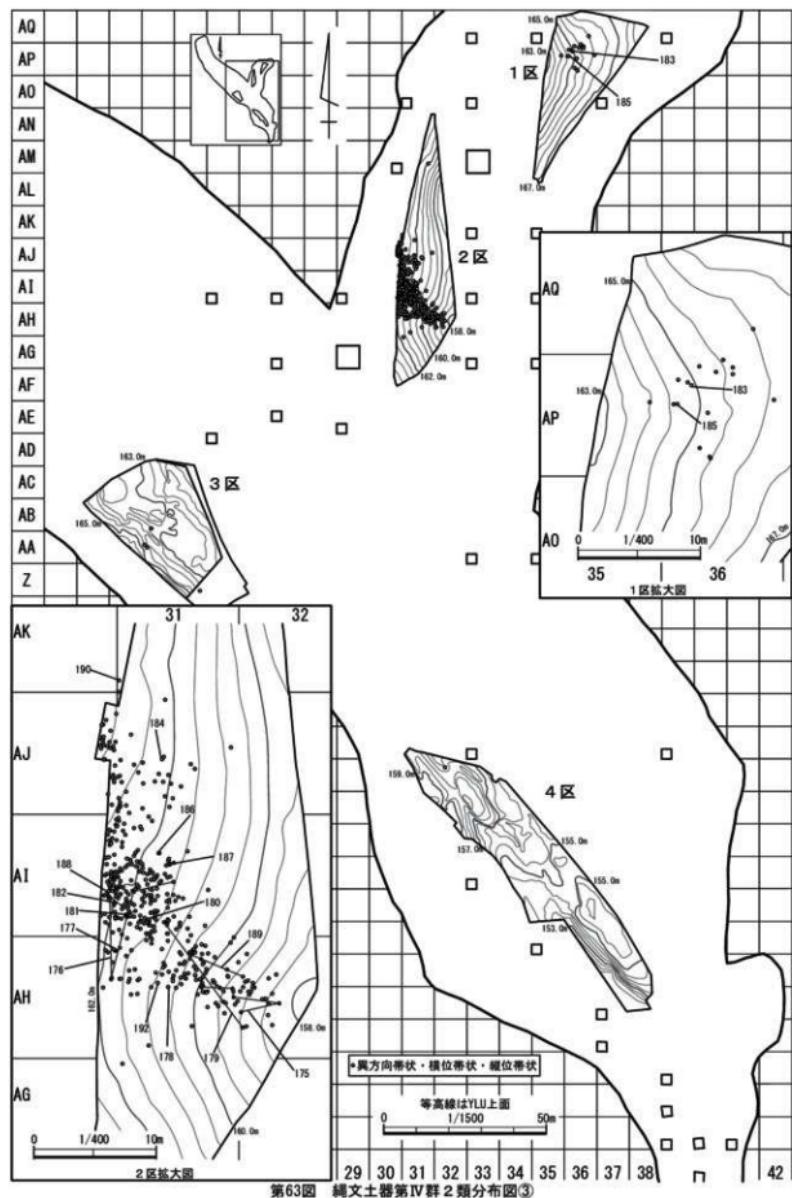
## 3類(無文土器)

195～200を3類とした。伊豆の国市(旧大仁町)大平A遺跡では押型文土器群と共に平板式土器に類似した無文土器群が認められる。当該3類土器もそのタイプに該当しようか。出土位置は2類と同様、ほぼ2区に限定され、AH・A I 31・32グリッドにかけての埋没谷地形内に密集する。195～200は全て口縁部のみの破片資料である。195・196は修復のためか、穿孔がなされている。199は微妙に外反させているが、殆どの資料が直線的に立ち上げている。口唇部は最終的に丸く仕上げているが、指頭でやや強めの力で摘まむようにナデしているため、口唇部及び内外面口唇部直下に横位のナデ痕が認められる。また多くの資料の外面には横位の擦痕が多く見られ、不明瞭でもあるがケズリ調整によるものかもしれない。199はこの擦痕が不明瞭な資料で、整形時の指頭痕が見られる。195～197は胎土に長石がやや多く

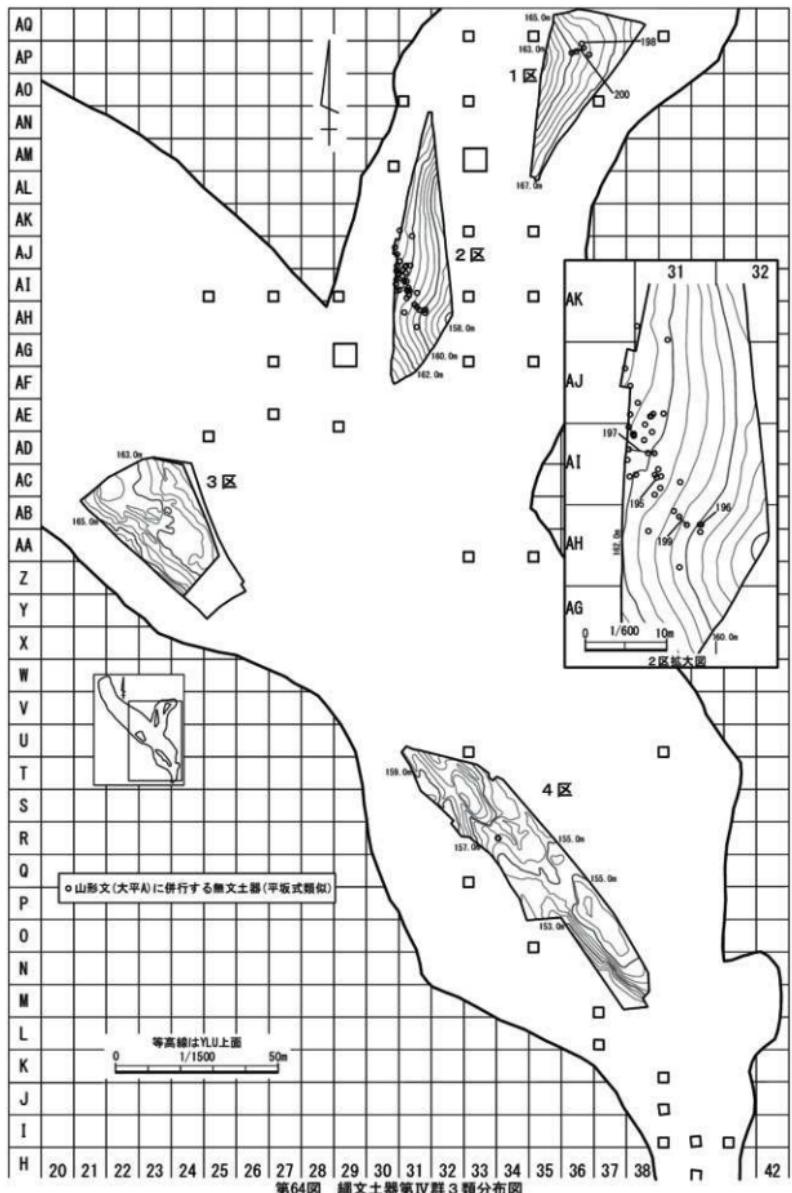


第60図 縄文土器第IV群1類分布図

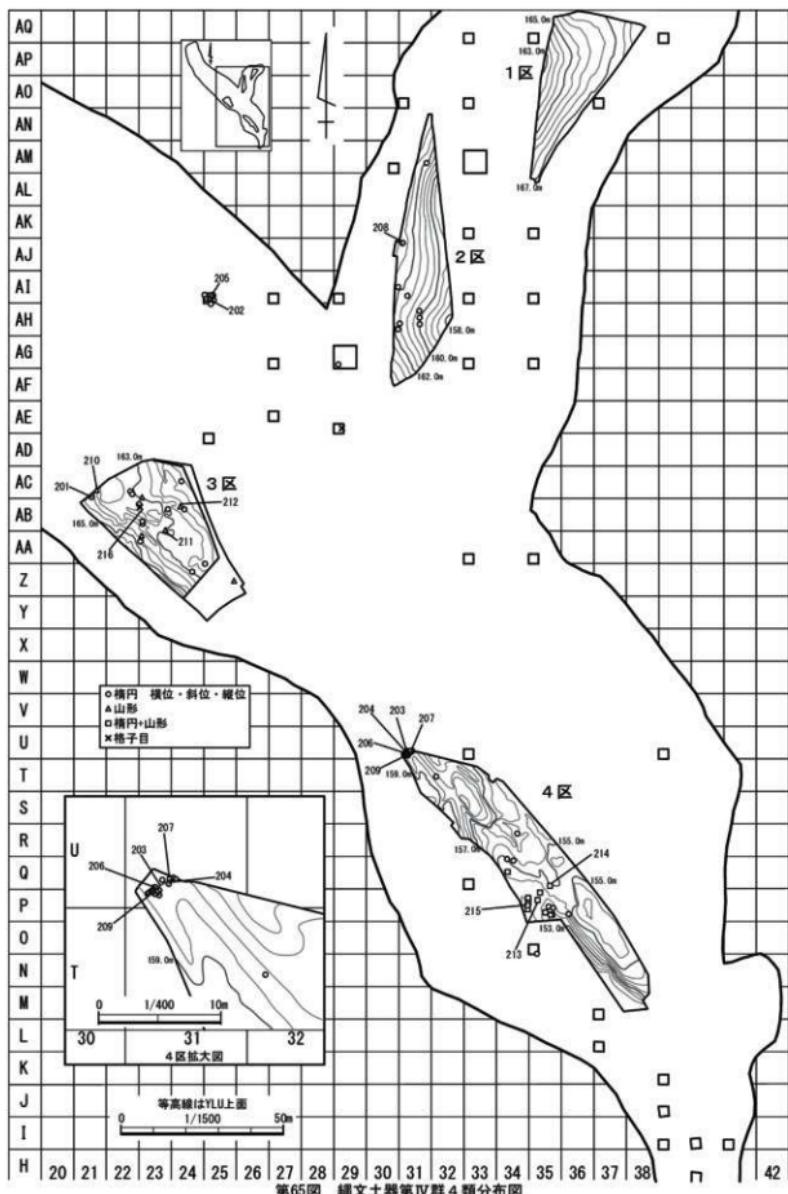


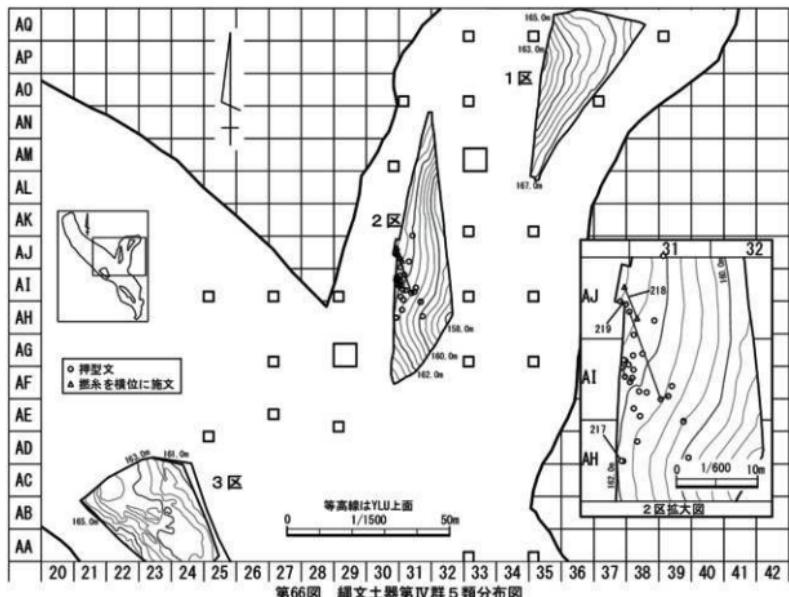


第63図 繩文土器第IV群2類分布図③



第64図 縄文土器第IV群3類分布図





第66図 繩文土器第IV群5類分布図

見られる。また3類の胎土は2類の器厚が厚い175・176・178等にやや似る。

#### 4類(押型文土器)

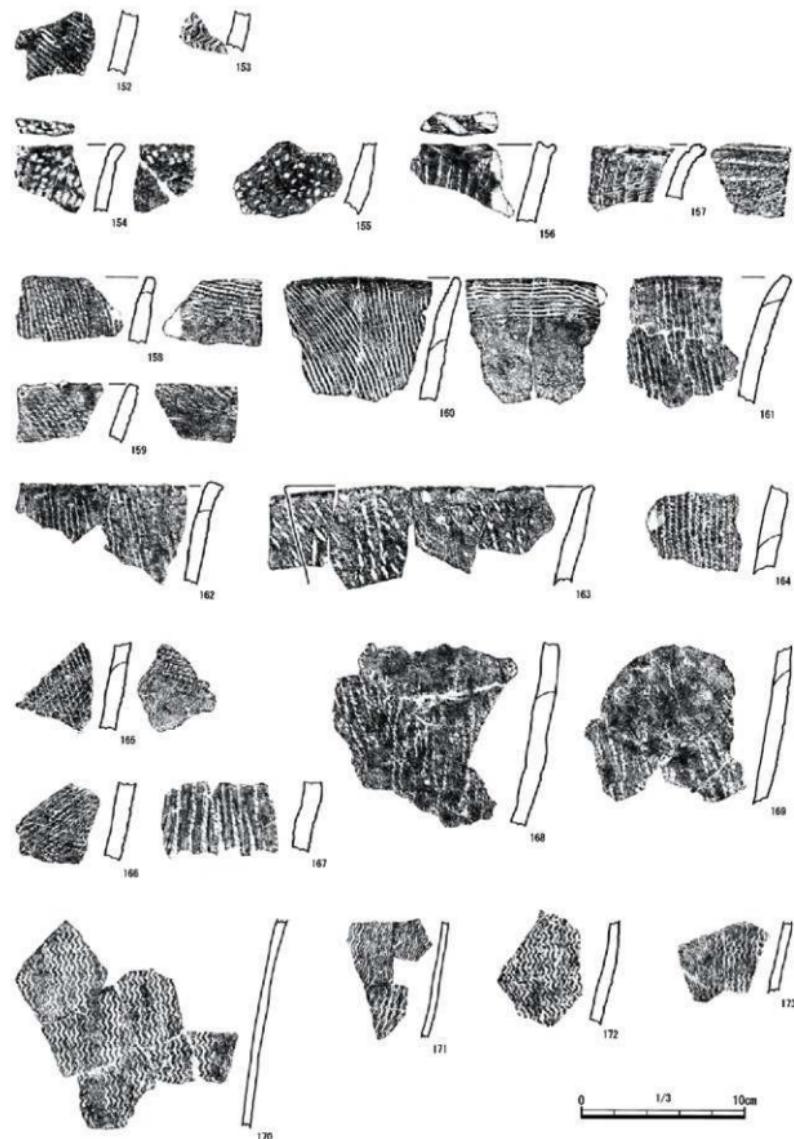
201~216を4類とした。細久保式土器と思しき土器群を集成した。出土位置は2・3類と異なり、3・4区に多く散見され、1区では認められない。この3類は押型文の特徴により細分が可能である。

楕円文が施されているのが201~209である。そのうち202~205は口縁部のみ、もしくは口縁部を有する資料である。いずれも直線的に立ち上がるか、微かに外反気味に立ち上げている。口唇部は205以外については平坦に仕上げており、施文は認められない。口唇部及び内面口縁部付近は丁寧なナデもしくはミガキにより仕上げられている。202・203・205は楕円文が横位に密接して施されている。204は口唇部直下に縦位と横位の楕円文、その下位で横位に施され、一部、指でナデ消しされている。なお201は疑似口縁である。粘土紐の接合部で破損したため、下段の粘土紐上部が整形当時の姿で露わとなっている。この201の楕円文は202~205と比較して小型である。206~209は胴部の破片資料である。209は胴部下半部にあたる。

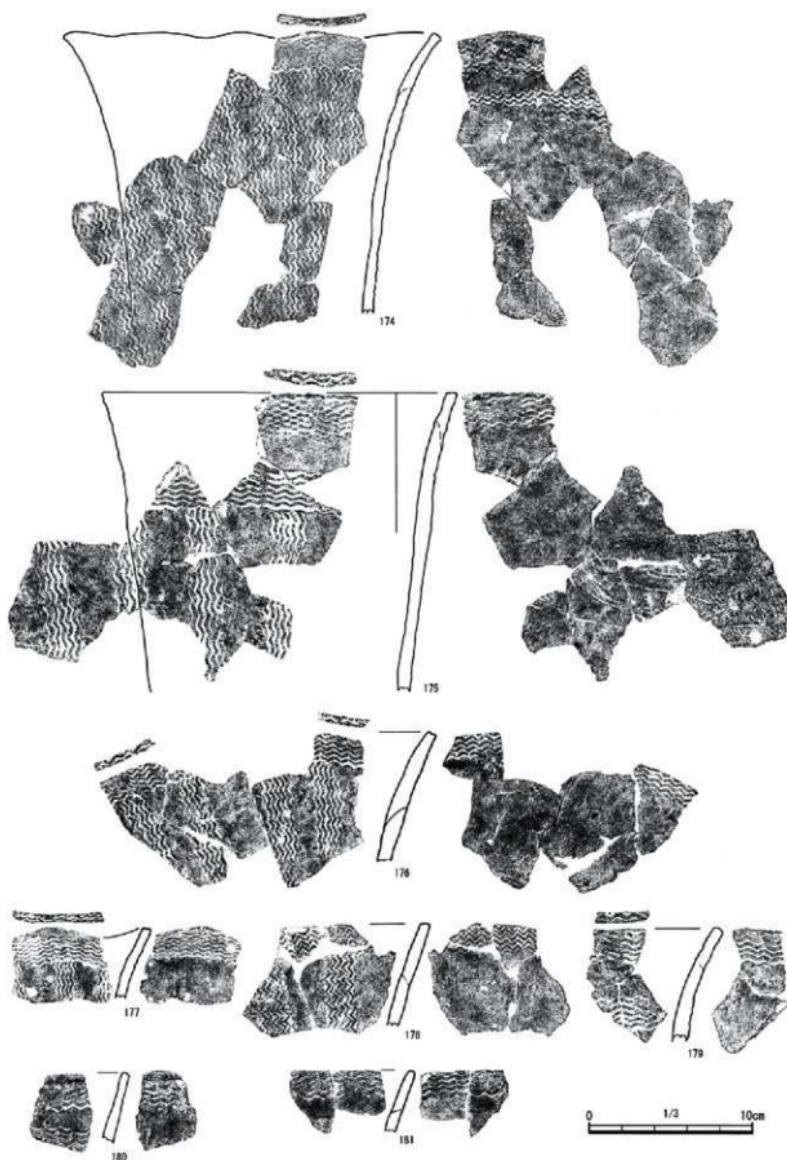
山形文が施されているのが、210~212である。いずれも胴部のみの破片資料で横位に密接して山形文が施され、胎土に金雲母が見られる。

楕円文と山形文が施されているのが、213~215である。213は口縁部のみの破片資料である。丸く仕上げられた口唇部直下に楕円文を、約0.5cmの間隔をあけて山形文を施している。胎土に少量の纖維を含む。214は山形文の下位に楕円文が密接して施されている。215は山形文、楕円文、山形文と間隔を設けて横位に施されている。

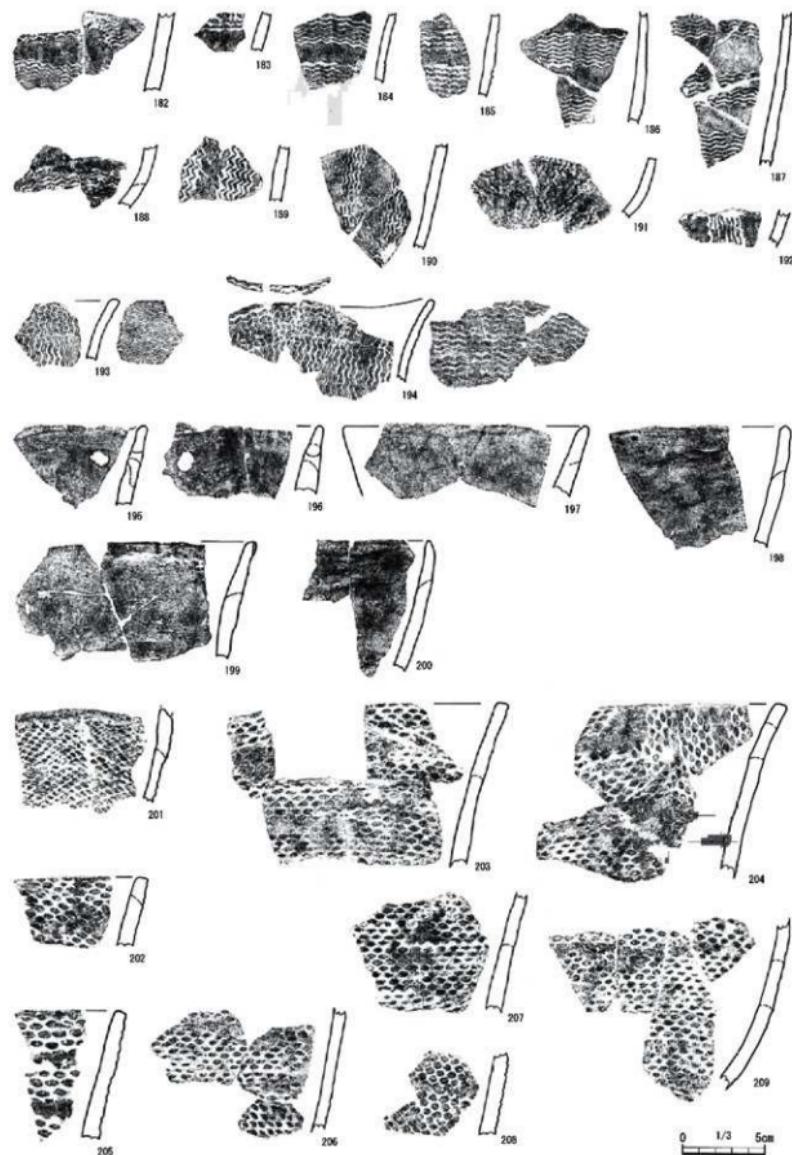
細かい格子目の押型文が施されているのが216で、内面は擦痕か。



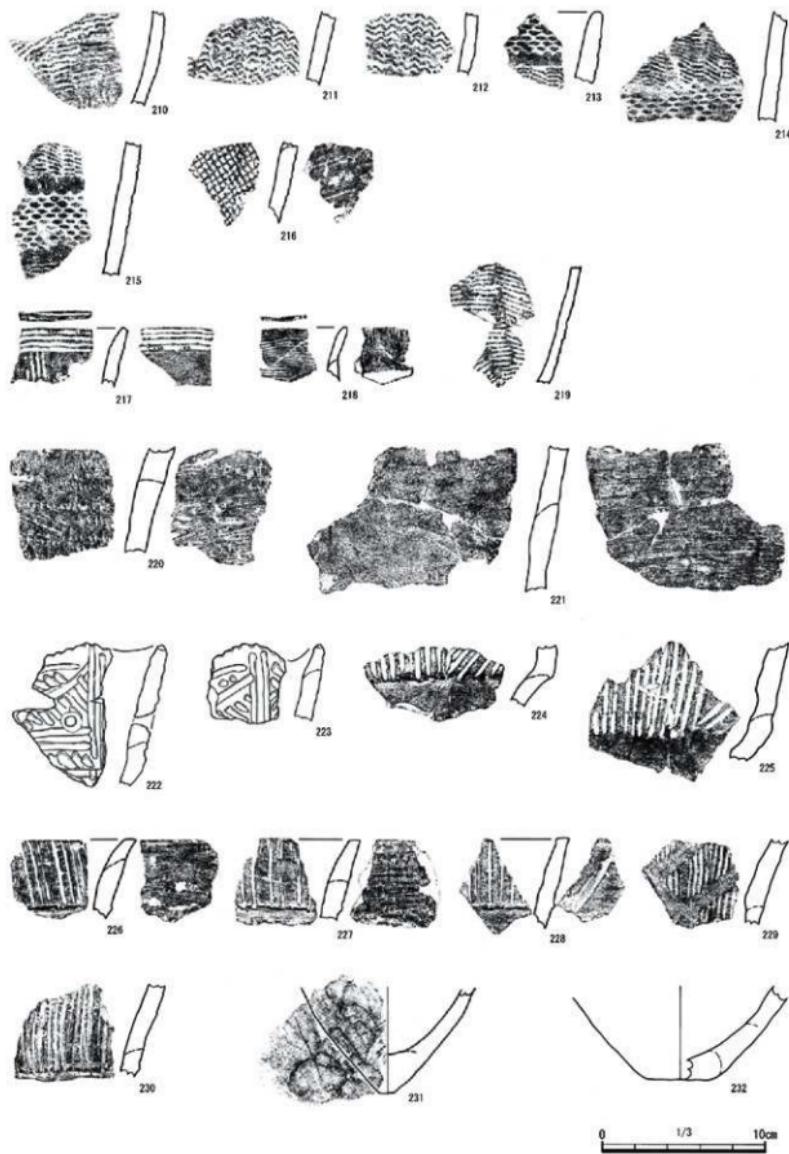
第67図 繩文土器第III群～第IV群 2類



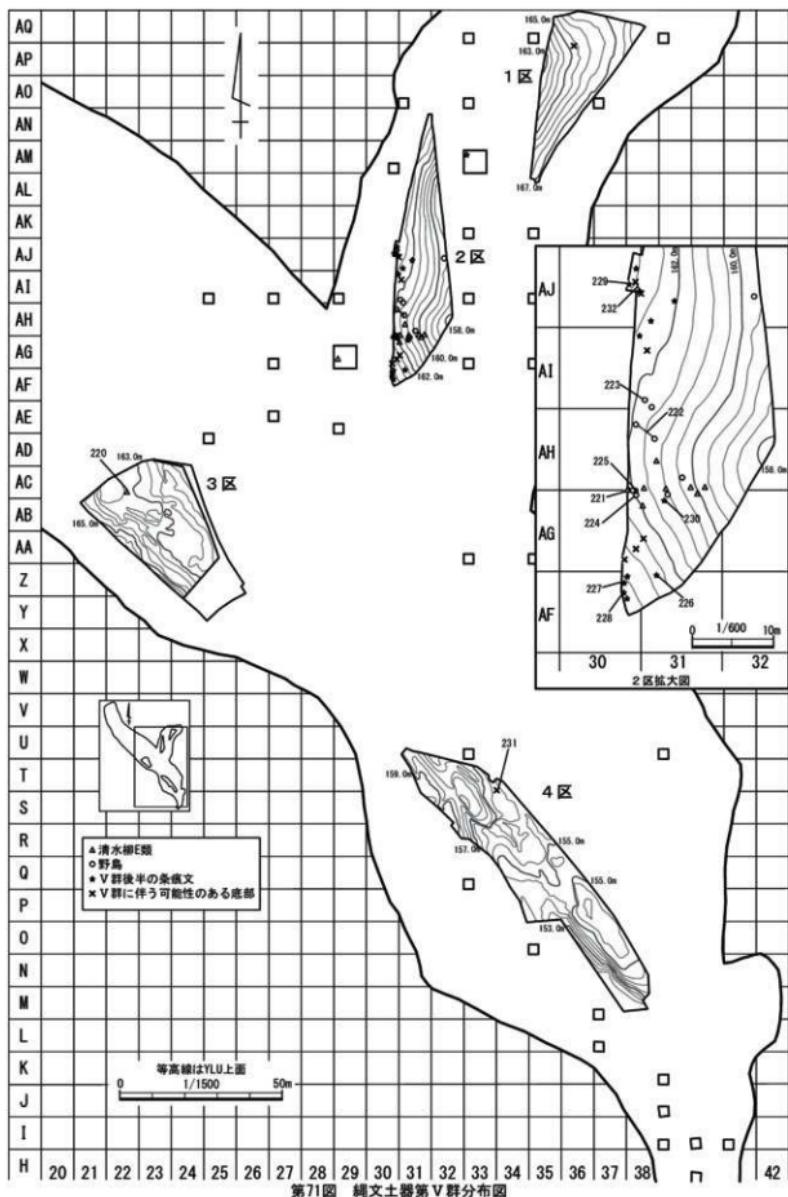
第68図 縄文土器第四群2類



第69図 縄文土器第IV群2~4類



第70図 縄文土器第IV群4類～第V群



第71図 縄文土器第V群分布図

**5類(押型文土器並行)**

154~216に時期的に並行する可能性があるものが、217~219である。出土位置は2区で多くの土器群と共に伴する。217・218は口縁部のみの破片資料である。217は山形文が退化したものか。内外面口唇部直下に横位の4本の沈線、また外面には横位の沈線より垂下する4本の沈線が見られる。この沈線を詳細に観察すると、施文具の傷に由来する凹凸が間隔をおいて見られた。この点からこの沈線は押型文として理解された。酷似する資料(103)が19号土坑から出土している。218は器厚が薄い資料である。外面に撫糸文が認められる。219は尖底部か。胎土に金雲母が見られる。

**第V群：縄文時代早期後半(第70・71図 第19表 写真図版33)**

縄文時代早期後半代の条痕文系土器群を集成した。縦条体圧痕文や沈線文等の特徴により1~4類に分類される。出土位置は殆どの資料が2区であるが、第I~IV群が埋没谷やA I・A J 31グリッド付近に集中する傾向であったのに対し、A F 30・31グリッド付近すなわち埋没谷南側付近までその分布が広がる点を特徴とする。

**1類(清水柳E類)**

220・221を1類とした。清水柳E類と呼称される土器群であろう。220は外面に輪の認められない縦条体圧痕文が横位に施されている。221は胴部下半部か。外面に文様は施されていない。同一個体か。胎土に多くの纖維を含む。

**2類(野島式)**

222~225を2類とした。野島式土器と考えられる土器群である。222・223は波状口縁の資料である。口唇部は刻目文が施され、波頂部から2本の縦位の沈線文を垂下させている。その縦位沈線文を基軸として横位・斜位に区画のための沈線文を施している。沈線文により区画された区域に刺突文を施す。沈線文及び刺突文は同一の施文具と考えられ、沈線文は押し引き気味に、刺突文は器面に対してかなり斜方向から施している。両者とも内面には指頭痕が観察される。224・225は口縁部直下の段部付近の資料と考えられる。縦位と斜位の沈線文が施される。段部より下位は無文である。なお224には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を行った結果、 $7,670 \pm 30$ yrBPという数値が出された。

**3類(野島式並行)**

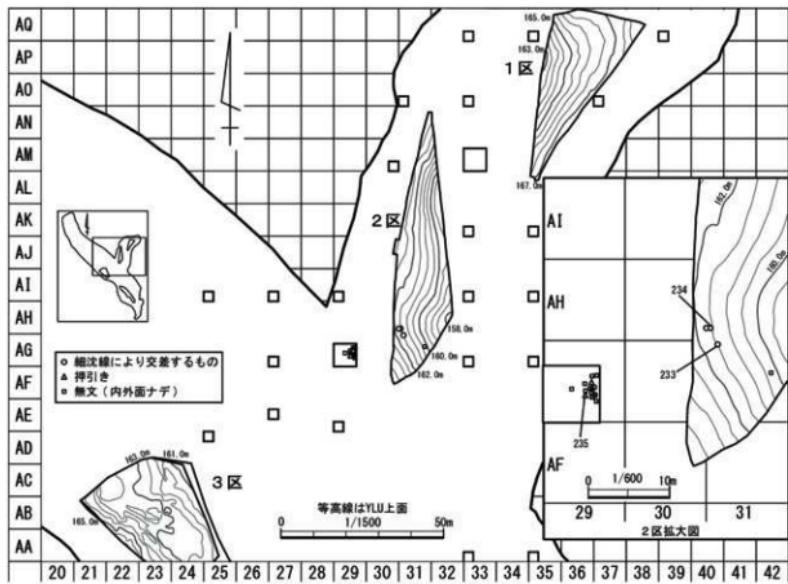
226~230を3類とした。野島式土器に時期的に並行するものとして分類してあるが、1類に分類しても良いかもしれない。226~228は口縁部のみの破片資料で、いずれも口唇部を平坦に仕上げ、口唇部直下より縦位の沈線文を、横位に施された微隆起線文まで施している。229は胴部のみの破片資料である。縦位に条痕文を施した後に、指頭により斜位にナデ消している。

**4類(底部資料)**

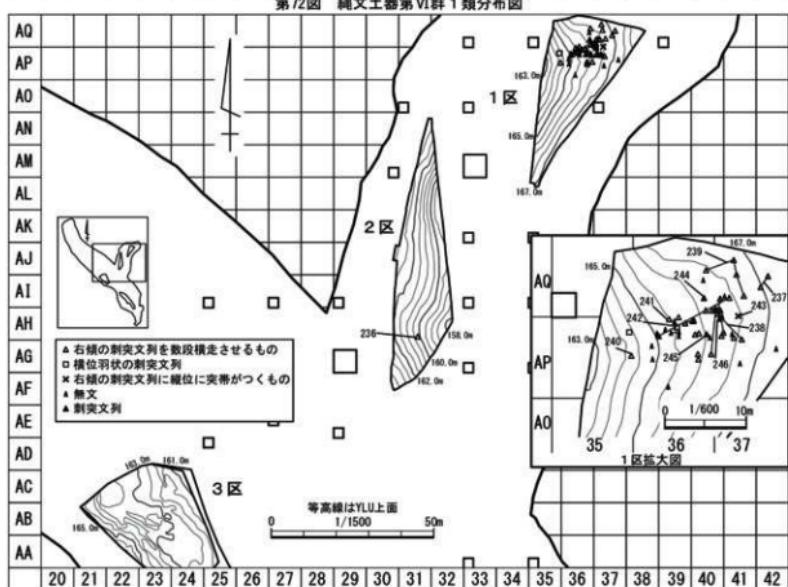
231・232は早期後半代と考えられるが、所属が判然としない底部である。前者は尖底、後者は平底のみの破片資料である。尖底はケズリで形状を整えたものか。平底には縞物等の圧痕は観察されない。

**第VI群：前期初頭～前半(第72~74・77図 第19表 写真図版34)**

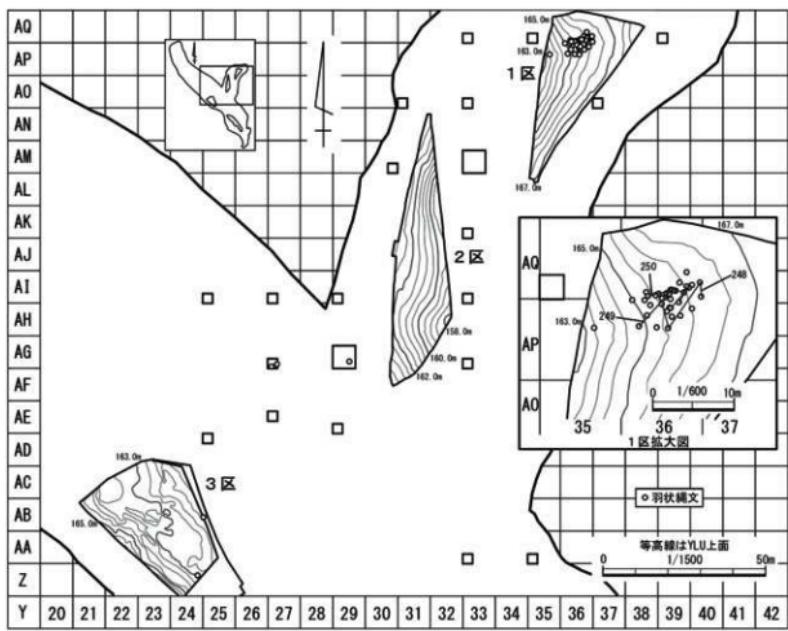
縄文時代前期前半代の土器を集成した。器厚や文様等の特徴により1~4類に分類される。出土位置は1類と3~4類とで異なる。



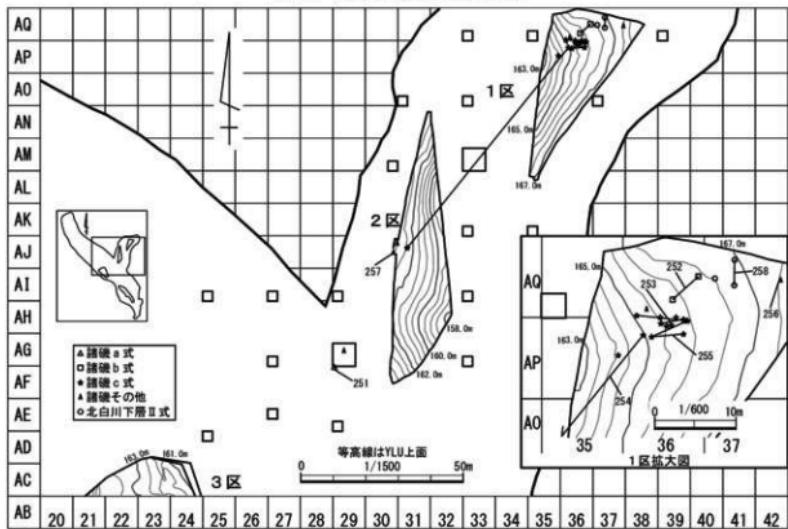
第72図 縄文土器第VI群1類分布図



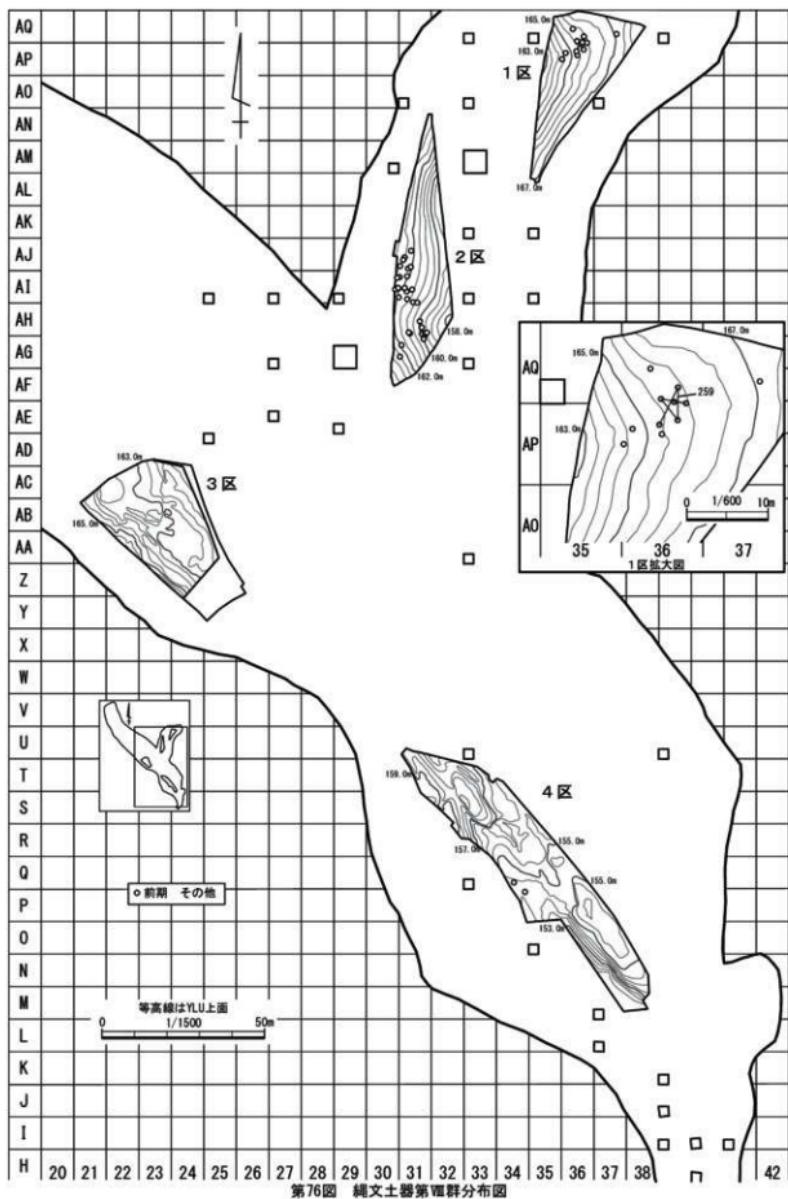
第73図 縄文土器第VI群2類分布図



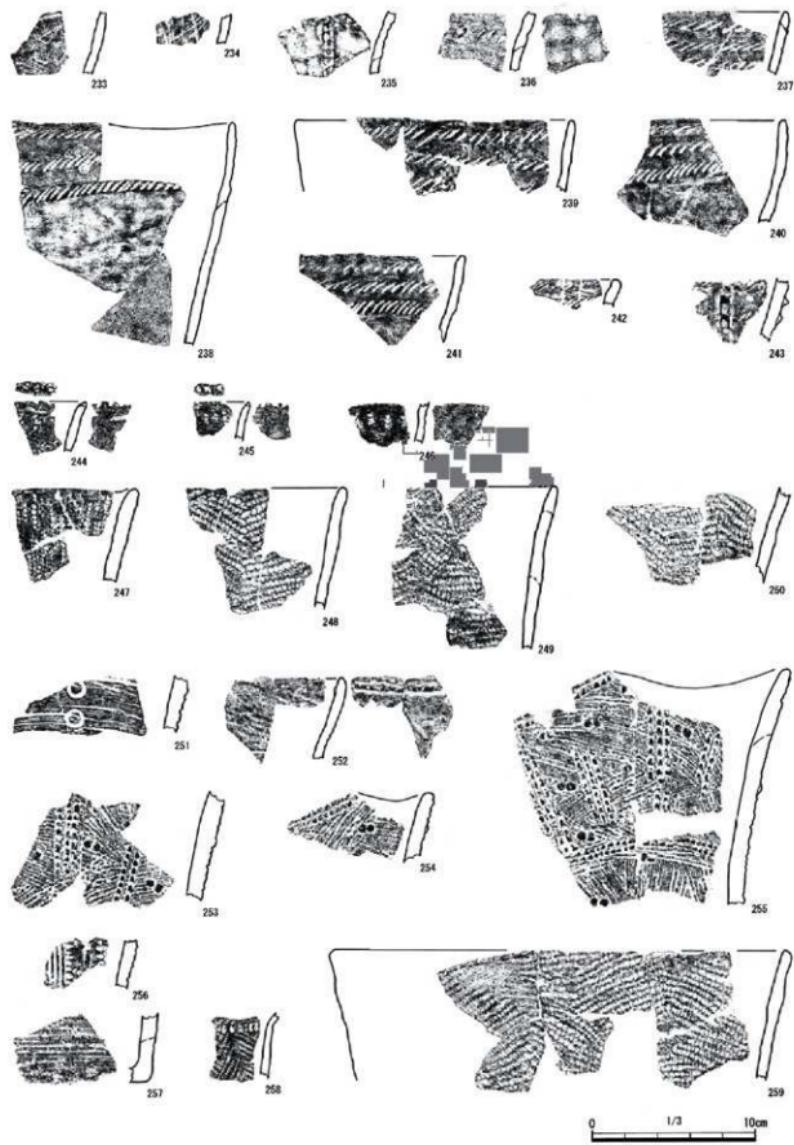
第74図 縄文土器第VI群3類分布図



第75図 縄文土器第VI群分布図



第76図 縄文土器第Ⅳ群分布図



第77図 縄文土器第VI群～第IV群

### 1類(木鳥式)

233～235を1類とした。木鳥式土器と考えられる資料である。出土位置は2区及びテストピットAG29に限られている。233～235はいずれも胴部のみの破片資料である。233・234の外面には細沈線文が施されている。235は半截竹管状の工具で押し引き状に連續刺突している。3点とも内面には指頭痕が見られる。

### 2類(清水ノ上II式・上ノ坊式及び時期的に並行する刺突文土器)

236～246を2類とした。清水ノ上II式及び上ノ坊式については時期的に並行しており、現在研究が進められていることから、併記して記載する。2類土器は1類土器と異なり、出土位置は1区に集中する。

237～242は口縁が残存する資料である。238は口縁部から胴部にかけて残存した資料である。波状口縁の可能性がある。胴部は直線的に立ち上げ、口縁部付近を微かに内湾させる。口唇部は丸く仕上げ、その直下より横位の刺突文列を3列施している。3列目は段部に沿って施されているが、その段部より上位が縁帶部として区画の意図を感じさせる。下位はケズリ調整か。239～241は口縁部のみの破片資料で、口唇部直下より刺突文列が3列施されている。240・241の2点は238同様微かに段部を設ける。242は矢羽根状に刺突文を施している。243は縁部に隆帯を貼り付けた後に、指頭で摘まむことにより突起を作出している。なお238～243のいずれも外面の刺突文は爪もしくは先端が鋭い工具で施したもので、内面に指頭痕が明瞭に観察される。244～246は先端が複数に割れた棒状の工具により刺突文が施された資料である。時期的に同時並行と考えられるが、清水ノ上II式・上ノ坊式と区分されるものか。

### 3類(羽状縄文土器)

247～250を3類とした。2類土器と時期的に並行する羽状縄文を施した土器群である。出土位置は1区で、2類土器の出土分布域と合致する。247～249は口縁部のみ、250は胴部の破片資料である。いずれの資料も直線的に立ち上げ、口唇部は丸く仕上げている。外面は羽状縄文が施されている。内面は横位のナデであるが、胎土中の粒子の移動痕が明瞭であるため、あまり乾燥していない段階で内面調整を行ったものか。胎土に纖維を僅かに含む。

## 第VII群：縄文時代前期後半(第75・77図 第19表 写真図版35)

縄文時代前期後半代の土器群を集成した。文様や器厚等の特徴により1・2類に分類される。出土位置は殆どの資料が1区であるが、僅かに2区等にも散布が認められる。

### 1類(諸磯a～c式)

251～257を1類とした。諸磯式土器と考えられる土器群である。出土位置は1区を中心とするが、2区等にも出土が認められる。251には円形刺突文が施されている。諸磯a式か。この資料には炭化物が付着しており、放射性炭素年代測定を実施した結果、 $5,310 \pm 20$ yrBPという数値が出された。詳細は附編を参照されたい。252は口縁部のみの破片資料である。僅かに内湾して立ち上げている。外面には縄文か。内面口唇部直下に浮線文が貼り付けられている。浮線文には浅い刻目が施されている。諸磯b式か。253～255は諸磯c式と考えられる。255は口縁部から胴部中位にかけての資料である。この資料は波状口縁で、外反気味に立ち上げている。外面は半截竹管状の工具で、矢羽根状に沈線文を施した後に、口唇部直下及び胴部上半部に横位・縦位の結節浮線文を貼り付けている。また結節浮線文により区画された区域に2個単位の円形浮文が貼り付けられている。257は底部か。

**2類(北白川下層II式)**

258は北白川下層II式と考えられる。器厚は薄手に仕上げられ、羽状縄文と刺突文が施されている。

**第VIII群：縄文時代前期後半(第76・77図 第19表)**

縄文時代前期後半の型式名が判然としない土器群を集成した。無文土器が中心である。259は口縁部のみの破片資料で、直線的に立ち上がり、口唇部は丸く仕上げている。縄文が施されている。なお付着していた炭化物の放射性炭素年代測定の値は $5,640 \pm 20$ yrBPである。詳細は附編を参照されたい。

**第IX群：縄文時代中期(第78・81図 第19表 写真図版35)**

縄文時代中期代の土器を集成した。中期代と思しき縄文土器は1区及び2区に見られるが、無文等のため殆どどの資料の型式名は判然としない。辛うじて五領ヶ台式と考えられる土器が3区に出土している。

**1類(五領ヶ台式)**

260は五領ヶ台式土器の細片資料か。刺突文列が施されている。

**2類(無文)**

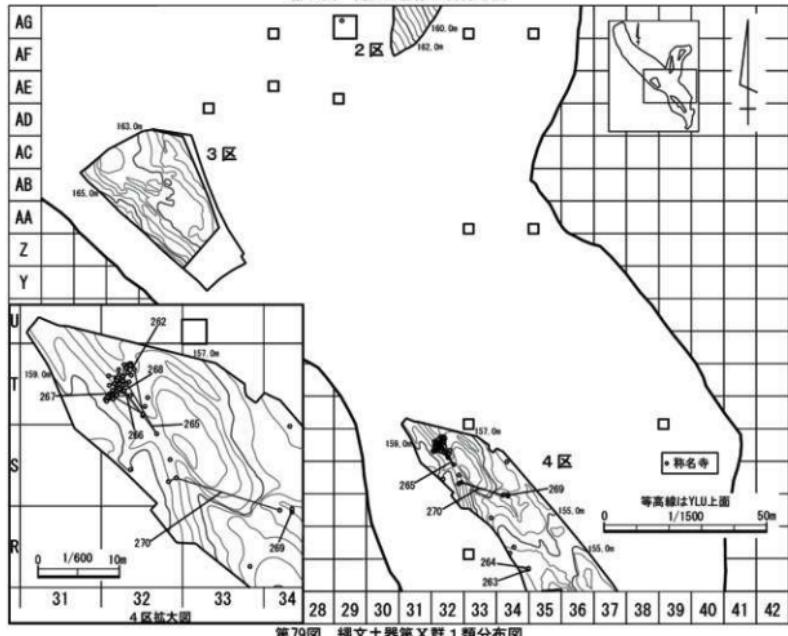
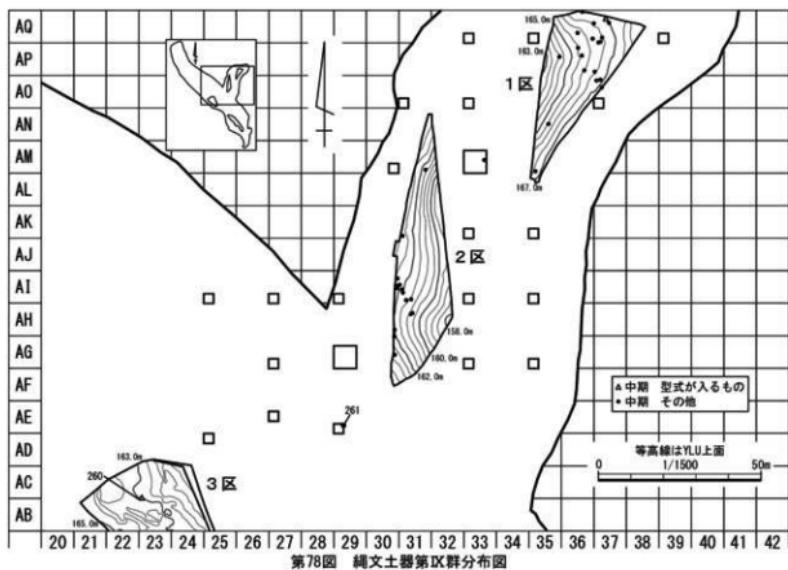
261は底部から胴部中位にかけて残存した資料である。平坦な底部から直線的に立ち上げ、胴部中位付近から内湾させている。外面には指頭痕やナデ痕が観察される。この資料に付着する炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 $4,500 \pm 20$ yrBPという数値が出された。詳細は附編を参照されたい。

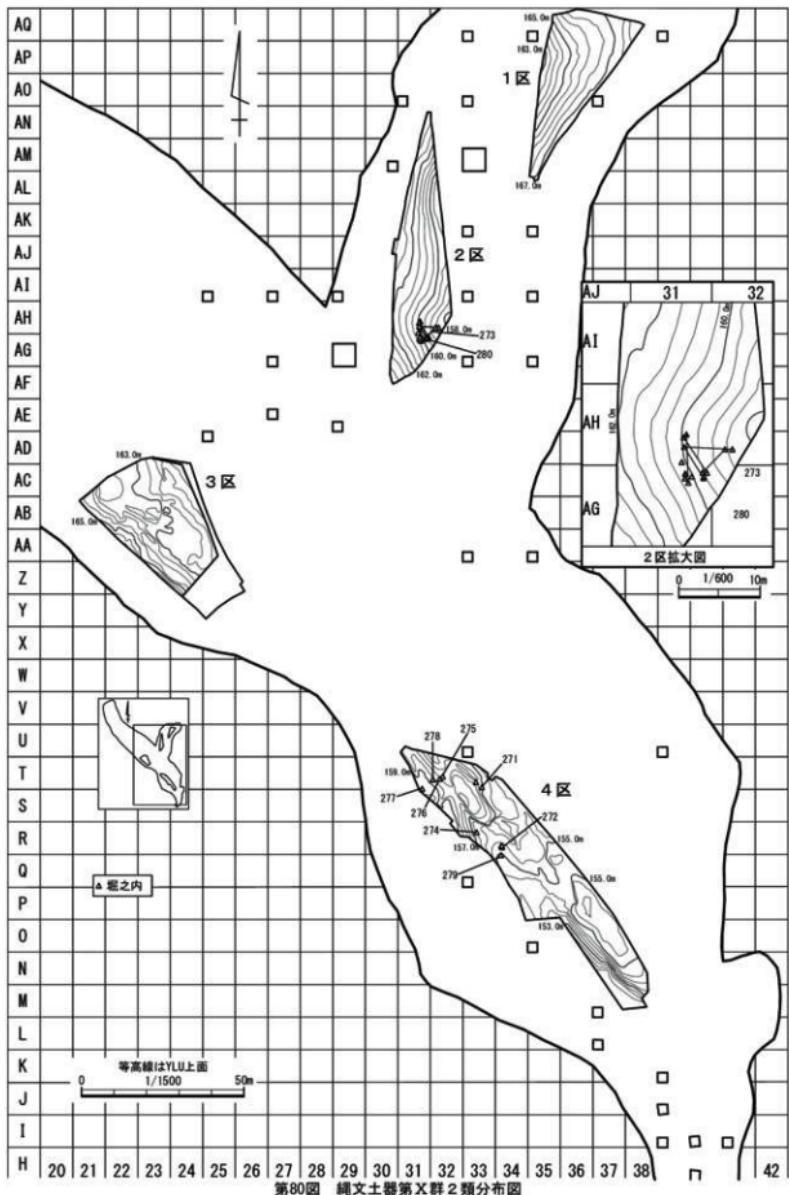
**第X群：縄文時代後期(第79~83図 第19表 写真図版36・37)**

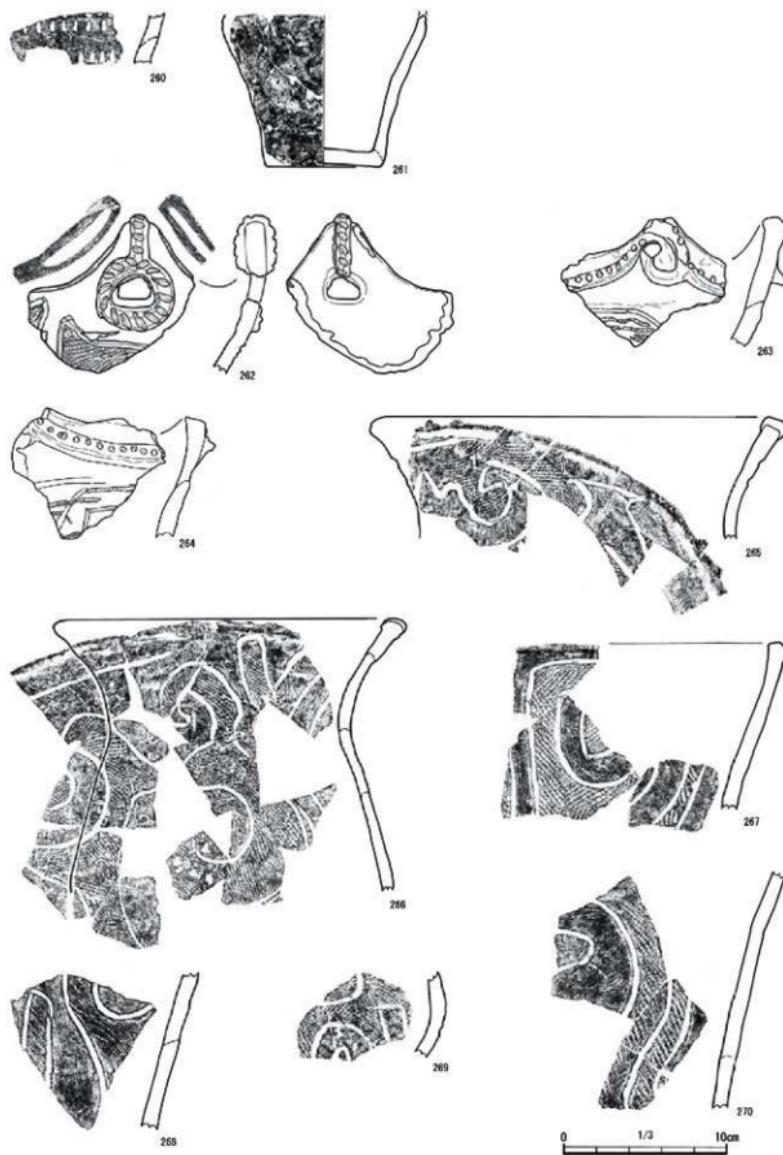
縄文時代後期初頭から前半にかけての土器群を集成した。文様等の特徴により1~3類に分類される。出土位置は各類に特徴が見出される。

**1類(称名寺式)**

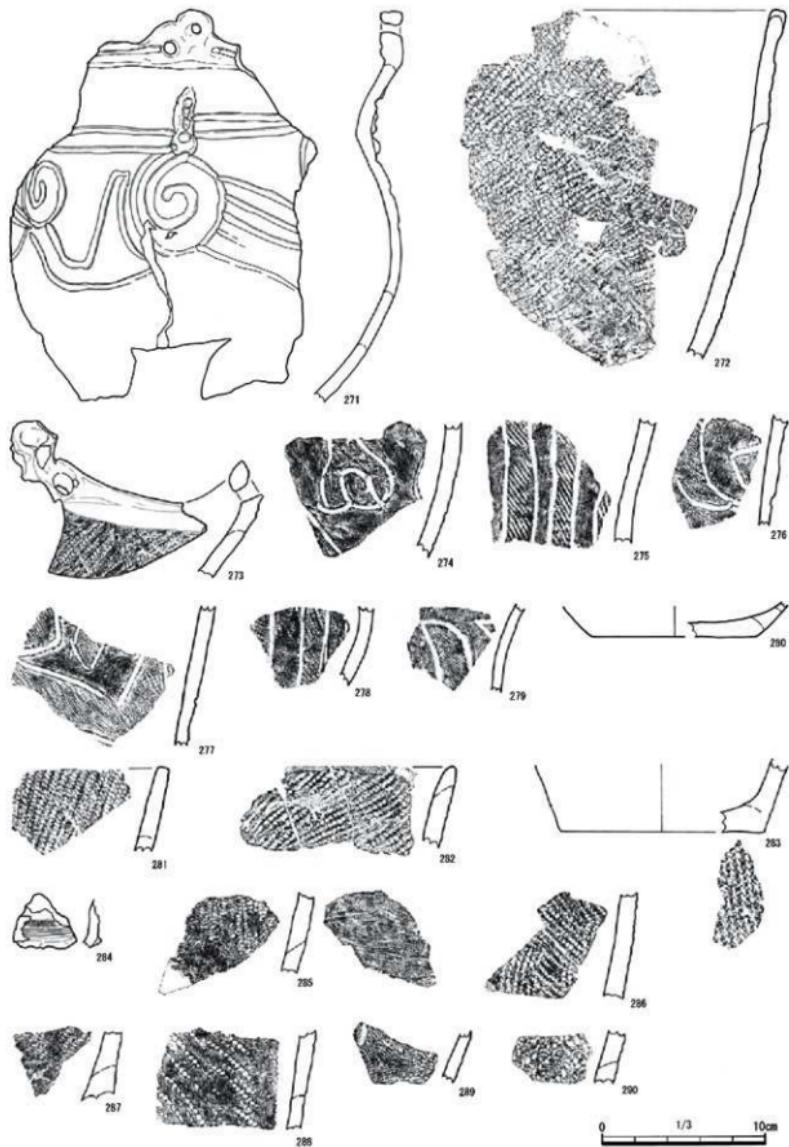
262~270を1類とした。称名寺式と考えられる土器群で、出土位置は4区T32グリッドを中心に分布する。262~267は口縁部が残存した資料である。262~264は波状口縁である。262は内湾する口縁部で口唇部は平坦に仕上げている。その口唇部には太く深めの沈線文が施されている。波頂部から約3cm下位に橢円形の透かし穴を穿つ。穴の周囲に浮線文が巡らされ、かつ波頂部からも浮線文を垂下させている。浮線文には刻目を施す。他の部位は沈線文による区画内に縄文を充填している。263も口唇部を平坦に仕上げ、内面側の端部を引き出している。波頂部直下に細い粘土板で渦巻き状のモチーフを作出し、また口唇部に沿って鉛状に粘土板を張り付けている。それに沿って棒状工具で刺突文が連続して施されている。破片端部には沈線文と縄文か。264は波頂部から波底部にかけての部位か。口唇部の内面側端部を263と同様引き出しているが、引き出しはやや弱い。外面には口唇部に沿って、粘土紐を貼り付けて鉛状をなす。それに沿って棒状工具を連続して刺突している。下位には浅い沈線文が観察されるが、その区画性は判然としない。265は口唇部に2個単位の貼付文が観察される。外面口唇部直下より、浅い沈線文による区画内に部分的に縄文が充填されている。266は口縁部から胴部中位にかけて残存した資料で、本来の器形は胴部上半部で括れた器形か。平坦に仕上げた口唇部に3個の貼付文が観察される。口唇部直下より沈線文による区画内に縄文が部分的に充填されている。「J」字状のモチーフか。268~270は胴部のみの破片資料である。沈線文による区画内に縄文が充填されている。なお264・268付着の炭化物に放射性炭素年代測定を行い、 $3,870 \pm 20$ yrBP、 $3,930 \pm 30$ yrBPという結果が出された。



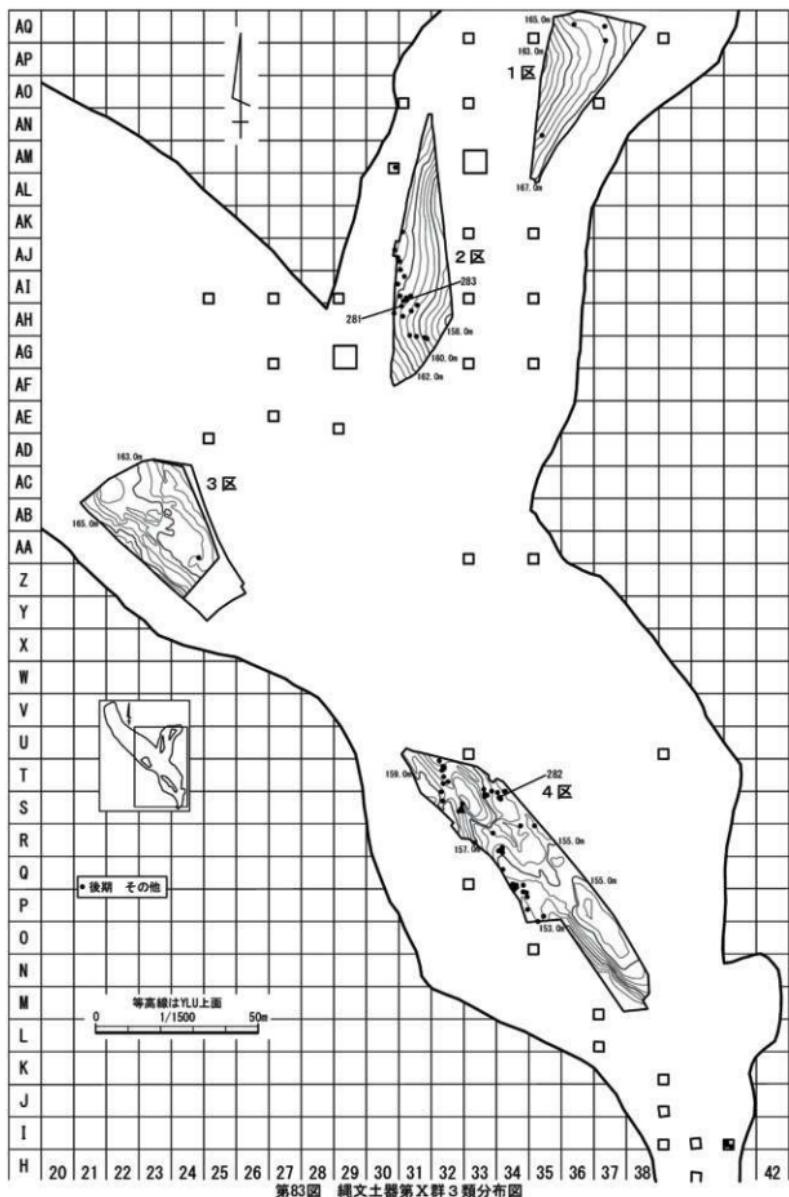




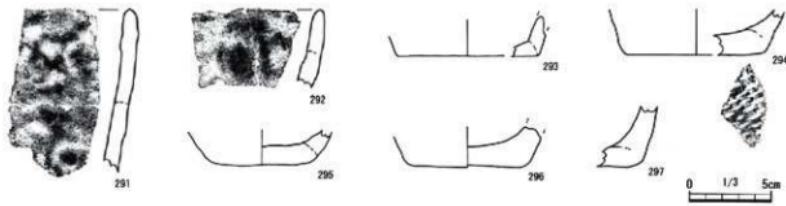
第81図 縄文土器第IX群～第X群1類



第82図 縄文土器第X群2類～第XI群2類



第83図 縄文土器第X群3類分布図



第84図 繩文土器第XI群3類

**2類(堀之内式)**

271～280を2類とした。堀之内式土器及び堀之内式に並行する土器群で、出土位置は2区AH32グリッド杭周辺、4区北半部に認められる。271は口縁部から脣部下位まで残存した資料である。球状を呈する脣部、及び頸部から口縁部を僅かに外反させている。口唇部には沈線文と「8」字状の貼付文が観察される。「8」字状貼付文直下の頸部付近では、縦位に貼付文を施した後、2本の沈線文を横位に施す。口縁部から頸部の沈線文までは文様が認められない。脣部中位付近から渦巻き状のモチーフを沈線で描いた後、斜線・曲線状の沈線でこれらを繋ぐ。272は脣部からほぼ直線的に立ち上げている。僅かに残存した口唇部に貼付文が認められる。外面は縄文を施す。273は波状口縁の波頂部付近か。口縁部は内折させて上方へ引き出す。波頂部には杯状の貼付文が残り、内面側に円形の窪みが観察される。杯状貼付文の脇には透かし穴を穿つ。口縁部は丁寧なミガキ、それより下位は縄文を施す。274～279は脣部のみの破片資料で、274・276・277・279は何らかのモチーフを沈線で描いた後に、275・278は垂下させた複数の沈線の間隙に縄文を充填している。

**3類(その他)**

281～283を3類とした。施文が縄文のみで型式は判然としない。第IX群に属する可能性もある。281・282は口縁部のみの破片資料で、前者は口唇部を平坦に、後者は丸く仕上げている。282は放射性炭素年代測定の結果、 $3,800 \pm 20$ yrBPという結果が出された。283は編物の圧痕が観察できる。

**第XI群：型式不明(第82・84図 第19表)**

型式が判然としない土器群を集成した。文様等の特徴により1～3類に分類される。

**1類(東海系)**

284は外面に半截竹管状の工具により連続刺突し、その下位には粘土紐を貼り付けて、凸帯状をなし、刺突文との間隙は工具によりナデている。器面には赤彩の痕跡が観察される。器厚は薄く仕上げている点から、東海以西の縄文土器と考えられる。

**2類(縄文他)**

285～290は縄文が施された土器片を集成した。285の内面は擦痕が観察される。

**3類(無文他)**

291～297は無文の土器片を集成した。291・292は口縁部のみの破片資料で、直線的に立ち上げている。口唇部は丸く仕上げる。外面には指頭痕が観察される。293～297は底部資料である。

第19表 繩文時代遺構出土土器観察表①

標記番号	写真 図版 番号	分類 群 類	グリッド	色調(Hue)	文様調査等	種類	胎土
105 26 I	I	AJ-31	10YR5/2	縦帶貼り付け後、剥み、稍しうな胎土。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
106 26 I	I	AJ-31	10YR5/1	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。白色岩片	
107 26 I	I	AJ-31	10YR5/2	口縁部直下に隆起部あり付け後、剥み。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
108 26 I	I	AJ-30	7.5YR6/4	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
109 26 I	I	AJ-30	7.5YR6/4	縦帶貼り付け後、剥み。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
110 26 I	I	AJ-31	7.5YR5/2	口縁部直下に隆起部あり付け後、剥み。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
111 26 I	I	AJ-31	7.5YR5/6	縦帶貼り付け後、剥み。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
112 26 I	I	AJ-30	7.5YR5/6	縦帶貼り付け後、剥み。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
113 26 II 1	II	AP-36	7.5YR5/3	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
114 26 II 1	II	AP-36	10YR5/2	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
115 26 II 1	II	AP-36	7.5YR6/6	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
116 26 II 1	II	AP-36	10YR5/3	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
117 26 II 1	II	AP-36	7.5YR5/3	斜位の縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、輝石、白色岩片	
118 26 II 1	II	AJ-25	10YR5/4	斜位の縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
119 26 II 1	II	AP-36	10YR5/4	縦帶貼り付け後。内部に擦れ。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
120 26 II 1	II	AP-36	10YR5/3	縦帶貼り付け後。内部に擦れ。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
121 26 II 1	II	AP-36	10YR5/4	縦帶貼り付け後。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
122 26 II 1	II	AP-36	10YR5/3	縦帶貼り付け後。内部に擦れ。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
123 26 II 1	II	AC-22	5YR6/6	斜位の側面圧痕。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
124 27 B 2	B 2	AB-31	5YR4/3	波状口縁。式文地縦帶貼り付け。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
125 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/4	口縁部及び縦縫に縦帶貼り付け文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
126 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR5/3	口縁部及び縦縫に縦帶貼り付け文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
127 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/1	縦帶貼り付け後。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
128 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR5/4	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
129 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
130 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/4	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
131 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
132 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
133 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
134 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	北東に向方の条絞。縦條体状文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
135 27 B 2	B 2	AP-36	5YR5/6	輪帯状伏状。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
136 27 B 2	B 2	AP-36	5YR6/6	縦帶貼り付け後。下半部に縦文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
137 27 B 2	B 2	AP-36	5YR6/6	縦帶貼り付け後。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
138 27 B 2	B 2	AP-36	7.5YR6/6	縦帶貼り付け後。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、白色岩片	
139 28 B 3	B 3	AP-35	7.5YR1/4	口縁部と外部に斜形文。	有	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
140 28 B 3	B 3	AP-35	10YR5/3	斜形文。	有	白色粒子。黒色粒子。露母、遇斑。	
141 28 B 3	B 3	AP-36	10YR6/4	然然文。	有	白色粒子。黒色粒子。露母	
142 28 B 4	B 4	AP-36	10YR5/4	口縁部にさき波状の押住文。無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
143 28 B 4	B 4	AP-36	10YR5/4	口縁部にさき波状の押住文。無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
144 28 B 4	B 4	AP-36	7.5YR6/1	無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
145 28 B 4	B 4	AP-37	10YR5/2	無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
146 28 B 4	B 4	AB-31	7.5YR5/4	無文。内部に条絞。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、輝石、白色岩片	
147 28 B 4	B 4	AP-36	7.5YR6/6	無文。	無	白色粒子。露母、白色岩片	
148 28 B 4	B 4	AP-37	7.5YR5/1	無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
149 28 B 4	B 4	AP-37	7.5YR6/4	無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
150 28 B 4	B 4	AP-37	10YR5/3	無文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
151 28 B 4	B 4	AP-37	7.5YR6/6	部文。	無	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
152 29 III 1	III 1	AA-22	10YR7/4	圓文。絞しうな胎土。	無	白色粒子多。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
153 29 III 2	III 2	AJ-30	7.5YR2/1	波状口縁。口唇部に斜形文に捺壓文。	有	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
154 29 IV 1	IV 1	AJ-30	5YR5/5	波状口縁。口唇部と内外面に押住文。ナデ。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
155 29 IV 1	IV 1	AJ-31	5YR5/6	斜位の押住文。	有	白色粒子。黒色粒子。露母、白色岩片	
156 29 IV 1	IV 1	AJ-29	7.5YR3/2	波状口縁。口唇部に棒状工具による削み。斜糸文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
157 29 IV 1	IV 1	AP-36	5YR4/6	波状口縁。口唇部と内外面に捺壓文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石	
158 29 IV 1	IV 1	AJ-31	7.5YR3/1	外縁と内部の口縁部に捺壓文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石	
159 29 IV 1	IV 1	AJ-31	7.5YR5/4	外縁と内部の口縁部に捺壓文。ナデ。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石、白色岩片	
160 29 IV 1	IV 1	AH-31	7.5YR4/1	外縁に北向方の捺壓文。内部の口縁部付近に横位の捺壓文。指印	有	白色粒子多。黒色粒子多。石英、輝石、白色岩片	
161 29 IV 1	IV 1	AH-31	7.5YR4/2	捺壓文。	有	白色粒子多。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
162 29 IV 1	IV 1	AJ-30	7.5YR4/4	捺壓口縁。捺壓文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
163 29 IV 1	IV 1	AB-31	7.5YR4/5	口縁部直下に指印跡。真方方向の捺壓文。	有	白色粒子多。石英、露母、白色岩片	
164 29 IV 1	IV 1	AJ-35	7.5YR4/3	斜位の捺壓文。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、白色岩片	
165 29 IV 1	IV 1	AD-31	10YR5/3	外縁に交差する斜位の捺壓文。内面に斜位の捺壓文。	有	白色粒子多。黒色粒子多。石英、露母、白色岩片	
166 29 IV 1	IV 1	AJ-31	7.5YR5/6	交差する斜位の捺壓文。	有	白色粒子多。黒色粒子多。石英、露母、白色岩片	
167 29 IV 1	IV 1	AD-31	7.5YR4/4	捺壓の捺壓文。ナデ。	有	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石	
168 29 IV 1	IV 1	AJ-29	7.5YR6/6	捺壓の捺壓文。内面に擦れ。	有	白色粒子多。黒色粒子多。石英多。露母多、白色岩片	
169 29 IV 1	IV 1	AH-29	7.5YR4/6	禹向南の捺壓文。内面に擦れ。	有	白色粒子多。黒色粒子多。石英多。露母多、白色岩片	
170 30 IV 2	IV 2	AJ-30	7.5YR6/6	捺壓後後の地形文。	無	石英多。露母多	
171 30 IV 2	IV 2	AJ-30	7.5YR6/3	捺壓後後の山形文。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母多、輝石	
172 30 IV 2	IV 2	AC-23	5YR5/6	捺壓後後の山形文。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母多、輝石	
173 30 IV 2	IV 2	AH-31	7.5YR4/3	捺壓後後の山形文。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母、輝石	
174 30 IV 2	IV 2	AJ-31	5YR3/3	波状口縁。口唇部に山形文。外縁に禹向南の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	無	白色粒子。黒色粒子。石英、露母多、輝石	

第19表 桶文時代遺構出土土器観察表(2)

桜田 番号	写真 番号	分類 群 類	グリッド	色調(Hue)	文様調査等	織様	胎土
175	30	IV 2	AH-32	7.5YR6/2	口唇部に山形文。内面に異方向牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。外面上に異方向牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	有	白色粒子多。石英、白色岩片
176	31	IV 2	AI-31	7.5YR2/1	口唇部に山形文。内面に異方向牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。外面上に異方向牽状の山形文。内面にナデ。	有	白色粒子多。黑色粒子。石英、輝石
177	31	IV 2	AH-30	7.5YR2/1	口唇部に山形文。内面に異方向牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子、輝石、斑片
178	31	IV 2	AI-31	7.5YR3/2	口唇部に山形文。内面に異方向牽状の山形文。外面上に異方向牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石
179	31	IV 2	AI-31	7.5YR2/2	口唇部に山形文。外面上に異方向牽状の山形文。	無	白色粒子多。白色岩片
180	31	IV 2	AI-31	7.5YR4/1	横位牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
181	31	IV 2	AI-31	7.5YR4/1	横位牽状の山形文。内面の口縁部付近に横位の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
182	31	IV 2	AI-31	7.5YR4/4	横位牽状の山形文。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
183	31	IV 2	AP-36	10YR4/1	横位牽状の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
184	31	IV 2	AI-31	10YR5/3	横位牽状の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
185	31	IV 2	AP-36	10YR5/3	横位牽状の山形文。内面にナデ。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
186	31	IV 2	AI-31	10YR6/4	横位牽状の山形文。	無	白色粒子。石英
187	31	IV 2	AI-31	7.5YR4/4	横位牽状の山形文。	無	白色粒子。輝石
188	31	IV 2	AI-30	7.5YR4/4	横位牽状の山形文。	有	白色粒子多。黑色粒子
189	31	IV 2	AI-31	7.5YR5/4	横位牽状の山形文。内面にナデ。	有	白色粒子。黑色粒子
190	31	IV 2	AK-31	7.5YR4/1	異方向牽状の山形文。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石。白色岩片
191	31	IV 2	AI-31	7.5YR5/4	横位密接の山形文。ナデ。	無	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片多
192	31	IV 2	AI-31	7.5YR4/8	異方向牽状の山形文。	有	白色粒子。石英、輝石。白色岩片
193	31	IV 2	AI-31	7.5YR5/4	口唇部に山形文。異方向密接の山形文。(重複施文)	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石
194	31	IV 2	AI-31	7.5YR2/1	口唇部に山形文。外面上に異方向密接の山形文。(重複施文)内面に横位の山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石
195	31	IV 3	AI-31	7.5YR1/1	撚。牽状。内面にナデ。補修孔あり。	無	白色粒子多。黑色粒子多。輝石多。長石多
196	31	IV 3	AI-31	7.5YR2/2	撚。牽状。内面にナデ。補修孔あり。	無	白色粒子多。黑色粒子多。輝石多。長石多
197	31	IV 3	AI-31	7.5YR4/3	撚。牽状。内面にナデ。	無	白色粒子多。黑色粒子多。輝石多。長石多
198	31	IV 3	AP-36	7.5YR1/2	内面に指痕。擦痕。斑点。	無	白色粒子多。黑色粒子。石英、輝石
199	31	IV 3	AI-31	7.5YR2/2	撚。内面に指痕。擦痕。斑点。	無	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
200	31	IV 3	AP-36	7.5YR2/1	撚。内面に指痕。擦痕。斑点。	無	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
201	32	IV 4	AC-21	7.5YR5/4	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石
202	32	IV 4	AI-25	7.5YR4/3	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石
203	32	IV 4	U-31	7.5YR4/4	横位密接の横円文。	無	白色粒子。石英、輝石
204	32	IV 4	U-31	7.5YR4/4	横位。横位密接の横円文。	無	白色粒子。黑色粒子。石英多
205	32	IV 4	AI-25	7.5YR4/3	横位密接の横円文。ナデあり。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石、白色岩片
206	32	IV 4	U-31	7.5YR4/4	異方向密接の横円文。	無	白色粒子。石英、輝石
207	32	IV 4	U-31	7.5YR5/6	異方向密接の横円文。	無	白色粒子。石英、輝石
208	32	IV 4	AI-31	7.5YR4/3	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英多、雲母、輝石
209	32	IV 4	U-31	7.5YR5/6	異方向密接の横円文。	無	白色粒子。石英、輝石、斑片
210	32	IV 4	AC-21	7.5YR5/6	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石、白色岩片
211	32	IV 4	AB-23	7.5YR5/4	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英多、雲母多
212	32	IV 4	AB-24	7.5YR5/6	横位密接の横円文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母多、輝石、白色岩片
213	32	IV 4	P-35	7.5YR4/4	横位牽状の横円文。山形文。	有	石英、雲母、輝石、白色岩片
214	32	IV 4	Q-35	7.5YR5/6	後位の横円・山形文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
215	32	IV 4	P-34	7.5YR5/4	横位牽状の横円文。山形文。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
216	32	IV 4	AB-23	7.5YR4/4	斜位の牵状。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
217	32	IV 5	AH-30	7.5YR4/4	口唇部に押痕。異方向牽状の押型文。	有	白色粒子多。石英、輝石、白色岩片
218	32	IV 5	AI-29	7.5YR2/1	横位の牵状の捺痕。内面は口縁付近に横位の捺痕文。	無	白色粒子多。黑色粒子。雲母多
219	32	IV 5	AJ-30	7.5YR4/4	押型文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石
220	33	V 1	AI-22	7.5YR4/3	縦条体压印文。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、雲母、輝石、白色岩片
221	33	V 1	AH-30	10YR2/3	無文。内外面にナデ。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石
222	33	V 2	AH-30	7.5YR4/4	波状口縁。口唇部に刻印。半截竹管状工具による捺痕。斜尖、穿孔。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
223	33	V 2	AI-31	7.5YR4/4	波状口縁。口唇部に刻印。半截竹管状工具による捺痕。斜尖、穿孔。	有	白色粒子。黑色粒子
224	33	V 2	AD-30	7.5YR5/3	前面部をナデで区画後、半截竹管工具による異方向の集合捺痕。内面にナデ。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
225	33	V 2	AD-30	10YR6/4	前面部をナデで区画後、半截竹管工具による異方向の集合捺痕。内面にナデ。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石
226	33	V 3	AF-31	7.5YR4/4	波状口縁。後壁起綫文。半截竹管状工具による捺痕。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
227	33	V 3	AF-30	7.5YR4/4	波状口縁。後壁起綫文。半截竹管状工具による捺痕。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
228	33	V 3	AF-30	7.5YR4/4	波状口縁。後壁起綫文。半截竹管状工具による捺痕。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
229	33	V 3	AJ-30	7.5YR5/4	斜位の牵状。ナデなし。内面に擦痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
230	33	V 3	AG-31	7.5YR5/4	半截竹管工具による横位の捺痕。ナデ。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
231	33	V 4	T-34	7.5YR4/4	尖底。無文。工具によるとナデ。	有	白色粒子。黑色粒子。石英
232	33	V 4	AD-30	5YR5/6	波状。無文。捺痕。内面にスズ。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
233	34	VI 1	AI-31	10YR7/3	波状口縁。内面に指痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
234	34	VI 1	AI-31	10YR7/2	波状口縁。内面に指痕。	有	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
235	34	VI 1	AI-29	10YR8/3	半截竹管工具による通透焼附文。内面に無頭痕。	無	白色粒子。黑色粒子。石英、輝石、白色岩片
236	34	VI 2	AD-31	10YR6/2	爪跡または工具による通透焼附文。内面に指痕。	有	白色粒子多。黑色粒子多。石英、輝石、白色岩片
237	34	VI 2	AD-37	7.5YR2/1	ヘラ状工具による通透焼附文。内面にナデ。	有	白色粒子。黑色粒子。石英多、輝石、白色岩片

第19表 繩文時代遺構出土土器観察表(③)

標印 番号	写真 図版 番号	分類 群 類	グリッド	色調(Hue)	文様調査等	種類	胎土
238	34 VI 2	AD-37	7.5YR2/1	ヘラ状工具による連續刺突文。内面に指痕。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英多、輝石多、白色岩片	
239	34 VI 2	AD-36	7.5YR2/1	ヘラ状工具による連續刺突文。内面に指痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
240	34 VI 2	AP-35	7.5YR4/1	ヘラ状工具による連續刺突文。内面に指痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
241	34 VI 2	AP-36	7.5YR2/1	ヘラ状工具による連續刺突文。内面に指痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
242	34 VI 2	AP-36	SYRS/8	ヘラ部に連續刺突文。尖羽状突文。内面にナデ。指痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
243	34 VI 2	AD-37	7.5YR2/1	箆棒貼り付け。ヘラ状工具による連續刺突文。内面に指痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
244	34 VI 2	AD-36	7.5YR4/4	口唇部に先刻状工具による刺突。外面上同工具による刺突。内面に指痕。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、審母	
245	34 VI 2	AP-37	10YR6/4	口唇部に先刻状工具による刺突。外面上同工具による刺突。内面に指痕。	無	白色粒子、黒色粒子、石英	
246	34 VI 2	AP-37	10YR6/4	先刻状工具による刺突。内面に指痕。	無	白色粒子、黒色粒子、石英、審母	
247	34 VI 3		7.5YR5/4	羽状縞文。内面にナデ。	有	白色粒子多、黒色粒子、石英、審母	
248	34 VI 3	AP-26	7.5YR5/4	羽状縞文。内面にナデ。	有	白色粒子、石英多、輝石	
249	34 VI 3	AP-36	7.5YR4/4	羽状縞文。内面にナデ。	有	白色粒子、石英	
250	34 VI 3	AD-36	7.5YR5/4	羽状縞文。内面にナデ。	有	白色粒子、石英、輝石	
251	35 VII 1	AF-29	SYRS/1	横棒の沈線。箆状工具による円形刺突。擦痕。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、審母、輝石、白色岩片	
252	35 VII 1	AD-36	7.5YR5/4	横棒の沈線。内面口唇部下方に繩文貼付かけ。刮み。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、輝石、白色岩片	
253	35 VII 1	AP-36	7.5YR2/1	半截竹管状工具による無地沈線。ボタン状貼付文による結束浮縞文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、審母多、輝石、白色岩片	
254	35 VII 1	AP-36	7.5YR4/4	口唇部に結束浮縞文。半截竹管状工具による無地沈線。ボタン状貼付文。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、審母多、輝石、白色岩片	
255	35 VII 1	AP-36	SYRS/5	波紋口縫。半截竹管状工具による羽状連續。裏方向の結節浮縞文。口唇部の波紋浮縞文。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英多、審母多、輝石多	
256	35 VII 1	AD-37	SYRS/1	半截竹管状工具による波紋沈線。	有	白色粒子多、黒色粒子多、石英、輝石	
257	35 VII 1	AJ-30	10YR6/4	半截竹管状工具による平行浮縞。	有	白色粒子多、黒色粒子多、石英多、輝石多、白色岩片	
258	36 VII 2	AD-37	10YR1/1	羽状縞文。半截竹管状工具による連續刺突。	有	白色粒子、黒色粒子、審母、白色岩片	
259	36 VII 2	AP-36	7.5YR5/6	羽状縞文。内面に擦痕。	有	白色粒子多、石英多、輝石、白色岩片	
260	36 VII 2	AD-23	7.5YR3/4	半截竹管状工具による刺突。	有	白色粒子、黒色粒子、石英、審母、輝石、白色岩片	
261	35 IX 2	AE-29	7.5YR6/6	波紋口縫。無地。	有	白色粒子多、黒色粒子多、石英、輝石、白色岩片	
262	36 X 1	T-32	7.5YR6/4	波紋口縫。口唇部に沈線。浮縞文貼付後刻し。沈線と縞文。透し穴。	無	白色粒子、黑色粒子、石英	
263	36 X 1	P-34	SYRS/1	波紋口縫。浮縞文貼付後。埋伏工具で刺突。沈線。内外面の口唇部返込みをき。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英多、輝石多、白色岩片	
264	36 X 1	P-34	SYRS/1	波紋口縫。口唇部に沈線。浮縞文貼付後刻し。埋伏工具で刺突。沈線。外側の口唇部返込みをき。	無	白色粒子多、黒色粒子多、石英多、輝石多、白色岩片	
265	36 X 1	T-32	7.5YR6/6	口唇部に横棒状工具の貼付文。沈線と縞文。内面にナデ。	無	白色粒子多、黒色粒子、石英、審母、輝石、白色岩片	
266	36 X 1	T-32	7.5YR6/6	口唇部に横棒状工具の貼付文。沈線と縞文。内面に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子多、石英多	
267	36 X 1	T-32	7.5YR4/6	口唇部に横棒。沈線。縞文と擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英	
268	36 X 1	T-32	7.5YR4/6	埋伏工具による沈線。縞文。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、審母、輝石、白色岩片	
269	36 X 1	I-34	7.5YR6/4	波紋。縞文。内面に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英、輝石	
270	36 X 1	I-32	7.5YR6/4	波紋。縞文。	無	白色粒子多、石英、輝石多	
271	37 X 2	T-33	10YR6/4	口唇部に字状貼付文。沈線。里面部に貼付文。沈線。内面にナデ。	無	白色粒子多、石英、審母、輝石	
272	37 X 2	K-34	7.5YR6/4	口唇部に字状貼付文。沈線。内面に擦痕。	有	白色粒子多、黑色粒子、石英多、輝石多、白色岩片	
273	37 X 2	AD-31	SYRS/6	波紋口縫。波縫部に杯状の貼付文と縞文。透かし穴。縞文。口縫部に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、白色岩片	
274	37 X 2	B-33	7.5YR6/6	沈線。縞文。内外面に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英、輝石	
275	37 X 2	B-32	7.5YR6/6	沈線。縞文。内外面に擦痕。	無	白色粒子多、石英多、白色岩片	
276	37 X 2	T-32	7.5YR4/6	沈線。縞文。内外面に擦痕。	無	白色粒子、石英、輝石	
277	37 X 2	T-31	7.5YR6/4	沈線。縞文。内外間に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英、審母	
278	37 X 2	T-32	7.5YR6/6	沈線。縞文。内外間に擦痕。	無	白色粒子多、石英多、輝石、白色岩片	
279	37 X 2	G-34	10YR7/6	沈線。縞文。内外間に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片	
280	37 X 2	AD-31	SYRS/1	波紋。縞文。内外面に擦痕。	有	白色粒子多、黑色粒子、石英、審母、輝石、白色岩片	
281	37 X 3	AH-31	7.5YR4/4	口唇部に縞文。	無	白色粒子多、黑色粒子多、石英多、輝石、白色岩片	
282	37 X 3	S-34	7.5YR6/3	口唇部。縞文。	有	白色粒子多、黑色粒子多、石英、輝石、白色岩片	
283	37 X 3	AI-31	10YR6/3	波紋。縞文。底部に動物圧痕。内面に擦痕。	無	白色粒子多、黑色粒子、石英、輝石	
284	XI 1	AD-36	10YR6/4	半截竹管状工具による連續刺突。粘土箆棒貼り付け。ナデ。赤鉛の沈線。	無	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片	
285	XI 2	AJ-31	7.5YR6/3	縞文。内面に擦痕。	有	白色粒子多、黑色粒子	
286	XI 2	AD-29	7.5YR6/3	裏方向の縞文。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石	
287	XI 2	AD-31	7.5YR2/1	針状の縞文。	有	白色粒子、黑色粒子	
288	XI 2	AD-31	10YR7/6	波紋。縞文。	有	白色粒子多、黑色粒子、石英、輝石	
289	XI 2	T-32	10YR6/4	裏方向の縞文。	有	白色粒子、黑色粒子、石英、輝石、白色岩片	
290	XI 2	AH-31	7.5YR6/4	波紋。縞文。	有	白色粒子多、黑色粒子多、石英、輝石	
291	XI 3	AD-31	SYRS/6	口唇部。無文。指痕。	有	白色粒子、黑色粒子、白色岩片	
292	XI 3	AJ-31	SYRS/6	口唇部。縞文。指痕。	有	白色粒子多、黑色粒子多、白色岩片多	
293	XI 3	AJ-30	SYRS/6	縞文の底部。	無	白色粒子、黑色粒子、石英多、輝石多	
294	XI 3	H-40	7.5YR7/4	縞文の底部。底に動物圧痕。	無	白色粒子多、黑色粒子多、石英、輝石、白色岩片	
295	XI 3	T-32	7.5YR6/6	縞文の底部。	無	白色粒子多、黑色粒子多、輝石、白色岩片	
296	XI 3	T-32	7.5YR6/6	縞文の底部。	無	白色粒子、石英多、輝石、白色岩片	
297	XI 3	AP-36	SYRS/8	縞文の底部。	無	白色粒子、輝石、白色岩片	